上の林遺跡

（第１次・第２次）

長野県上伊那郡箕輪町
緊急発掘調査報告書

昭和56年

箕輪町教育委員会

上の林遺跡第1次調査

昭和56年

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会
教育長　**樋口彦雄**

箕輪町には他に劣らぬ多くの埋蔵文化財の遺跡があるが、この上の林遺跡もその一つである。

箕輪工業高等学校は昭和23年新学制により中箕輪高等学校として地域の熱意により発足し、此の他に木造平屋の校舎を建築した。後県立高校に移管され、また工業高校となった。

高校建築整備事業により、昭和55年第1期として箕輪工業高校が改築されるため、同地籍にある埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施することが必要となった。

県立高校の敷地内の発掘であるが、地籍が箕輪町であるため事業の総てが町教育委員会に委託された。町としてはこれを積極的に受けとめ、県教育委員会文化課へも綿密な指導、助言を仰ぎ事業を推進した。そこで調査団長には第1・2次調査を通して丸山敞一郎氏を依頼し、又第2次調査からは、発掘調査に豊富な経験をもち、その道に精通された島田恵子調査主任を、調査員として山崎勝彦君を紹介していただくことができた。調査協力者としては町内の発掘にいつも参加していただいている大学、高校生、地元の作業員の皆さんに加わっていただき調査組織をつくることができた。

調査は授業のない夏休みを利用するように配慮され、工事着工前に終了しなければならないため綿密な計画で進められた。調査結果の細部については章を追って明らかにするが、主なものとして、上の林遺跡の始まる年代が、従来考えていたものよりかなり溯ること、又埋甕等の出土遺物に好資料が含まれていることなど貴重な成果と考える。

今後への念願として高校敷地の全域が遺跡であるため、今後校舎改築が進められるならば、今回同様に調査依頼は積極的に受けとめる考えであるため、地下に眠る貴重な文化遺産を保護するための配慮を特にお願いしたい。

7、8月という酷暑の中にあって厳しい作業を続けていただいた調査参加者の皆さん、又、本報告書作成にあたられた関係各位に厚く御礼を申しあげます。

1981. 12. 17.

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13238番地に所在する、上の林遺跡の第1次・第2次調査の報告書である。

2. 本調査は、箕輪工業高等学校の委託を受けた箕輪町教育委員会が実施した。

第1次調査は昭和55年8月10日～9月16日まで発掘調査をした。

第2次調査は昭和56年6月30日～7月21日まで発掘調査をした。

第1次調査の出土品整理は、調査終了後および56年2～3月にその一部を行ない、第2次調査終了後に第1次調査の残りを含め、同時に整理し、昭和57年2月20日まで箕輪町郷土博物館において報告書作成を行なった。整理作業の分担は次の通りである。

第1次調査整理作業　土器の復原――竹入洋子、福沢幸一、　遺構実測図の整理――馬場保之、中村哲二、　土器の実測――古屋公彦

第1次・第2次調査整理作業　土器の復原――島田恵子、　土器の実測・トレース――島田恵子、　土器の拓本・測面実測・トレース――山内志賀子、　石器の実測・トレース・一覧表――古屋公彦、　遺構実測図の整理・トレース――島田恵子、　写真図版の作成――山内志賀子、島田恵子、　土製品の実測・トレース――古屋公彦

尚、整理作業の中で、近藤尚義、五味純一君に一部お手伝いしていただいた。

3. 本書に掲載した遺構の写真は、第1次調査、柴登巳夫、木下久、第2次調査、柴登巳夫、山崎勝彦が撮影したものを使用した。尚、出土遺物の撮影は征矢進氏に御協力いただいた。

4. 石器の石質鑑定は樋口彦雄氏（箕輪町教育長）に、縄文土器に関しては武藤雄六、小林公明氏（井戸尻考古館）にアドバイスをいただいた記して厚くお礼申し上げたい。

5. 本書の執筆は整理担当者が行ない、文末にそれぞれの文責を記した。

6. 本書の編集は、島田恵子が行ない、丸山敞一郎団長が校閲、監修した。

7. 本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

凡　　例

1. 各遺構の略号は次の通りである。
   縄文時代の住居址――J　　弥生時代の住居址――Y　　平安時代の住居址――H
   土坑――D　　特殊遺構――T

2. 住居址実測図の縮尺は$\frac{1}{80}$としたが、小形なものは$\frac{1}{60}$、土坑、炉実測図の縮尺は$\frac{1}{30}$である。

3. 土器の実測図は$\frac{1}{4}$、土器拓影の縮尺は$\frac{1}{3}$、石器の実測図は$\frac{1}{3}$としたが、大形は$\frac{1}{4}$、$\frac{1}{6}$にしたものがあり、各々の実測図に明記してある。

4. 遺構平面図中に示した点は焼土を表わす。また、土器実測図（弥生）に使用したスクリーントーンは赤色塗彩を示す。

5. 断面図及びエレベーション図の平面レベルは統一してあるが、中には統一できなかったものもある。各図面に標高で記してある。

6. 図版中遺物の縮尺は、土器$\frac{1}{4}$、小形なものは$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{2}$とし、石器は$\frac{1}{3}$、大形なものは$\frac{1}{6}$とし、た。また、図版中の土器、石器番号を簡略した。例えば第10図1は10－1と表わす。図版は第1次調査と第2次調査を合せてつづったが、図版番号の下に（第1次）・（第2次）と明記して区別してある。

本　文　目　次

題　字　　教育長　樋口　彦雄

序　　〃　〃　〃

例　言

凡　例

本文目次

付表目次

挿図目次

第１章　発掘調査の経緯……1

第１節　調査に至る動機……1

第２節　調査の概要……1

第３節　発掘調査日誌……5

第２章　遺跡の環境……8

第１節　上の林遺跡付近の自然環境……8

第２節　考古学的環境……8

第３章　層　序……11

第４章　遺構と遺物……13

1．住　居　址……13

1）　Ｙ１号住居址……13

2）　Ｊ２号住居址……15

3）　Ｙ３号住居址……18

4）　Ｈ４号住居址……20

5）　Ｙ５号住居址……23

6）　Ｙ６号住居址……25

7）　Ｙ７号住居址……25

8）　Ｊ８号住居址……27

9）　Ｊ９号住居址……37

10）Ｊ10号住居址……41

11）Ｊ11号住居址……44

2．土　坑……48

1）　Ｄ１号土坑……48

2） Ｄ２号土坑……49
3） Ｄ３号土坑……49
4） Ｄ４号土坑……49
5） Ｄ５号土坑……50
3. 特 殊 遺 構……50
1） Ｔ１号特殊遺構……50
2） Ｔ２号特殊遺構……51
4. 掘立建物址・ピット群……52
1） 第１掘立建物址……52
2） 第２掘立建物址……53
3） ピット群……53
5. グリッド出土遺物……54
6. 石 器……57
7. 土 製 品……61

付 表 目 次

第１表 上の林遺跡出土石器一覧表……63

挿　図　目　次

第１図　上の林遺跡周辺の地形と発掘区設定図 …… 4
第２図　周辺遺跡分布図 …… 9
第３図　上の林遺跡層序模式図 ……11
第４図　上の林遺跡第１次・第２次調査検出遺構全体図 ……12
第５図　Ｙ１号住居址・Ｊ２号住居址実測図 ……14
第６図　Ｙ１号住居址出土遺物実測図 ……15
第７図　Ｙ１号住居址出土土器拓影 ……15
第８図　Ｊ２号住居址出土遺物実測図 ……16
第９図　Ｊ２号住居址出土土器拓影 ……17
第10図　Ｙ３号住居址実測図 ……19
第11図　Ｙ３号住居址出土遺物実測図 ……20
第12図　Ｙ３号住居址出土土器拓影 ……20
第13図　Ｈ４号住居址実測図 ……21
第14図　Ｈ４号住居址カマド実測図 ……21
第15図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図 ……22
第16図　上の林遺跡出土概出遺物実測図 ……22
第17図　グリッド出土平安時代の遺物実測図 ……22
第18図　Ｙ５号・Ｙ６号・Ｙ７号住居址実測図 ……24
第19図　Ｙ５号住居址出土土器拓影 ……25
第20図　Ｙ７号住居址出土遺物実測図 ……26
第21図　Ｙ７号住居址出土土器拓影 ……27
第22図　Ｊ８号住居址実測図 ……28
第23図　Ｊ８号住居址炉実測図 ……29
第24図　Ｊ８号住居址出土遺物実測図　No.１ ……30
第25図　Ｊ８号住居址出土遺物実測図　No.２ ……31
第26図　Ｊ８号住居址出土遺物実測図　No.３ ……32
第27図　Ｊ８号住居址出土土器拓影　No.１ ……34
第28図　Ｊ８号住居址出土土器拓影　No.２ ……35
第29図　Ｊ８号住居址出土土器拓影　No.３ ……36
第30図　Ｊ９号住居址実測図 ……37

第31図　Ｊ９号住居址出土埋甕実測図……38
第32図　Ｊ９号住居址出土石蓋実測図……39
第33図　Ｊ９号住居址出土遺物実測図……39
第34図　Ｊ９号住居址出土土器拓影……40
第35図　Ｊ10号住居址実測図……41
第36図　Ｊ10号住居址出土遺物実測図……42
第37図　Ｊ10号住居址出土土器拓影……43
第38図　Ｊ11号住居址実測図……45
第39図　Ｊ11号住居址出土遺物実測図……46
第40図　Ｊ11号住居址出土土器拓影……47
第41図　Ｄ１号土坑実測図……48
第42図　Ｄ２号土坑実測図……49
第43図　Ｄ３号土坑実測図……49
第44図　Ｄ４号土坑実測図……50
第45図　Ｄ５号土坑実測図……50
第46図　Ｔ１号特殊遺構実測図……51
第47図　Ｔ２号特殊遺構実測図……52
第48図　第１掘立建物址実測図……53
第49図　第２掘立建物址実測図……54
第50図　ピット群実測図……55
第51図　グリッド出土遺物実測図……55
第52図　表採・グリッド出土土器拓影……56
第53図　表採・グリッド出土の弥生土器拓影……57
第54図　上の林遺跡出土石鏃その他実測図……58
第55図　Ｊ10号住居址出土石器実測図……59
第56図　上の林遺跡出土石棒実測図……60
第57図　上の林遺跡出土石皿実測図……61
第58図　上の林遺跡出土銅鏃……61
第59図　上の林遺跡出土土製品実測図……62

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査による動機

本地区は、上の林遺跡として町内でもすぐれた遺跡の一つとして知られている。現在までに縄文時代から平安時代までの数多くの遺物が表採されており、この台地一帯が包蔵地として注目されてきた。

この台地上に現在、県立箕輪工業高等学校があり、校舎の老朽化に伴い昭和55年度から高等学校の改築工事が予定され、遺跡の現状保存は困難という見解に達し、長野県教育委員会より箕輪町教育委員会に発掘調査が委託された。県文化課の指導のもとに調査計画内容を検討し、校舎の改築工事が昭和55年度、56年度と引き続き行なわれるため、調査も第１次・第２次発掘調査とし、諸届を済ませた。

昭和55年度は８月から、昭和56年度は７月から丸山敞一郎氏を調査団長とする調査団をそれぞれ組織し記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなったのである。

第２節　調査の概要

●遺　跡　名　上の林遺跡

●所　在　地　長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13238番地

●発 掘 期 間　昭和55年８月10日～９月16日

●調査委託者　箕輪工業高等学校長　　高橋　博彦

●調査受託者　箕輪町教育委員会

●調査会・調査団の構成は下記の通りである。

調査会

会　長	市川　脩三	町誌編纂専門委員
理　事	荻原　貞利	教育委員会社会教育指導員
〃	細井　武人	〃
〃	大槻　　剛	町誌編纂委員
監　事	小林　重男	郷土博物館専門調査員
〃	堀口　貞幸	郷土博物館協議委員

調査団

団　長	丸山　敞一郎	長野県伊那弥生ケ丘高等学校教諭・日本考古学協会員
主　任	柴　　登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
調査員	木下　　久	立教大学学生
	小池　幸夫	静岡大学学生
	北条　芳隆	岡山大学学生
	三沢　　恵	立正大学学生
	福沢　幸一	中央道調査員

作業協力者

中島　元博	馬場　保之	中村　哲二	石堂　雅子	井内　裕司
河手　郁哉	唐沢　信行	木下えりか	清水今朝雄	和田　茂夫
立石　英教	関　　秀光	中村富美子	河合　裕三	武井　敦志
五味　純一	柴　　義雄	伯耆原　悟	山口　豊子	柴　　義直
柴　　金弥	古屋　公彦	唐沢　初子	唐沢　清人	柴　　義政
小池　保則	吉江　康輔（箕輪工業高校教諭）			

参　与

馬場　昭一	教育委員会教育委員長
原　　茂人	〃　　〃　　職務代理
戸田　宗十	教育委員会教育委員
桑沢　良平	〃　　〃
春日　琢爾	文化財保護審議会委員長
藤田　寛人	〃　　〃　副委員長
荻原　貞利	文化財保護審議会委員
星野　和美	〃　　〃
矢沢　喬治	〃　　〃
市川　脩三	〃　　〃
小川　守人	〃　　〃
堀口　貞幸	〃　　〃
上田　晴生	〃　　〃

●調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口　彦雄	教育委員会教育長	
唐沢　行明	〃	教育課長
太田　文陳	〃	社会教育係長
中村　文好	〃	社会教育主事
柴　登巳夫	郷土博物館学芸員	
竹入　洋子	〃	〃

（文責　事務局　竹入　洋子）

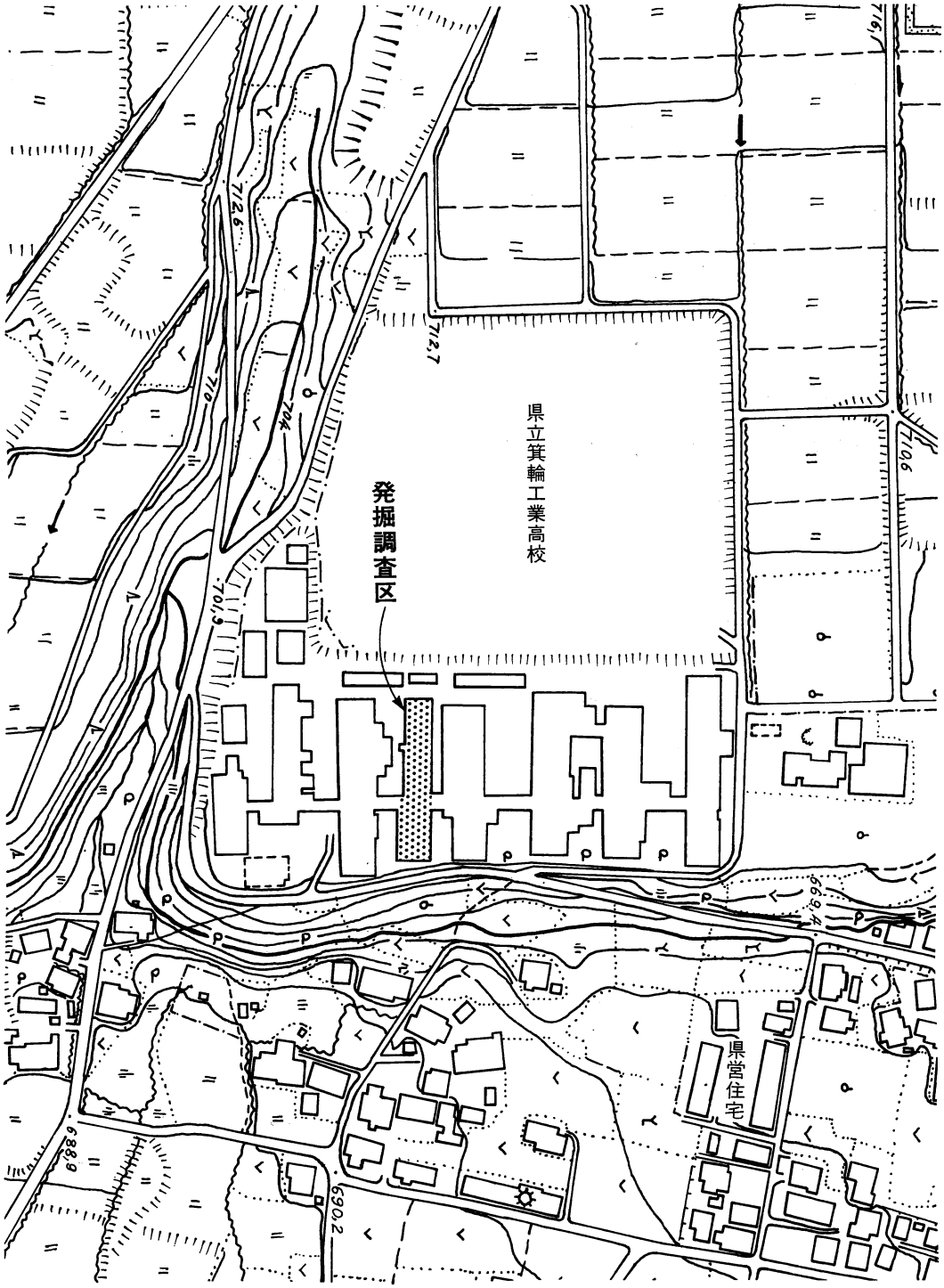
●第1次調査の報告書作成に関する整理作業は、第2次調査団の下記の者が担当した。

○　島田　恵子

○　山内　志賀子

○　古屋　公彦

○　近藤　尚義・五味　純一君には一部お手伝いいただいた。



第Ⅰ図　上の林遺跡周辺の地形と発掘区設定図（Ⅰ：2500）

第３節　発掘調査日誌

○８月10日　（月）　晴

調査用資材を原地へ搬入。テントの設営。旧校舎取りこわしに重機を使用し、その上を整地したため調査面が非常に堅くなっている。

○８月12日　（火）　晴

グリッド設定の用意を始めようとしたが、調査面があまりにも堅く、現状から手掘りを始めても作業が進行しないとの結論を出し、ブルトーザーを入れ表土を取り除くことを計画する。その作業中に縄文時代中期、土師器等の遺物が出土する。又住居址の落込みとおもわれる部分が露出する。

○８月13日～17日迄お盆のため発掘調査は休み。

○８月18日　（月）　くもり

朝丸山団長が見えられて、調査全般についてのお話しがある。10時よりブルトーザーが入り表土の廃土を始める。

調査区西寄りに方形の落込みがあり、弥生時代の住居址であろう。他にも何ケ所か落込みがあることが確認される。

○８月19日　（火）　くもり

調査区西角に弥生時代後期の住居址が検出される。ブルトーザーによる廃土作業が本日一日かかる。そのため調査は弥生時代住居址に集中する。廃土作業中に縄文土器片が出土。弥生時代の住居址からは出土土器片は少ない。

○８月20日　（水）　雨

朝から一日雨であったが作業を続行した。調査区北寄りに２ケ所の落込みあり。Ｂ－５グリッド中心に直径２メートルぐらいの円形落込みあり、Ａ－７、Ｂ－７グリッドにかけ楕円形の落込み発見。Ｂ、Ｃ、Ｄ列の４～10グリッドにかけ直径20～30センチのピットが10ケ所程度発見される。

○８月21日　（木）　くもり後雨

天気が悪く作業を進めるのに大変苦労である。調査区南側半分を平にする作業を続ける。調査区中央付近に３ケ所の落込みが確認される。弥生式土器片がかなり出土。

○８月22日　（金）　くもり後雨

調査区中央付近に建物址のコンクリート基礎が残っており、これを取り除く作業が大変である。雨の中での作業が連日続く。

○８月23日　（土）　くもり後雨

作業内容は昨日と同じ、各部分に落込みが確認されており、遺構がかなりの数になると予想されるが、遺構検出に至る以前の余分な作業が多く、全体的日数が延びると考えなければならない。

○８月24日　（日）　晴

調査区南寄りの表土整地作業、調査区北寄りを平らにし、遺構の状況確認。柱穴状の落込みが列に並び、建造物址的な遺構が考えられる。Ａ－５グリッドを中心に弥生時代の住居址確認。

○８月25日　（月）　晴

Ａ－５・６グリッド中心に径２メートル程

の落込みあり、これを調査開始、Ｔ１号特殊遺構とする。Ａ－７グリッド中心の落込みをＴ２号特殊遺構とする。第１・２号共に須恵器、土師器片の出土があったが、どのような性格の遺構か決定しがたい。調査区東南の角から縄文中期の土器片が出土。

○８月26日　（火）　雨

雨天のため作業休み。

○８月27日（水）　　くもり

調査区内に雨水が溜っており作業できず。

○８月28日　（木）　くもり後晴

Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ列の１・２グリッドの廃土作業、Ｉ・Ｊ列、５～９グリッドの廃土作業を進める。作業員の増員を計り、作業の進行を早くする。

○８月29日　（金）　くもり

Ｈ－１グリッドに土坑が確認され、半カットをして土層の調査を進める。

Ｔ２号特殊遺構の南に広い落込みがあり、一部住居址の床面が確認される。調査区東寄りに落込みが確認され、これをＨ４号住居址とする。灰釉坏片が出土する。Ｄ－４グリッドから縄文中期土器が集中して出土する。

○８月30日　（土）　くもり

Ｈ４号住居址東壁の断面図作成。Ｄ２・３号土坑を半カットして断面図作成、各遺構についてもプラン確認の調査を進める。

○８月31日　（日）　雨

雨天のため作業休み。

○９月１日　（月）　晴

柱穴群の測量、Ｄ２・３・４号土坑の地層断面調査、第１・２掘立建物址の測量を進める。Ｙ３・５号住居址の床面精査。調査中央に大きな楕円形落込みがあり、これをＪ８号住居址とする。Ｙ３号住居址より弥生時代の土器片多量に出土、この住居址は火災を受けているように思える。

○９月２日　（火）　晴

Ｊ８号住居址のプラン確認を進め、住居址内の廃土を行なう。Ｙ３号住居址測量。Ｈ４・Ｙ５号住居址精査。柱穴群の測量を終了した後、この範囲に大きな落込みがあることが確認される。ここを中心に調査を進める。

○９月３日　（水）　晴

Ｊ８号住居址の北側の落込みを進める。Ｊ８号住居址東北寄りに、ミニチュア土器出土。Ｙ３号住居址床面に３個体の土器出土。又この住居址の中央に６個のピットが配置されている。深さ10センチ程度。

○９月４日　（木）　晴

１・３・４号住居址の測量実施。Ｊ８・10・11号住居址を中心に作業を進める。Ｊ８号住居址東寄りから土偶頭部出土。Ｊ10号住居址西壁に石棒の欠損頭部出土。Ｊ11号住居址中央に埋甕炉が確認される。

○９月５日　（金）　晴

Ｙ５号・Ｊ８号住居址床面上調査。Ｊ10・11号住居址の断面図作成。Ｊ10号住居址より埋甕３個出土。磨製石斧出土。

○９月６日　（土）　雨後くもり

雨のため作業中止。遺物整理作業を実施。

○９月７日　（日）　くもり

昨日の雨のため、雨水が溜っており、作業ができず中止、遺物整理作業を行なう。

○９月９日　（火）　くもり後雨

Ｊ10号住居址測量、Ｊ８号住居址を引き続

き調査、周溝がかなり深く巡っている。J11号住居址の断面図作成。J８・10・11号住居址から土器多数出土。

○９月10日　（水）　くもり後雨

J８号住居址全面精査、中央の大きなピットから大土偶の胴部出土、J11号住居址測量、Y５号住居址のベルトをはずして調査。

○９月11日　（木）　晴

J11号住居址測量、Y５・６・７号住居址のベルトをはずし内部の精査を開始。J10号住居址測量、各住居址共に精査の終了したところから写真撮影を行なう。

○９月12日　（金）　晴

J10号住居址の埋甕３個の掘り上げ作業、J11号住居址の炉の調査、J８号住居址実測作業、Y５・６・７号住居址の調査続行。

○９月13日　（土）　晴

Y５・６・７号住居址精査、実測、写真撮影、J８号住居址の埋甕を掘り出す作業。４個ある。J９号住居址に石蓋付きの大埋甕を確認する。

○９月14日　（日）　晴

J８・９号住居址の埋甕を掘り出す作業を中心に進める。J９号住居址測量。J９号住居址の石蓋付き大埋甕はすばらしいものである。ほぼ作業完了。

○９月16日　（火）　晴

Y７号・J９号住居址の記録が一部残っていたが本日終了し、すべて完了である。ブルトーザーによる土のもどし作業を行う。

調査後まず遺物洗浄を行なう。その後註記、接合、複原、土器実測、図面整理等の一部を行う。

（柴　登巳夫）

第２章　遺跡の環境

第１節　上の林遺跡付近の自然環境

箕輪町は、東の三つ峰（1,400m）から、西の黒沢小（2,100m）、北は漆戸部落（720m）から、南は木ノ下部落（700m）の広がりを持つ地域である。

このほぼ中央を天竜川が北より南に流れて伊那谷を形成する。この天竜川より東の山地は赤石山系に、西は木曽山系に属するが、この西の山系の裾から広がる扇状地の末端の河岸段丘の上に、上の林遺跡がある。また西の山系は変成岩を主とし、チャートの露頭もあり、粘板岩、礫岩も見られ、天竜川に至る間は、天竜礫層を経て沖積層となっている。この天竜礫層をおおっているのが、御岳ロームである。ロームについて、西の山麓にある箕輪西小学校の全面改築の際のボーリング検査の結果約25m、学校と上の林遺跡との中間、中原集落の箕輪町上水道削井工事の報告によれば約70mほどの地下に砂礫混入のロームを確認している。

上の林遺跡のある扇状地の末端の段丘崖には常に湧水が多く、現在も湧き出ており、広く利用されている。扇状地に田切地形をつくっているのは、近くの帯無川である。天竜川に流入するわけであるが、川の名称が尾水無川から転じたと言われる位に伏流水となっている。

西山麓への扇状地は、現在川岸より取水し伊那市に至る26kmの用水路（西天竜）を開発し上伊那の穀倉となっているが、開田前は平地林が山麓まで続いていた。

段丘崖、ローム層、原野はここに先史、原始時代の住居跡の多いことの要件と考える。

（樋口　彦雄）

第２節　考古学的環境

箕輪町は天竜川をはさんで典型的な河岸段丘と、数多い扇状地とが独得の地形を作りだし、絶好の居住性をもつ一帯は遺跡分布の密な地域である。先史より近世に至るまでの歴史上の遺跡に富み、その総数200ケ所に及び伊那谷においても屈指の遺跡地帯である。町内の遺跡を立地する条件により分類すると、次の四つに分けられる。

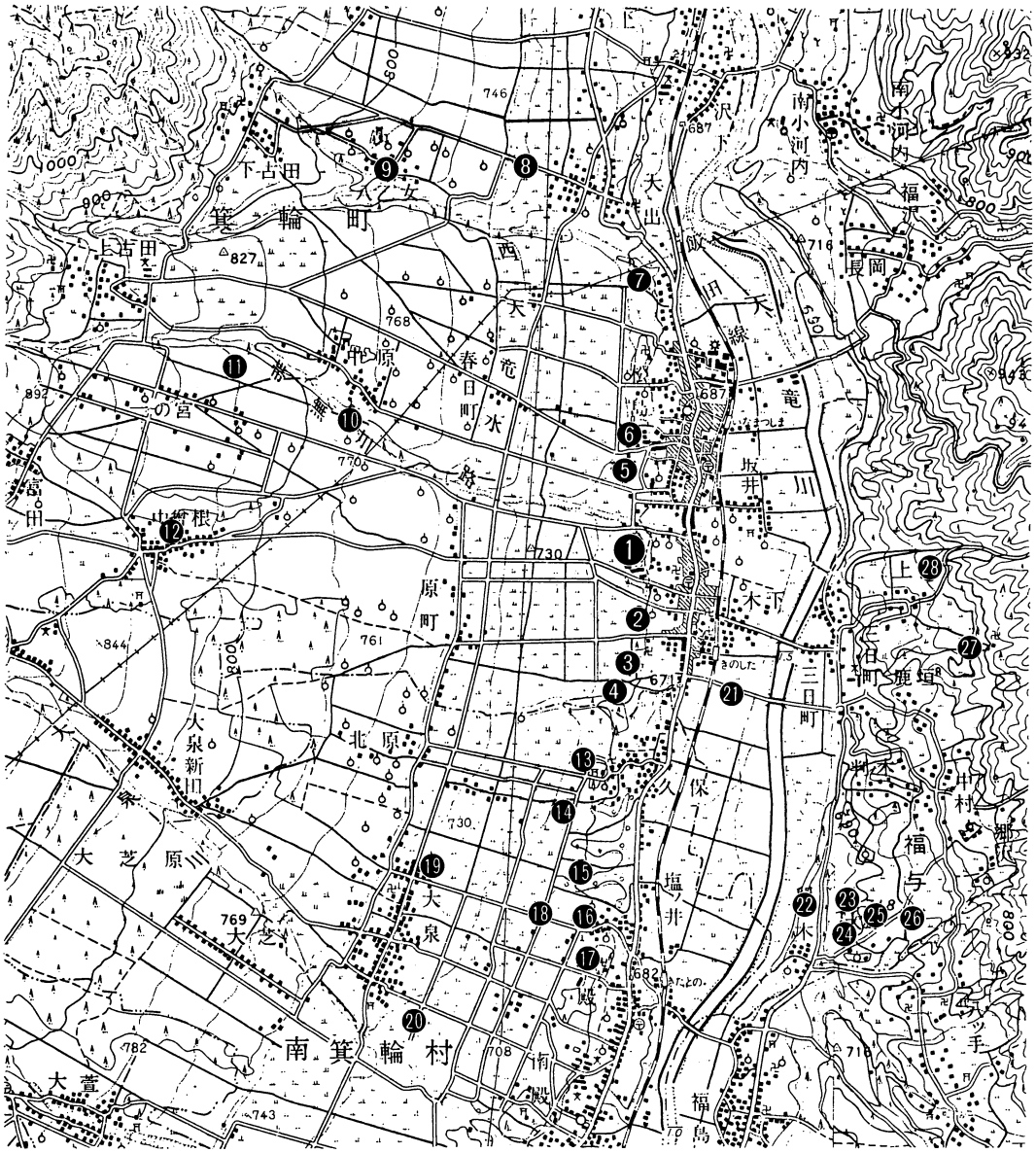
第１群　経ケ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡。

第２群　天竜川西岸の段丘上に列上に並ぶ遺跡。

第３群　天竜川東岸の段丘上及び扇状地に立地する遺跡。

第４群　低位段丘（沖積段丘）の遺跡。

上の林遺跡は第２群に属する遺跡の一つである。まずこの段丘上の遺跡群について考察すると、


❶上の林 ②北 城 ③南 城 ④猿 欅 ⑤藤 山 ⑥中 山 ⑦王墓古墳
⑧中 道 ⑨五 輪 ⑩並木下 ⑪一の宮 ⑫中曽根北 ⑬向 垣 外 ⑭山 の 神
⑮天 伯 ⑯上人塚 ⑰垣 外 ⑱内 城 ⑲大 泉 ⑳宮 の 上 ㉑箕輪遺跡群
㉒北垣外 ㉓黒津原 ㉔矢 田 ㉕上 金 ㉖大 原 ㉗澄心寺下 ㉘御 射 山

第２図　周辺遺跡分布図

南側には洞一つ隔てて位置するのが北城遺跡である。第2群中において最大の規模を持っていると思われる。昭和46年長野県企業局の分譲住宅団地造成事業に伴い緊急発掘調査を実施し、縄文中期から中世に至る大複合遺跡であることが判明した。この調査において弥生時代後半の大集落の一部とみられる23戸の竪穴住居址と20余基の中世火葬墓群が検出され注目される遺跡である。その南には南城遺跡、猿楽遺跡と続き、それぞれ発掘調査が実施されている。

町境になっている油ケ沢を越えて南箕輪村の遺跡群に目を移すと、やはり段丘上には多数の遺跡が存在している。沢を越えると、南垣外、丸山、天王森、上人塚、垣外と並び、天伯遺跡は昭和42年の土地改良事業に伴う緊急発掘調査によって、縄文中期から平安時代に至るまでの大複合遺跡であることが確認されている。又その南には昭和33年の発掘調査によって、ローム層内から発見された槍先型尖頭器をはじめとする多数の石器類が出土した神子柴遺跡がある。

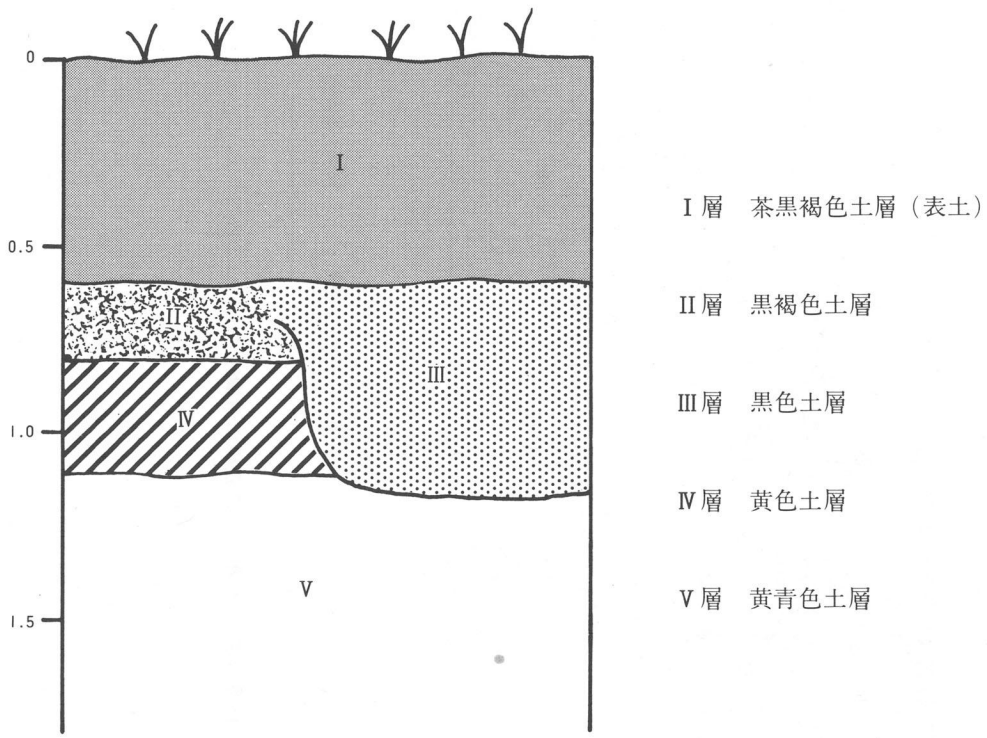
次に上の林の北側には、藤山、中山、本城と続き、深沢川南の段丘上突端には上伊那郡唯一の前方後円墳「松島王墓」がある。前方部が後円部よりやゝ高く、中央のくびれ部の左右に造り出しが付けられ、この点県下で唯一の車塚形式の古墳である。

次に第4群の低位段丘の遺跡に目をやると、天竜川氾濫原上に存る代表遺跡として「箕輪遺跡」を上げなければならない。箕輪遺跡は飯田線木下駅東方から、南箕輪村塩ノ井地籍までの広範囲に及ぶ大遺跡である。昭和27年から施行された土地改良事業によって、当該地籍から縄文時代中期より近世に至る多量の遺物が出土した。なかでも注目されたのは、田舟、田下駄、木製人形、木製農耕具、木器類、更には延長4,000メートル余、数量数万本に達するといわれた木柵等である。昭和55年度から一部に発掘調査のメスが入れられている。

古墳時代に松島王古墳が築かれたり、中世末（天正10年）には箕輪遺跡の中央に位置する水田の中に「田中城」が築かれたのも、一帯から生産される米が大きな力となっていたであろう。弥生時代から近世に至るまで、段丘上の集落と段丘下沖積面の水田とのかかわりは、米生産の背景とし、政治、経済の中心地として続いたのである。

（柴　登巳夫）

第3章　層　　序



第3図　上の林遺跡層序模式図

I層は、茶黒褐色を呈し粒子が粗い。校舎建設による基礎工事のため攪乱され、礫および粘性の強い黒褐色土を多量に混入する。

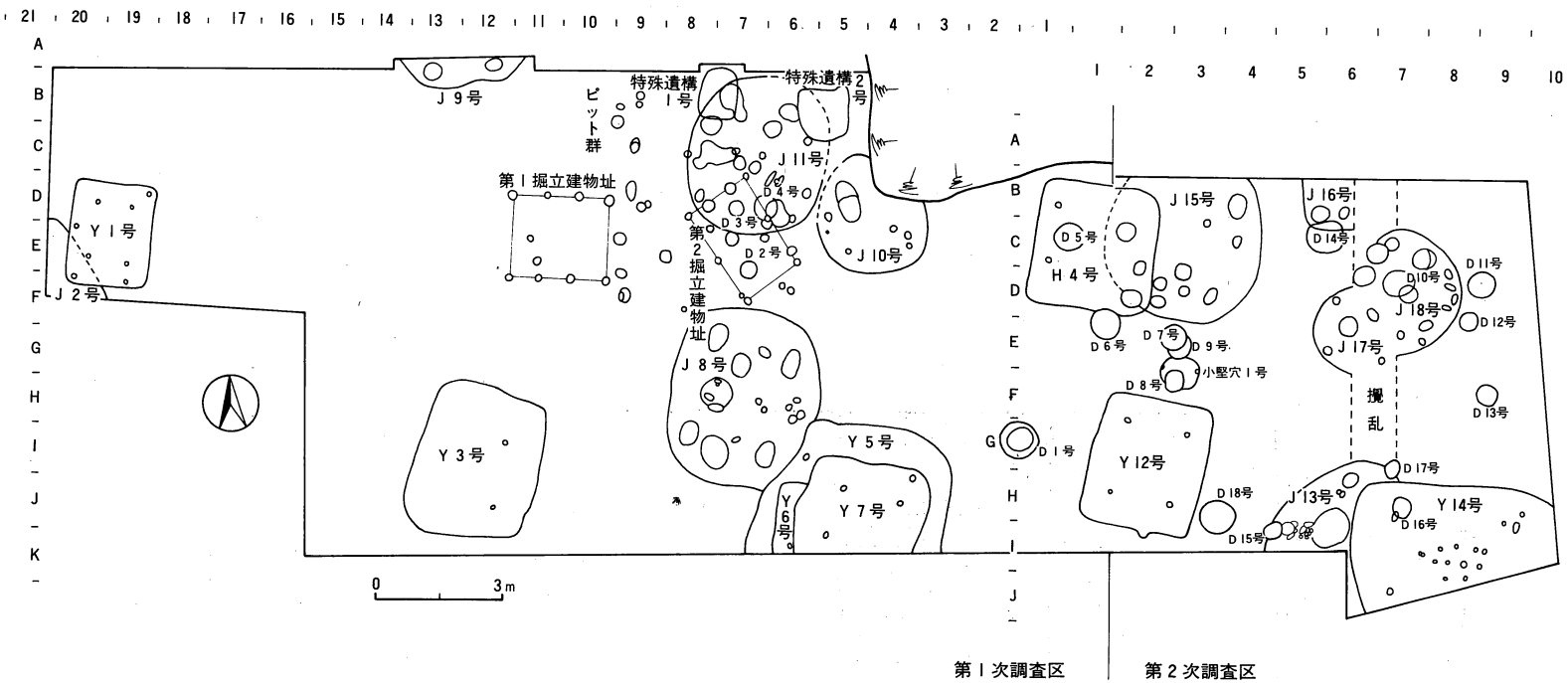
II層は、黒褐色を呈し粒子細く、遺物を多量に包含する。この層の下部より遺構の掘り込みが確認された。また、この層からIV層にかけて、所々に校舎建設による攪乱がみられた。

III層は、遺構覆土である。炭化粒子、遺物を多量に包含する。

IV層は、粘性の強い黄色土層の地山である。

V層は、黄色ローム層と良質の青色粘土層を混入した土層で、いくつかの土坑はこの層の直上まで掘り込まれている。

（島田　恵子）



第4図　上の林遺跡第1次.第2次調査検出遺構全体図(1：300)

第4章　遺構と遺物

1. 住　居　址

1）Y1号住居址

遺　構（第5図）

本住居址は、D・E・F－19・20グリッド内より検出された。J2号住居址を切って構築し調査区の最も西寄りに位置している。調査区の西が高く、東が低い状況になっているため、校舎建設時の整地作業において削り取られ、ローム層面までわずかになっていた。そのため平面プランは容易に確認することができた。それによると南北壁300cm、西壁415cm、東壁390cmで隅丸長方形を呈する住居址である。主軸方位はN－12°－Eを示している。検出した部分の壁高は、12～20cmを測りやや急な立ち上りを示している。

住居址内には、何ヶ所か焼土ブロックが残り、本住居址が火を受けたことを物語っている。床面は踏み固められた堅い床で、ほぼ平らである。覆土は4層で形成されており、II、III層には炭化粒や焼土の混入が見られる。ピットは多数検出されたが、位置的にみてP_1～P_4が主柱穴で、状況はほぼ同じ様相を呈しているが、P_4だけ他のピットより20cmほど深くなっている。他にもピットは多数検出されているが、主柱穴のような深さはないが、P_5、P_6、P_{12}、P_{15}などは四角の同じような所に位置していることから、支柱穴的施設であろうとおもわれる。P_{11}は40×37－20cmで大きく、貯蔵穴の役目をしていたと考えられる。

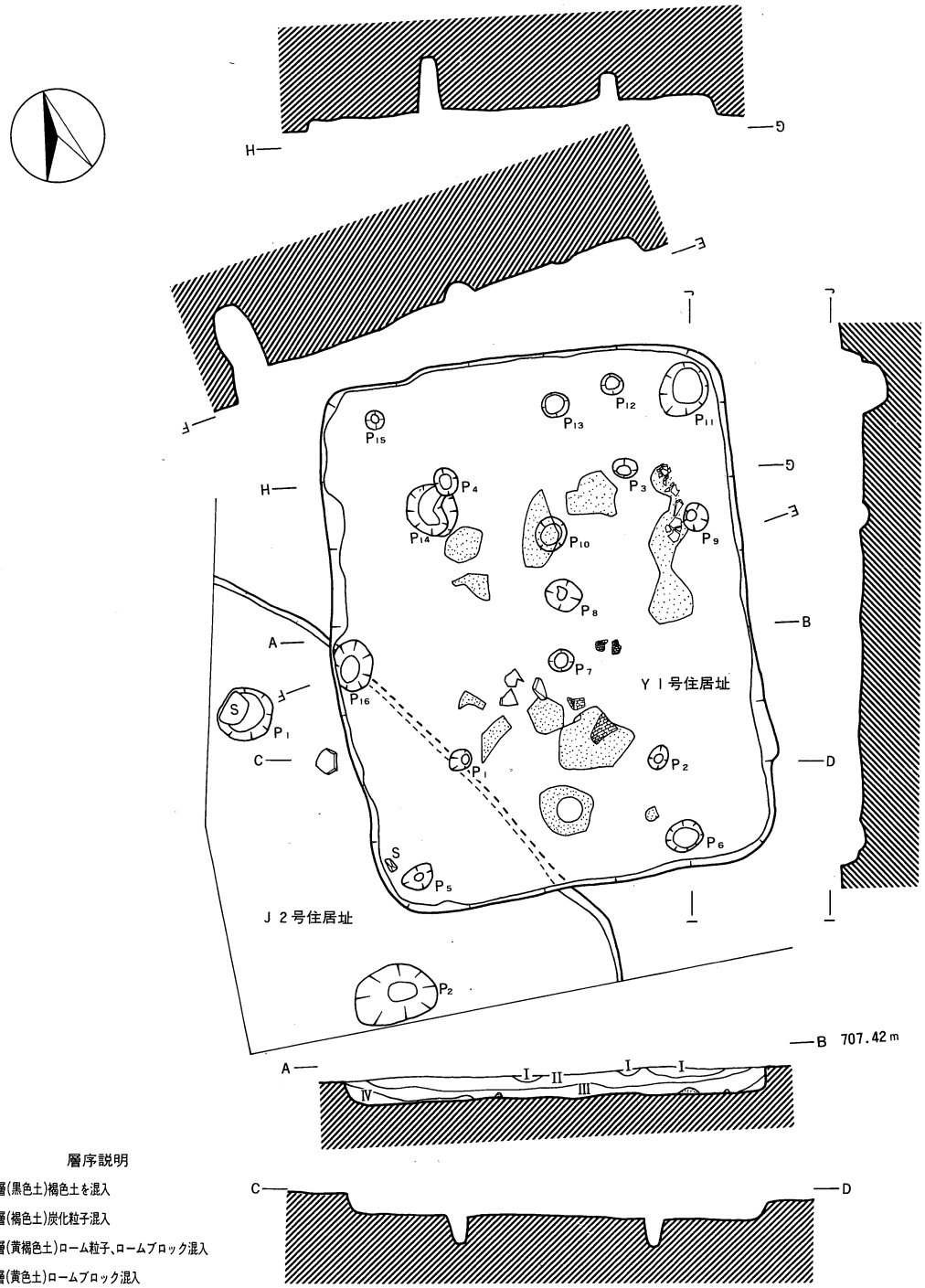
埋甕炉は、P_1とP_2のほぼ中間に位置している。埋設されていた甕は熱を受けて、とりあげた時点で細片となってしまった。

本住居址の全体的様相は、弥生時代の住居址としては、プランその他の施設等から見ても、平均的な住居址である。　　（柴　登巳夫）

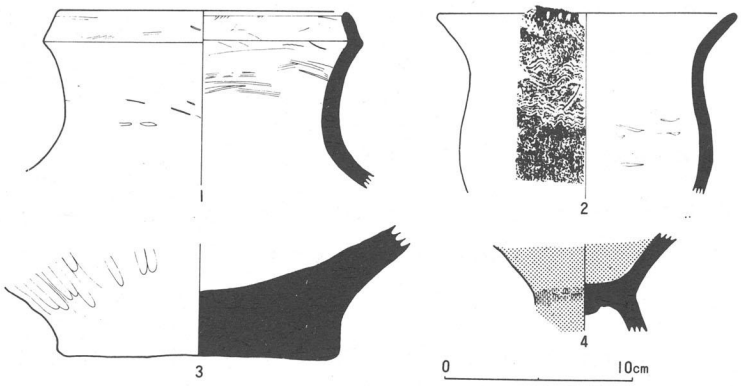
遺　物（第6図）

本住居址からの出土遺物は、破片のみで図示できたものは4点である。1は、段を有す壺形土器で、口径15.5cmを測る。口縁端部はくの字状に内屈する。体部は球形状に丸味を帯びるものとおもわれる。無文であり、口縁段部から頸部にかけて横ナデの後、ハケ調整がなされているが内面頸部は調整がなく器膚が荒い。金雲母、砂粒を多量に含み白味を帯びた褐色を呈す。

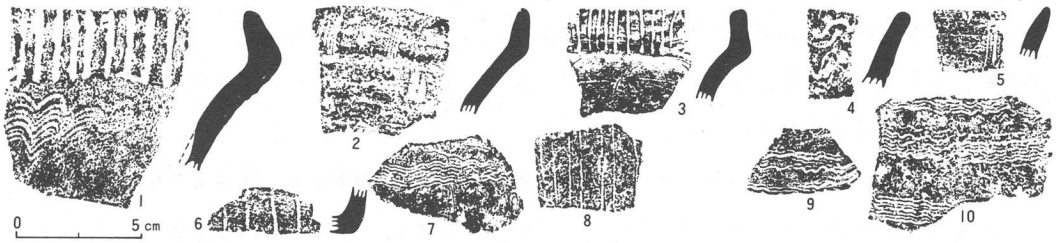
2は、最大径を口縁に持つ胴長の小形甕で口径16cmを測る。口唇部に刻目文を持ち、頸部に振巾の狭い6条の波状文2帯が施されている。焼成は良好で赤褐色を呈す。内面に焼成時の煤が付着し、外面に煮こぼれのおこげ痕がベッタリ付着している。



第5図　Y I 号住居址. J 2 号住居址実測図(I ：60)



第６図　ＹＩ号住居址出土遺物実測図（Ｉ：４）



第７図　ＹＩ号住居址出土土器拓影（Ｉ：３）

３は、底径15cmを測る大形壺の底部である。粗雑な調整と焼成が悪いため器膚はザラついている。縦方向のヘラミガキがなされている。

４は、高坏の台部から脚部にかけての破片である。内外面共に赤色塗彩されているが、器膚が荒い部分の塗彩は剝落している。

拓影に図示した土器片は、口縁部段上の篦描沈線文、胴上部の波状文等である。２、10は、青灰色を呈し器膚が荒い。３は、固く焼きしめられている。その他は器膚が粗く焼成が悪い。

本住居址は、以上の土器群から弥生後期後半中島式に比定されよう。

（島田　恵子）

２）Ｊ２号住居址

遺　構（第５図）

本住居址は、Ｅ・Ｆ－19～21グリッド内にて検出された。第５図に見るごとく、Ｙ１号住居址の角で一部を切られ、又、住居址の80％以上が調査区外とあって、ほんの一部分だけの調査となった。

床面は、Ｙ１号住居址よりやや高く、ほぼ平面を呈している。P_1あるいはP_2が主柱穴の一つ

になるのではと推測する。P_1は45×40−55cmを測る。壁も一部しか検出されず、それも不安定な状況である。（柴　登巳夫）

遺　物（第8図・9図）

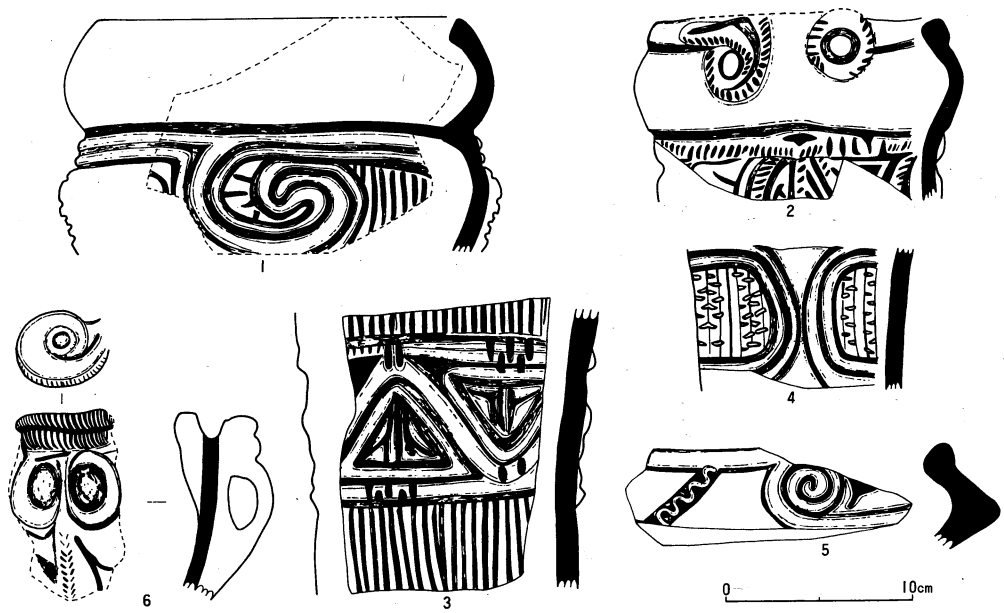
本住居址は、調査区域の境界であったことと、Y1号住居址に切られていたため、ほんの一部の調査であった。そのため、出土遺物も小破片のみである。したがって図示できたものは6点である。

1は、頸部のくびれ、口縁・胴部にかけての内湾から、井戸尻Ⅲ式に最も盛行する台付甕形土器であるとおもわれる。胴上部からの区画文には、櫛形および蛇体の抽象表現がうかがわれる。黒褐色を呈し、表裏共になめらかな膚である。

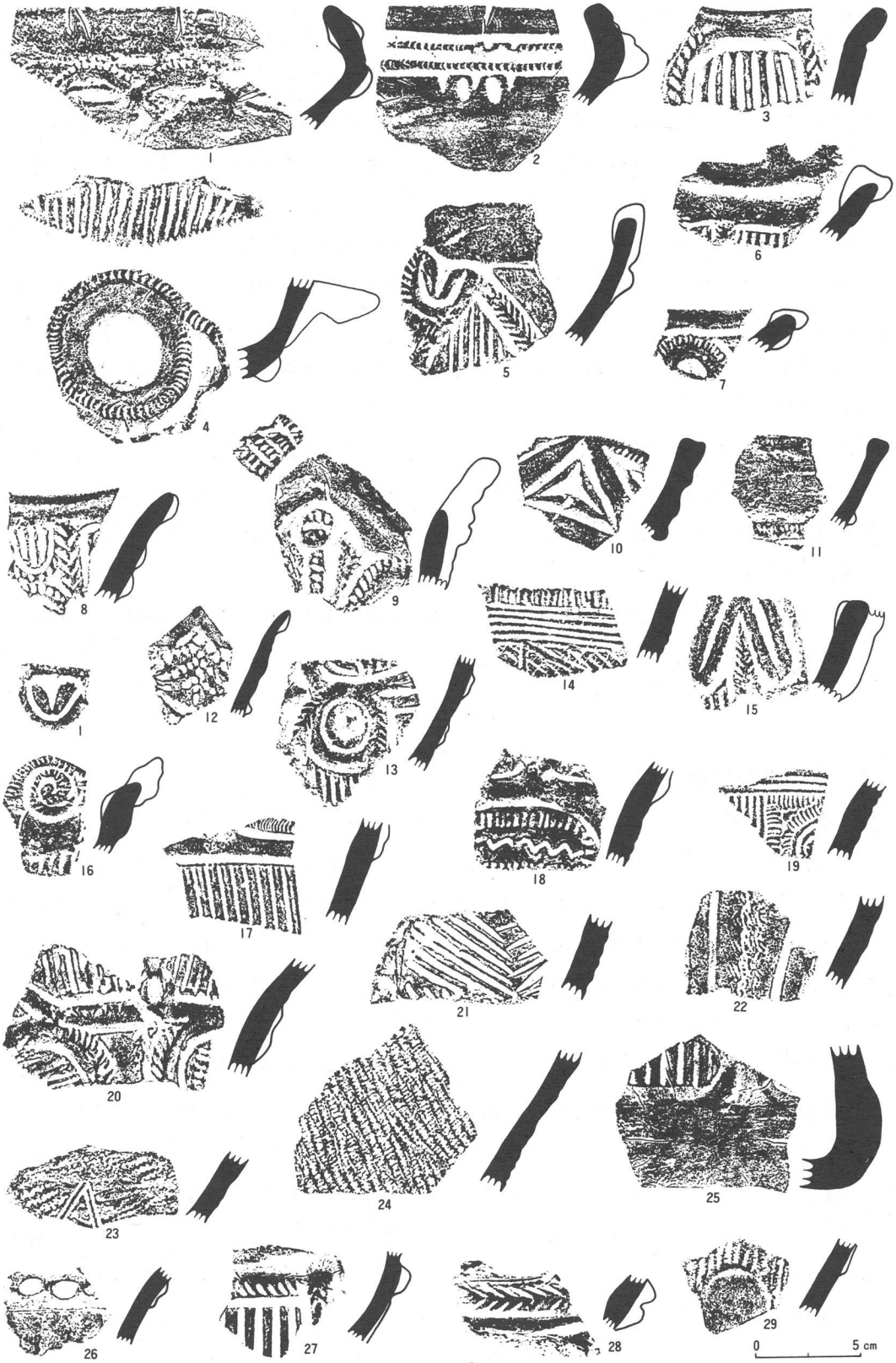
2は、屈折底をもつとおもわれる深鉢で、口縁から口唇部にかけて蛇体文の突起がついたとおもわれるが蛇体頭部の突起が欠落する。頸部くびれ部に連続楕円刻文を施した隆線が配され、半肉彫三叉文もみられる。茶褐色を呈すが、内面は使用中に染みこんだとおもわれる黒色の染みとお焦痕がうっすら認められる。

2は、筒形状の胴部をもつキャリパー形の深鉢である。文様構成は、懸垂文の中間に三角区画文をもち、区画内に半肉彫三叉文が配されている。茶褐色を呈し、長石、石英粒が目立つ。

4は、2より小形ではあるが同様な器形をもつものである。楕円区画帯には条線を施し、三



第8図　J2号住居址出土遺物実測図（1：4）



第９図　Ｊ２号住居址出土土器拓影（１：３）

角形状の刺突が配されている。表面は褐色を呈すが、内面は黒漆が塗布されており暗黒色を呈す。5は、浅鉢で口縁が強く内湾する。蛇行する隆線、半肉彫の三叉文、蛇のとぐろを表わす渦巻等で構成される。内面は黒漆が染みこませてある。表面の器膚はあらい。6は、蛇体を突起させたミミズク把手である。蛇とミミズクの組み合せは、生業活動の反映であろう。赤褐色を呈す。長石、石英粒が目立つ。

拓影図1、2は浅鉢である。1は折返し口縁で屈折部に波状の貼付文を施し、貼付上部に三角押引文をめぐらせている。その下部はヘラによる3cmの凹みを配しており、新道式の古い要素が加わっている。赤褐色を呈す。2は、口縁が強く内湾し、2条の連続爪形文が配されている。褐色を呈し、内外面共に膚はなめらかである。4は、口縁部に付けられる該期に最も発達した耳状把手である。

3～17、20、22、24、25、27～29の土器片は、井戸尻Ⅰ、Ⅱ式とおもわれるが,、明確に藤内式と判別できる18、19の他は、とぐろを巻いた蛇、区画帯の条線文、半肉彫三叉文、耳状把手、胴部縄文、隆帯の篦刻文等、藤内式との類似点が非常に多く、細片となると判別は困難であり戸迷いが生じる。

その他、混入土器片は、14、23が篭畑Ⅱ式、26は平出3Aであり、21は篦描綾杉文である。

J2号住居址は、第8図の出土遺物および拓影土器片から、井戸尻Ⅰ、Ⅱ式に比定されよう。

（島田　恵子）

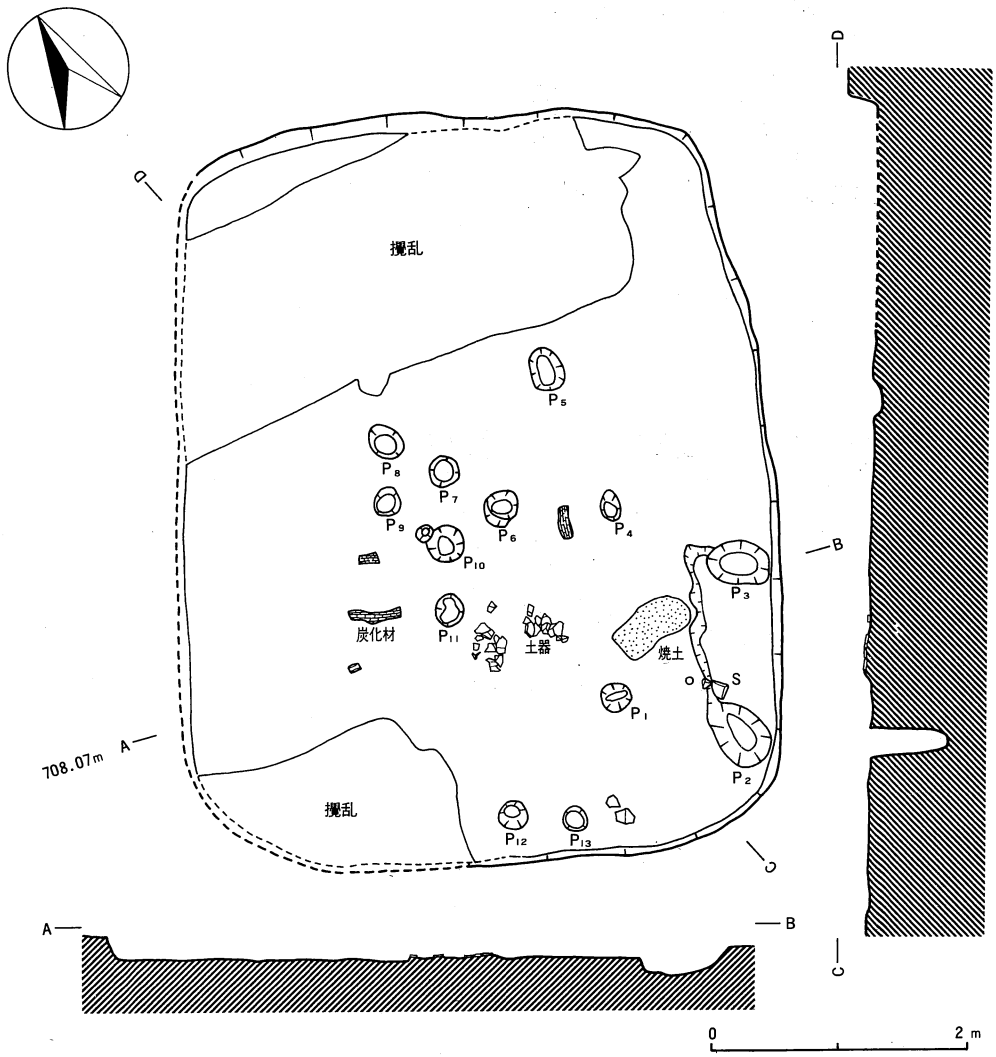
3）Y3号住居址

遺　構（第10図）

本住居址は、調査区の西南寄りJ・K－3～7グリッド内にて検出された。図に示すように住居址の北寄りと、西南の角及び西壁付近が校舎建築における基礎工事により攪乱されておりこれ等の部分については不明である。プラン確認の際、本住居址の覆土中には炭化物や焼土が多く認められている。床面調査の際には、床面に貼り付くように炭や焼土がみられた。こうしたことからも住居が火を受けたことは間違いないであろう。

平面プランは、主軸方位がN－27°－Eを示し、北壁が385cm、南壁推定430cm、西壁推定500cm、東壁515cmを測る。壁高は落込確認面より18～25cmでやや急な斜壁である。床面はほぼ平らであり堅く踏み固められている。

住居址内のピットは数多くあるが主柱穴と決められるものはP_1である。P_1は、23×21－60cmと規模は小さいが、非常に深い。又、住居址のほぼ中央に数個のピットが集中している。深さは10～15cmを測り浅い。このような配置になっている状況は、本町における弥生時代の住居址でかなりの数を確認している。やや大きめのP_{10}を中心に5～6個のピットが取り囲んでいる。これは日常の生活時に必要な施設に関わるものであり、弥生時代の住居址に付く施設として一



第10図　Y 3号住居址実測図（1：60）

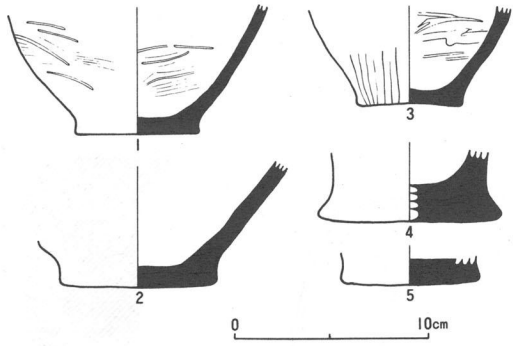
考しなければならない。

（柴　登巳夫）

遺　物（第11・12図）

本住居址の出土遺物は、土器底部片と拓影に図示した破片のみである。

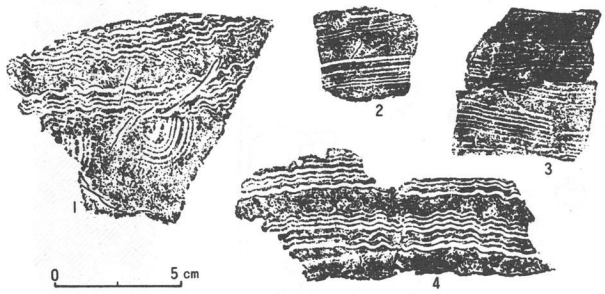
1、3、4の甕底部は、2、5に比べて硬く焼きしめてあり、これは天竜川流域の壺と甕の胎土、焼成等の精選による識別の容易さの特徴をあらわしているといえよう。



第11図　Y３号住居址出土遺物実測図(１：４)

拓影は、波状文、簾状文、四分の一円弧文が描かれている。１は、茶褐色を呈し、２、３、４は白味を帯びた褐色である。簾状文の２、３は器膚がなめらかである。

本住居址の出土土器は、時期決定の決め手となる積極的な所見に欠けるが、住居址の形態、配列等からＹ１号住居址と同様、弥生後期後半中島式に比定されよう。(島田　恵子)



第12図　Y３号住居址出土土器拓影(１：３)

４）Ｈ４号住居址

遺　構（第13図・14図）

Ｈ４号住居址は、55年度調査で住居址の約７割を検出し、掘り下げを行ない、調査区域外となったため次年度において残りの検出を行なって完掘するという変則的な方法となった。

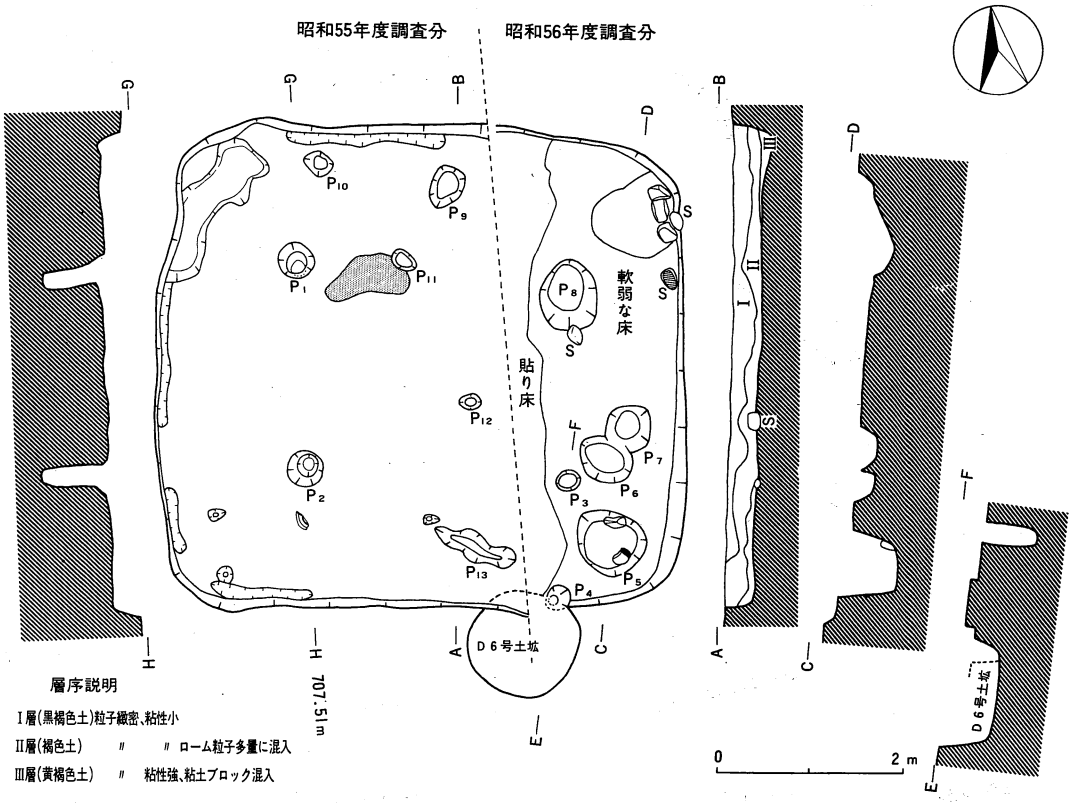
グリッドは、55年度がＣ～Ｅ－０・１、56年度はＢ・Ｃ－１・２グリッド内にて検出された。

平面プランは、南北壁500cm、西壁460cm、東壁450cmを測る隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－82°－Ｅを示す。壁高は、15～30cmを測りなだらかな立上りを見せている。

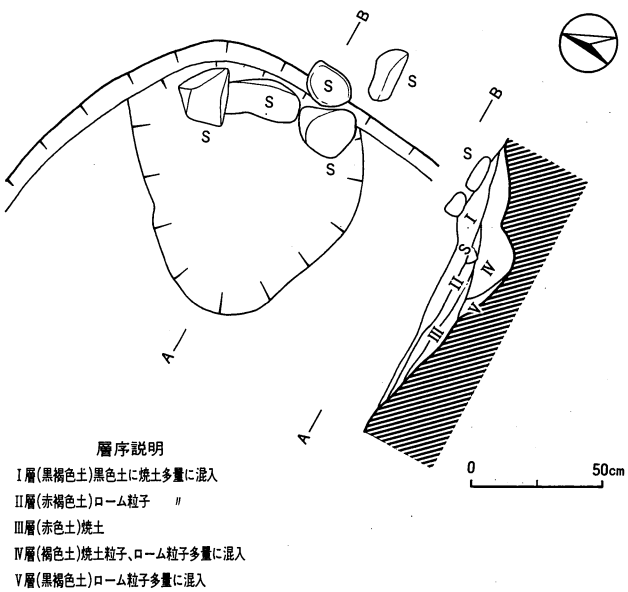
覆土は、粒子の緻密な褐色土を基調とした３層によって形成される。床面は厚さ３cm程の粘土を貼った頑強な貼り床であり、P_{11}付近には焼土の散布がみられた。また、Ｊ15号住居址（縄文中期後半唐草文系Ⅱ）と重複していた東壁の60～80cmの範囲の床は軟弱で、その面はプッツリと貼床が切れていた。そして、カマド、灰溜、貯蔵穴等の施設が集中して存在している。

カマドは、北東壁コーナーに位置し、焼土が10cm程堆積していて頻繁に使用されていたものとおもわれる。袖石や支脚石は残存していなかったが、４個の石がカマド奥に並べられていてかつてはそれ等が組み込まれて使用されていたものであろう。カマド内から土器の出土は皆無であった。

ピットは、13個検出された。P_1は40×38－30cm、P_2は38×38－70cm、P_3は26×22－56cm、P_4は26×24－30cmを測り主柱穴であるとおもわれる。P_5は74×68－50cmで立上り際左右に２個の石が存在する。貯蔵穴であったと考えられる。P_6、P_7は８～20cmの浅い凹みであり、その性格



第13図　H4号住居址実測図（1：60）

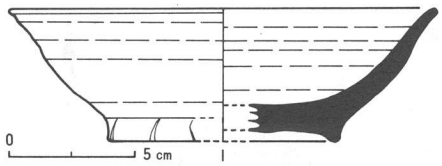


第14図　H4号住居址カマド実測図（1：30）

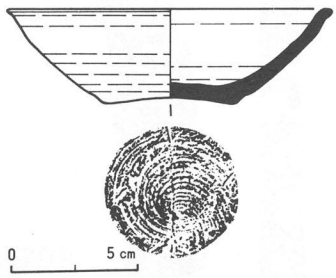
は判然としない。P_8はカマドの近くに位置し、74×60−36cmを測る。規模、位置等から灰溜施設であるとおもわれる。その他P_9〜P_{13}までのピットは浅い凹みが生じているのみであるが、内部施設に関わる凹みであろう。

該期における住居址のカマド設置は、従来の北壁中央から、壁コーナーあるいは南壁、西壁、東壁と一定の配置はみられない。本住居址も北東コーナーに設置されている。何等かの条件や事情によるものと推察される。

また、主柱穴であるが、これも該期



第15図　H 4 号住居址出土遺物実測図(1:3)

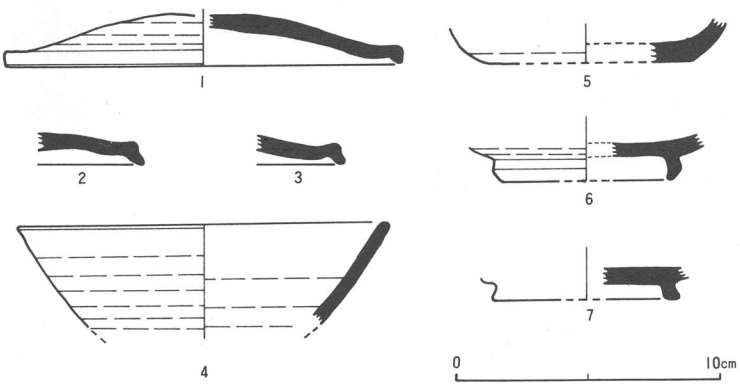


第16図　上の林遺跡出土概出遺物実測図(1:3)

には、2個、3個とかのまばらであるもの、全くないもの等、こうした傾向がみられる。本住居址も規格性のある配列を示した3個の柱穴が検出され、もう1個は当然あるべき位置に属するものと綿密に精査を行なったが柱穴はどこにも見当らなかった。少し浅いが東壁コーナーから45cmを測る南壁際に所在するピットが、規模、形状等から主柱穴の一部であろうとおもわれる。

また、該期の類似点として3点目に特徴付けられる事項は、住居址の確認面から覆土、床面にかけて焼土や炭化粒子が散在していることが多い。火事にあった住居址とはまたちがった別の様相を呈する。本住居址も同じように、焼土、炭化粒子が散布していた。住居廃絶時にいらなくなったものを燃やしたかのような散布の状態である。このような類似点は上屋構造や住居廃絶の存り方と共に今後の課題となろう。

（島田　恵子）



第17図　グリッド出土平安時代の遺物実測図（1：3）

遺　物（第15・16・17図）

本住居址出土の遺物で図示できたものは、第15図の灰釉陶器1点のみである。一般に該期の住居址ではカマドから多量に出土するが、本カマドからは1点の出土もみられなかった。こうした例は稀である。灰釉陶器は、口径17cm、器高5.2cm、底径9.2cmを測る。内外面共にロクロ痕が顕著である。釉は外面と内面の底面にかけられていない他は、その他全面にかけられている。特に口縁と底面際に緑釉が目立つ。高台は0.5mmと低く、台部にひび割れが生じている。また底部の一部に木の葉圧痕が施されている。

その他、覆土から土師器細片が出土している。器肉がうすいものが多い。本住居址は、これらの出土遺物から、国分期前葉に比定されよう。

第16図の須恵器杯は、本遺跡の箕輪工業高校付近の果樹園から出土したもので、口径13cm、器高3.8cm、底径5.3cmを測る。器肉が薄く、口辺部は外傾しつつ内湾する。ロクロ痕が顕著であり、胎土の砂粒も目立つ。底部は糸切りである。

また、第17図はグリッド出土の同時期の遺物を一括した。1～3は、須恵器の蓋である。天井部が底く平坦であるが、端部は1が肥厚し直立する。2・3は外傾する。宝珠形の摘みが付くものとおもわれるが、摘み部は欠失している。4は、須恵器坏で底部を欠損する。第16図の坏と同様に器肉がうすい。5は須恵器の糸切底部片である。6、7は須恵器の高台付坏の台部片である。

今回の調査では、遺構の検出は一軒であったが、このような同時期の遺物の出土から集落は南北西の方向へつづいているものとおもわれる。

（島田　恵子）

5）Y5号住居址

遺　構（第18図）

本遺構は、調査区東南寄りのI・J・K－3～7グリッド内にて検出された。図に見るごとく住居址は南側が調査区域外に出ており完掘できなかった。この一角は、住居址の切り合い状況が複雑で、現場作業進行上での難しさを感じた。住居址の西北の角がJ8号住居址を切って構築している。

平面プランは、隅丸長方形を呈すると推察される。長軸は740cmを測る。主軸方位はほぼWを示す。壁高は平均20cmでやや急な斜壁である。床面はあまり堅くなってはおらず、弥生時代の住居址の床面としては軟弱である。本住居址に含まれるピットとしては、P_2とP_{12}が考えられる。この二つは位置等から主柱穴であろう。P_2は40×40－47を測る。本住居址は、Y6、Y7号住居址がすっぽりと中に入って構築されているので遺物等は直属するものは少い。

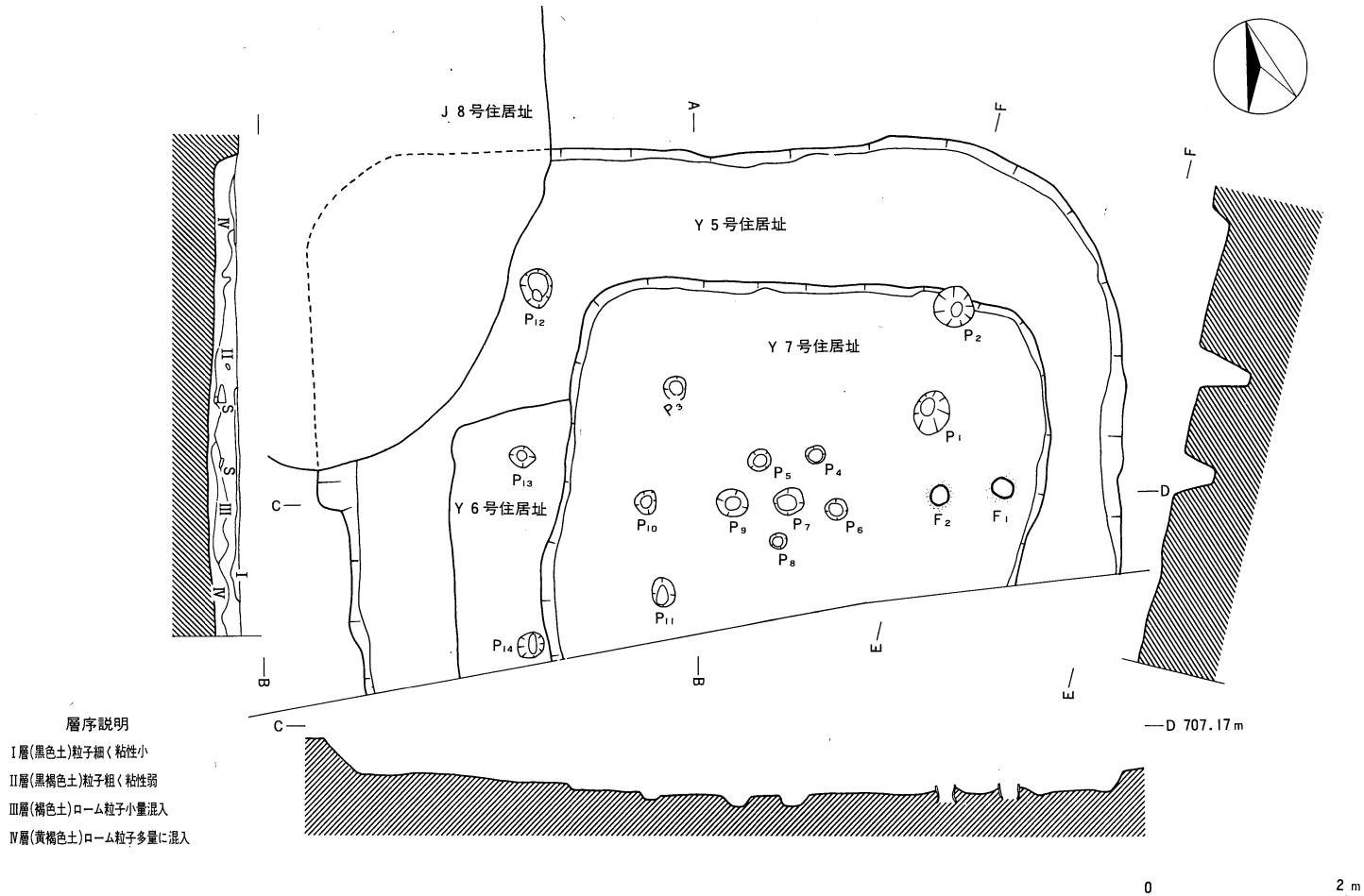
尚、J8号住居址と切り合っている部分においては、現場の作業過程において順序が逆になり、プラン確認が不十分であったことは残念である。

（柴　登巳夫）

遺　物（第19図）

本住居址からの遺物出土は、Y7号住居址と重複関係にあったため、Y7号住居址が本住居址を切って構築してあり、本住居址が先行する。しかし、床面の段差が10cmとあまり開きがないため、主体部では出土土器が混入してしまったものとおもわれ、拓影のみである。

1、3、6は、口唇部に刻目文が施されている。1は口辺から頸部にかけて密集した櫛描短線文が薄く描かれており、内面はヘラ調整がなされ器膚がなめらかである。3は、貝殻条痕文が



層序説明

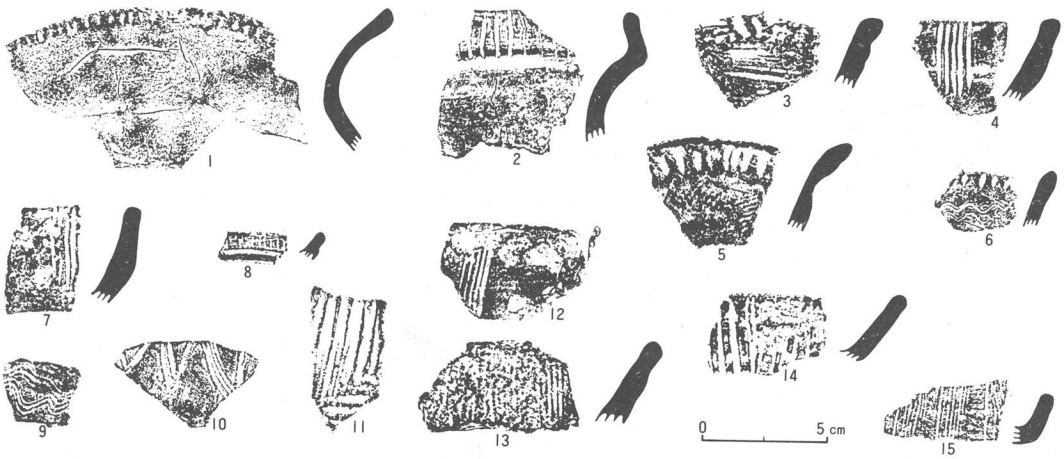
Ⅰ層(黒色土)粒子細く粘性小

Ⅱ層(黒褐色土)粒子粗く粘性弱

Ⅲ層(褐色土)ローム粒子小量混入

Ⅳ層(黄褐色土)ローム粒子多量に混入

第18図　Y 5号.Y 6号.Y 7号住居址実測図(1：80)



第19図　Ｙ５号住居址出土土器拓影（１：３）

施されているが摩滅が著しい。６は波条文が施されている。２、４、７、８、12～15は、口縁段上に縦の沈線が描かれている。割合焼成が硬く焼きしめられているが、これ等は壺である。９、10は波状文が描かれ、５は口辺部に刻目文、その下部は縄文が施されている。摩滅が著しい。小形甕であろう。３は口唇部に刻目文、口縁部に貝殻条痕文が施されている。11は、コの字重ね文のコーナー片 とおもわれる。３と共に中期に位置付けられ混入であろう。

本住居址はＹ７号住居址に先行する座光寺原式末期～中島式前半期に比定されよう。

（島田　恵子）

６）Ｙ６号住居址（第18図）

本住居址は、Ｙ５号とＹ７号住居址と重なった状況で検出されている。遺構検出作業および掘り下げの過程において、Ｙ５号とＹ７号住居址と床面の堅さ、その他様相等に異なりがあり、精査の結果、Ｙ６号住居址の存在を確認したのであるが、レベル・残存壁等の関係から、なお不安は残っていた。遺物、図面整理等を経て、第２次調査でのＹ14号住居址の検出により、詳細に調査した結果、類似点が非常に多く、本住居址もＹ７号住居址の一軒に含まれる可能性は充分あり得る。

７）Ｙ７号住居址

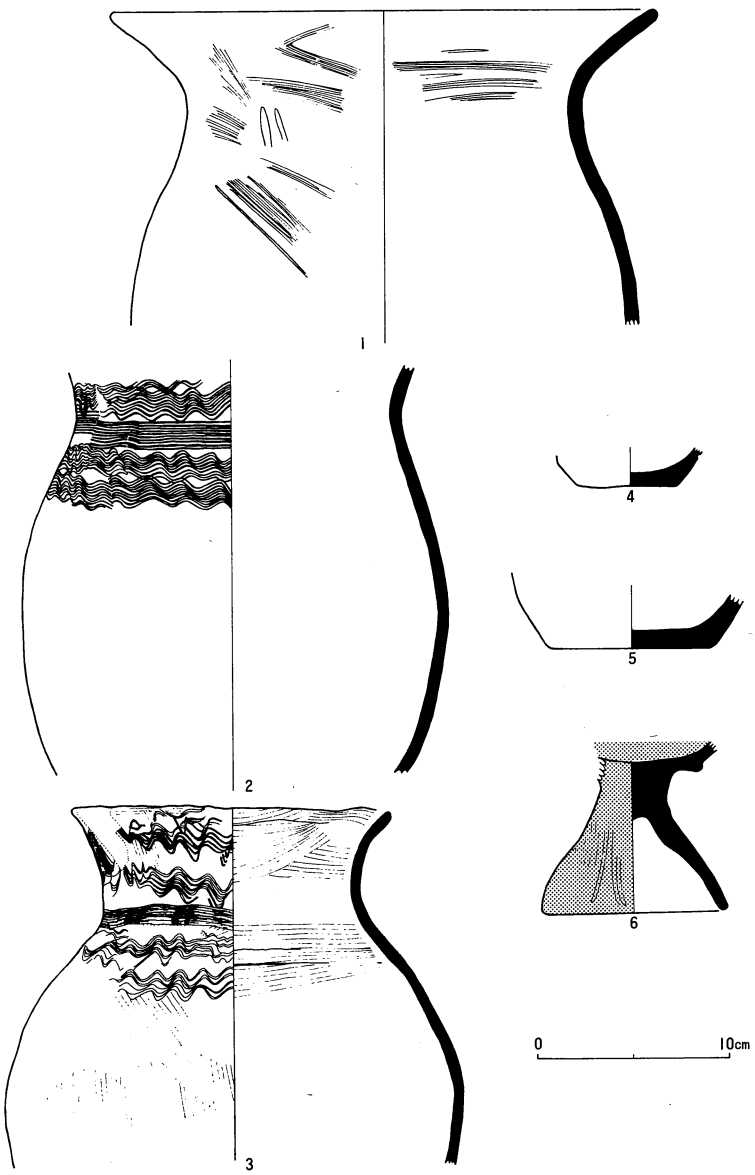
遺　構（第18図）

本住居址は、Ｙ５号住居址の中にすっぽりと入った形で検出された。南壁寄りが調査区域外になったため完掘できないのが残念であった。主柱穴の位置から東西に長軸をもつ住居址である。主軸方位はN－25°－Eを示し、長軸約450cmで隅丸長方形を呈するものと推定する。Ｙ５号住居址の床面との比高差は10cmで、壁はゆるやかな立上りを示している。床面は一部軟弱なと

ころや凹凸部分がみられる。ピットは住居址内に多数あり、その中において、P_1、P_3、P_{11}が主柱穴であろう。P_1は40×35－35cmを測り、弥生時代の主柱穴の平均的な大きさを示している。又、住居址中央部にはＹ３号住居址と全く同様な配置でピットが検出されている。これ等のピットは、径25～30cm前後で、深さ15～10cmを測る丸底である。中央のP_7を取り囲むように、その周囲に５個のピットが配列する。この配置は、現在まで見て来た中で最も一般的なケースである。

住居址東壁寄り中央の位置に埋甕炉が２つ存在する。壁に近い側のF_1は正位を示し、内側のF_2は逆位に埋設されていた。F_1は、あるいはＹ５号住に共なう埋甕炉であるとおもわれる。

（柴　登巳夫）

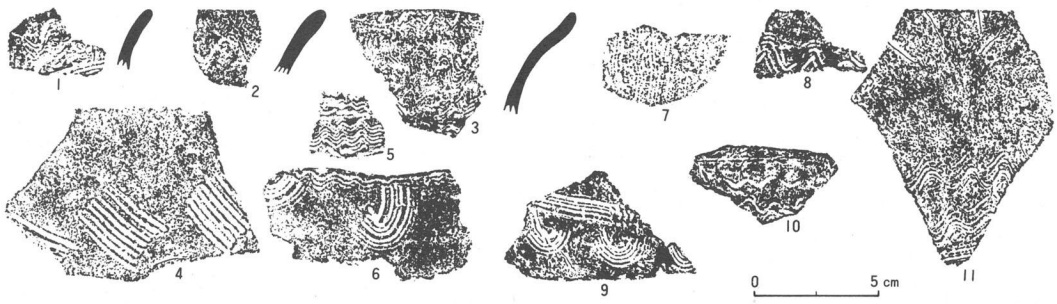


第20図　Ｙ７号住居址出土遺物実測図（１：４）

遺　物（第20・21図）

１は、無文で器肉が薄い。赤褐色を呈し、天竜川流域での胎土の精選と砂粒の混入が微量で硬く焼きしめられている甕の特徴をよくあらわしている。内外面の調整は、ヘラミガキと横ハケ調整が施され、器膚はスベスベしている。

器形は、口縁部が強く張り出し、頸部はくびれるが体部があまり強く張り出さないため、くの字状の外反までにはならない。体部最大径は口縁と



第21図　Ｙ７号住居址出土土器拓影（１：３）

等しくなる。

２は、埋甕炉に正位の状態で埋設されていた土器で、頸部から胴上部にかけて波状文、簾状文が描かれている。実測図に示したように断絶が顕著である。一帯に対し２回の断絶が認められる。器形は、体部のはり出しが弱く頸部のくびれが浅い。赤褐色を呈し器肉が薄い。胴中央から胴下部にかけて煤が付着し、内面はおこげ痕が顕著である。

３は、口縁から胴上部にかけて振幅の荒い波状文、簾状文が施され、断絶の痕も不規則で帯状も途切れたり、調整も輪積み痕が顕著に残っていたりと全体に作りが粗雑である。器形は、口縁が短く外反し、体部は球形状となる。茶褐色を呈す。

６は、高坏の脚部片である。台部内面は赤色塗彩され、外面に稜をもつ。脚部内面は墨をしみ込ませた様相を呈し、金雲母が光っている。外面も赤色を塗彩したのではなく、浸み込ませるという表現が該当する赤味である。

また、拓影図は波状文、簾状文、短線文、四分の一円弧文が描かれた破片である。７は、織布の圧痕底部片である。本遺跡からは３点の出土があった。

本住居址は、以上の出土土器から弥生後期後半の中島式に比定されよう。

（島田　恵子）

８）Ｊ８号住居址

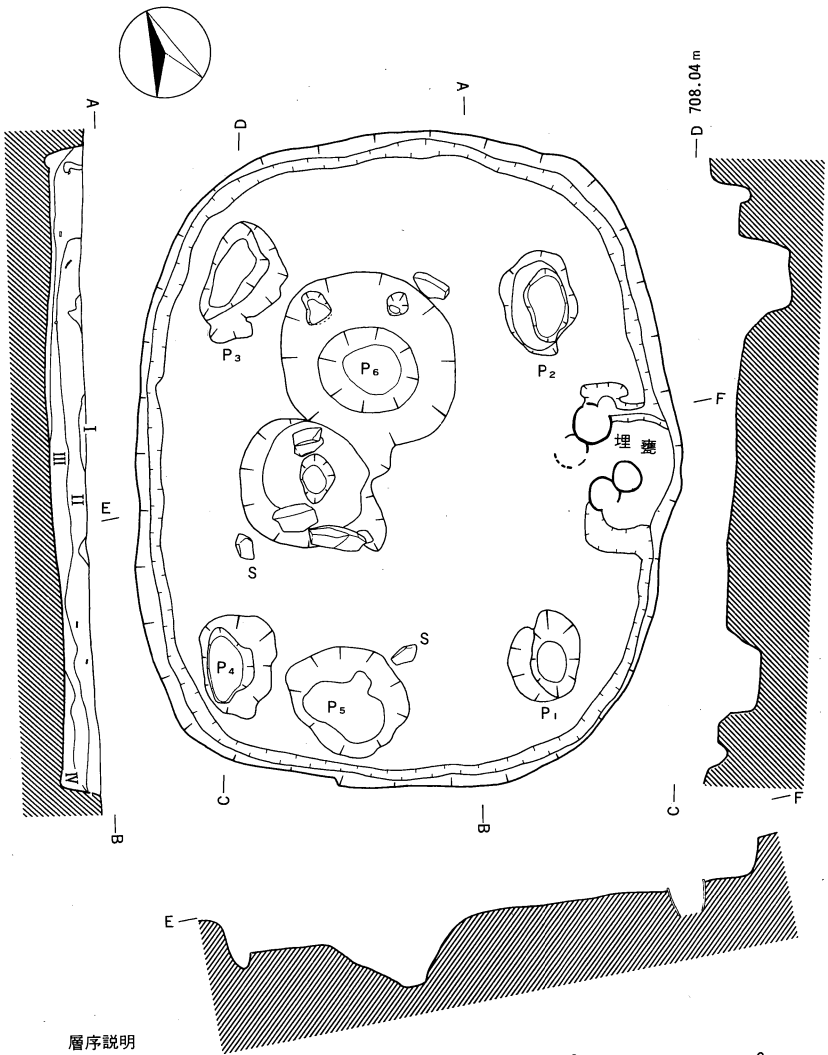
遺　構（第22図）

本住居址は、調査区ほぼ中央のＦ～Ｊ－５～８グリッド内に位置している。平面プランは、長方形に近い楕円形を呈す。主軸方位はＮ－23°－Ｅを示し、長軸685cm、短軸565cmを測る。主柱穴は四隅に位置し、どれも南北に長い不整楕円を呈している。P_1は95×75－35cm、P_1は110×78－40cm、P_2は120×80－50cm、P_4は100×70－35cmを測る。壁は垂直に近い急な立上りを示し、壁高は落込み確認面より30～35cmである。床面は小さな凹凸が多いが堅く踏み固められている。

住居址内施設としては、竪穴炉、貯蔵穴、埋甕、周溝等があげられる。炉は、住居址の中央

やや西寄りに位置し、径110cm、深さ60cmの大形堅穴炉である。最深部は中央よりやや東に寄り摺り鉢状になっている。床面から10cmほど下った位置に上面平らな頭大の石が対応するように2個置かれている。この石は煮炊きをするときに利用されたものと考えられる。堅穴炉の壁面はそれほど焼けておらず、底にも炭や焼土等も少ない。炭や灰が溜れば当然住居外へ持ち出したであろう。本遺跡において、該期の住居址は堅穴炉をもつものが多い。

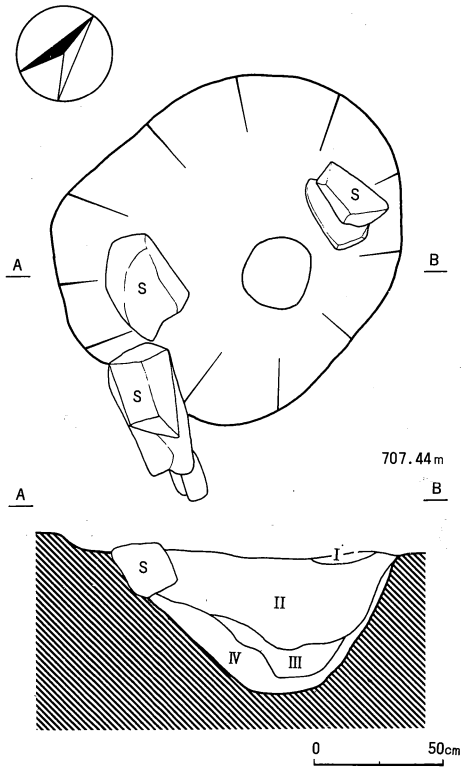
貯蔵穴と思われるP5は、P1とP4の間に位置し、東西に長い楕円形を呈し、床面からの深さは45cmを測り、丸底でやや袋状になっている。P6は径180cm、深さ15cmほどの浅い落込みの中にもう一段の深い円形ピットができている。この中からは第59図1に示した大形土偶の胴部が出土している。



第22図　J8号住居址実測図（1：4）

埋甕は、東壁寄り中央に四個が埋設されている（第22図参照）埋甕は2個づつがくっついた状態で検出されている。甕の口縁が床面より5～10cm低くなっており、甕の上にかぶせた土も床面同様に堅くなっていて踏みしめられていることを証明しているといえよう。

周溝は、入口と考えられる東の一部を除いて全周しており、巾は8～20cmで深さは15cm



第23図　J 8号住居址炉実測図（1：30）

前後である。出入口部において周溝の切れている所が埋甕の一つに通じているような状態になっているため、周溝と埋甕との間に何かの関係があるのではということが現場での調査中に話題となった。これは、埋甕入口部分の周溝が最も低く、西側が高くて、周溝に水が入ったならば埋甕にうまく流れ込むような傾斜である。偶然であろうが何か意識したかのような埋設状態であった。

（柴　登巳夫）

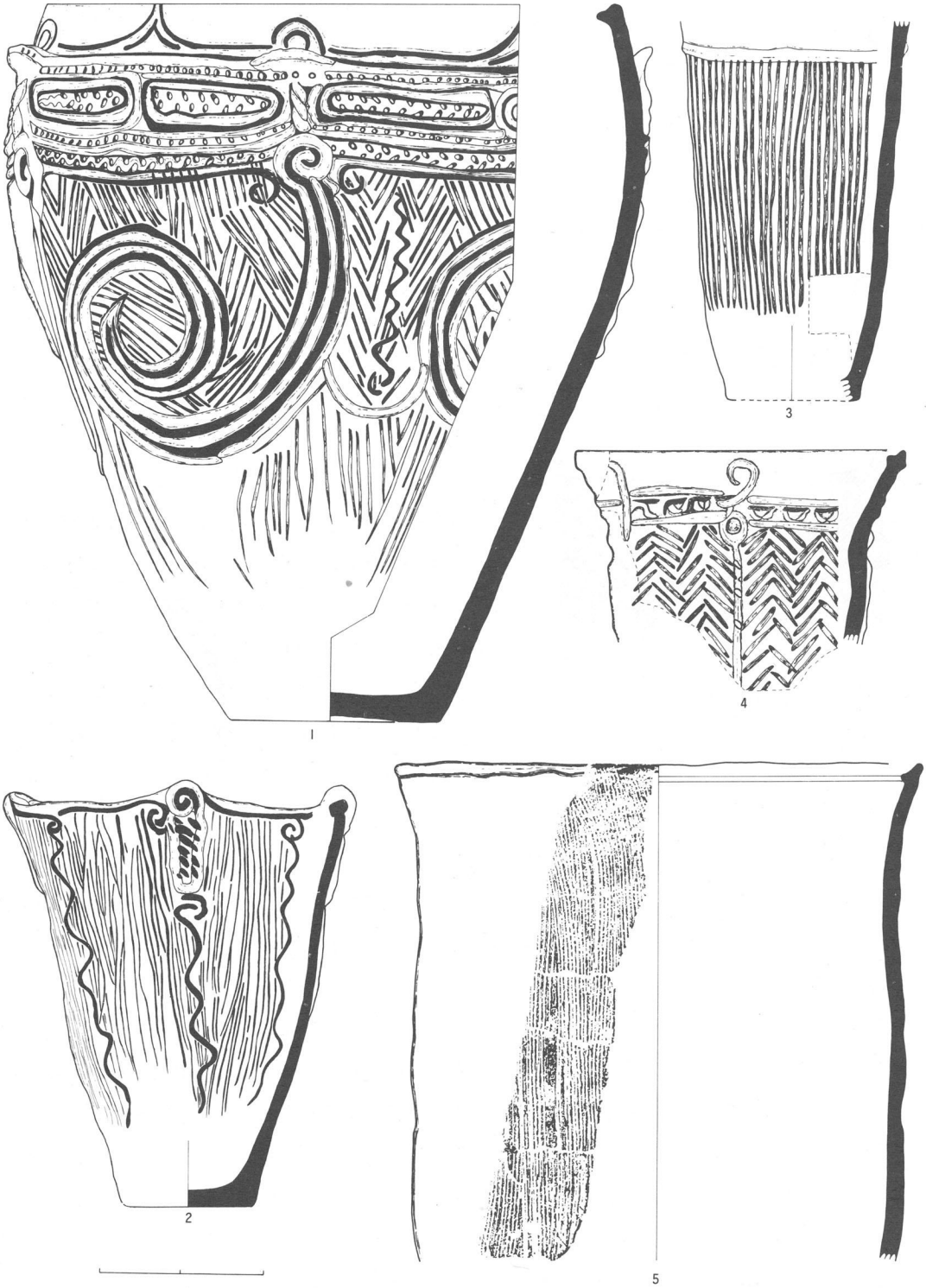
遺　物（第24図～第29図）

本住居址出土遺物で注目されるのは、なんといっても4個の埋甕であろう。東壁際中央左右2対に配列した4個の埋甕は、現存器高43～50cm、胴部最大径43.5cmを測る。この大埋甕が4個出入口部に埋設された状態は壮烈な印象であった。

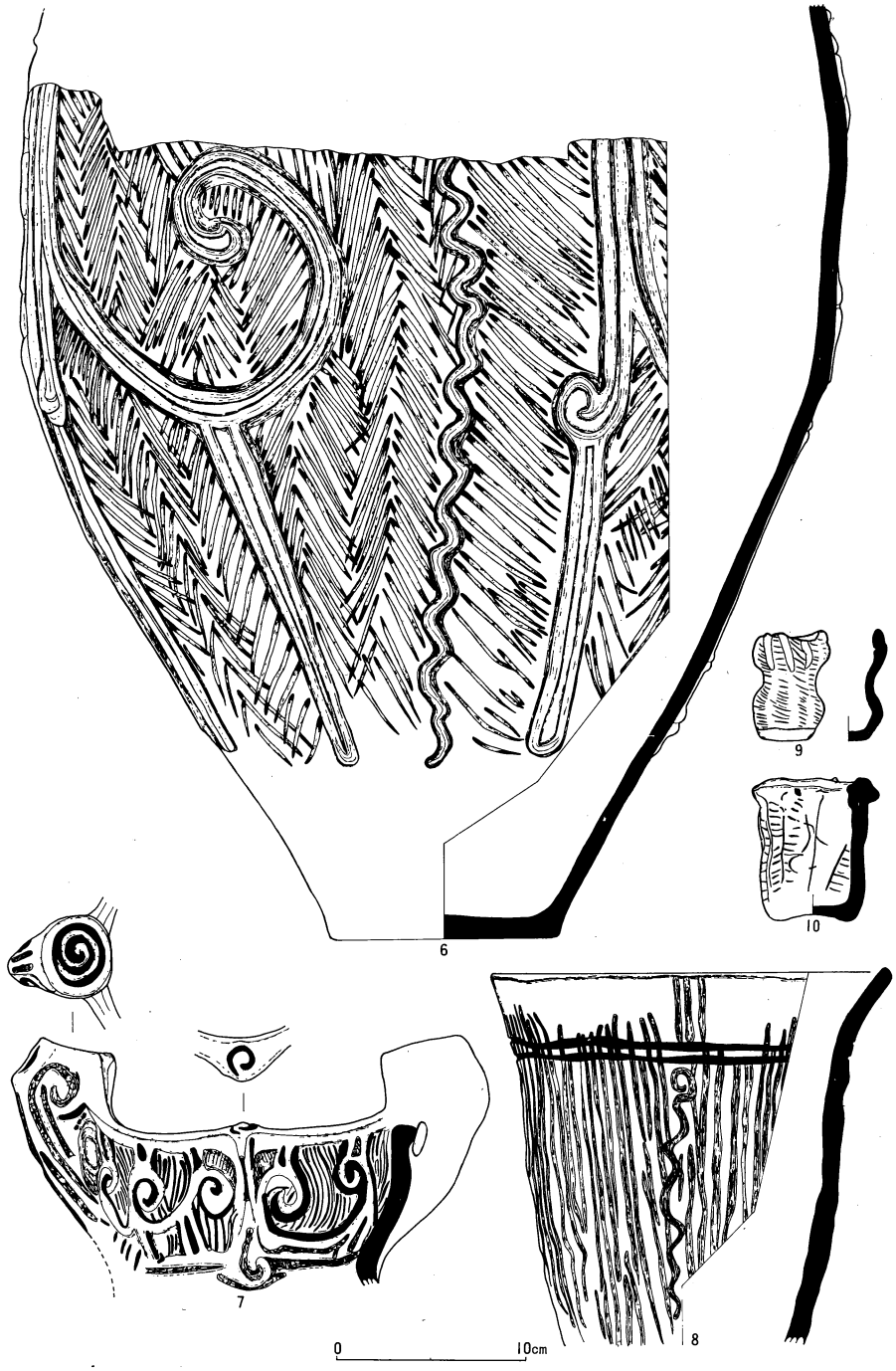
埋甕の埋設の特徴は、甕がきっちりと入るように掘り込まれ、埋設後は甕とローム層との間に寸分の隙間のないように埋めこまれている。したがって新旧関係も判別し難い。しかし、本住居址の埋設は、2度に分けて行なわれた可能性がある。第24図1と第25図6を先ず出入口壁際に一対、その後、第26図11と破片が粉砕して複原できなかった口縁と底部を欠損し、胴部のみの甕との一対が、最初に埋設された甕にへばり着くような状態で埋設されていた。完形品と胴上部～口縁を欠損するものとの組み合せ、完形品と胴部のみの組み合せ等もおもしろい現象である。

1は出入口部の左側に埋設された完形品である。口縁部無文帯にも山形と渦巻沈線文が描かれている。区画帯の上下は連続刺突文、区画帯内は交互刺突波状文が配され、区画帯と区画帯の間には突起と組紐文が付される。胴部地文は箆描綾杉、斜線文、蛇行懸垂文で埋められ、胴部は渦巻隆線文が6個配されている。茶褐色を呈し硬く焼きしめられてはいるものの器膚が荒く、長石、石英粒も目立つ。胴上部～口縁にかけてゆるやかに内湾し、樽形の器形を呈す。

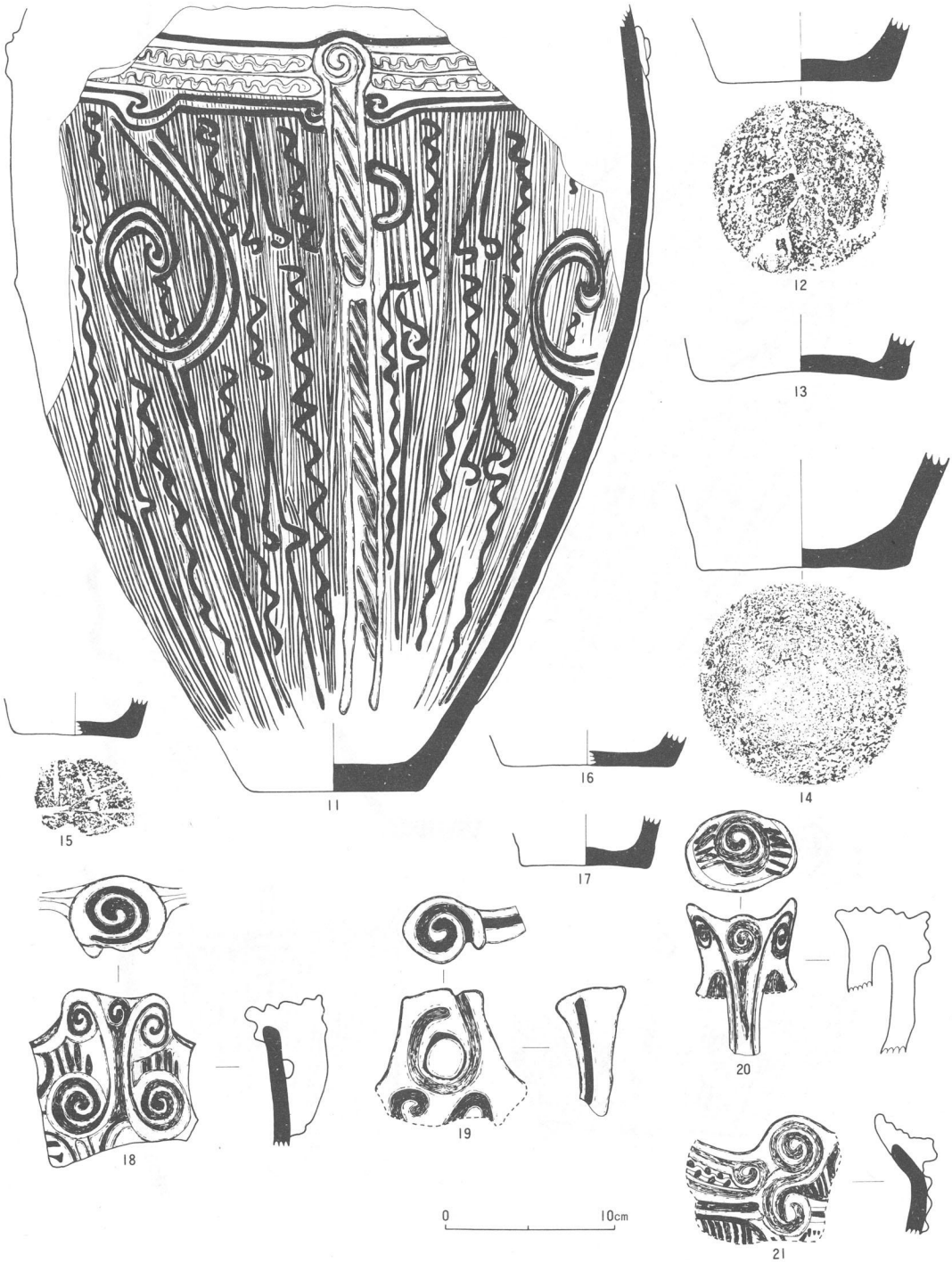
6は、1の右側に埋設されていたもので、綾杉、斜線文を地文とし、胴部文は渦巻隆線文と蛇行懸垂文とが大柄に配されている。口縁まで残存していたならば、最も大形の樽形大甕となったであろう。器肉が薄いが硬く焼きしめられている。外面全体は黒漆を塗布した後に焼成が



第24図　Ｊ８号住居址出土遺物実測図No.１（１：４）



第25図　Ｊ８号住居址出土遺物実測図No.２（１：４）



第26図　Ｊ８号住居址出土遺物実測図No. 3（Ⅰ：４）

なされた漆黒色でおおわれている。内壁はきれいで煮炊きの痕跡は認められない。

11は、1の後部に埋設されていた埋甕で、ほぼ完形であったとおもわれるが口縁がかじられたように欠落する。交互刺突波状文が2帯、口縁無文帯の下に連続する。文様構成は、沈線文を主体とする。腕骨のH状懸垂文で4分割し、渦巻文、蛇行懸垂文、剣先文等の沈線文が胴部文として配され、従来の綾杉、斜線、縦線文が細沈線文で構成されている。外面は煤で黒褐色に変色しており、指でこするとタール状の煤が指に黒く残る。硬く焼きしめられている。

残り1個の粉砕した埋甕は、胴部片のみであるが胴部径はおおよそ30cmを測る。文様は、大渦巻隆線文と箆描き綾杉、斜線文とで構成される。

2は、4つの渦巻突起を有す深鉢で、文様構成は腕骨状の隆線、渦巻、蛇行懸垂文が4分割で配され、その間を細線文で埋められる。赤褐色を呈し、長石、石英粒が目立つ。煤とおこげ痕が顕著である。3は、赤褐色を呈し、2と同様に硬く焼きしめられている。口縁部が無文で円筒形の深鉢である。文様は箆状施文具を用いた懸垂文を地文とする。

4は、黒褐色を呈し、かたく焼きしめられているキャリパー形深鉢である。幼稚なつくりで従来の交互刺突波状文が変形してしまっている。箆描き綾杉文を地文とし、4分割した渦巻状の隆線文が配される。蓋受口を有す。

5は、櫛状施文具を用いた細線文で器面全体がおおわれている。頸部のくびれが弱く、第25図10のミニチュア土器の器形に類似する、桶形の大甕となるであろう。蓋受口を有す。7は、渦巻沈線文を双把手に配し、胴部文は渦巻隆線文、箆描斜線、縦線文で構成された把手付キャリパー形深鉢である。把手と把手の間には相対に突起が付き、口唇部には渦巻沈線文が配されている。また、肥手の沈線文の沈線中には押引きが施されている。同様に胴上部くびれ部の沈線も押引きされている。胴中央～底部を欠損しており唯一の把手部残存の土器だけに残念である。同様な土器が、東築摩郡波田村葦原遺跡より出土しているが、同じように底部を欠損している。茶褐色を呈すが内面は研かれ黒褐色である。硬く焼きしめられているが、長石、石英が目立つ。

8は、頸部に弱いくびれをもつキャリパー形深鉢である。文様構成は簡略化して頸部に横位の沈線がめぐり、蛇行懸垂文が6分割しその間を箆状施文具による細線文で埋められている。胴下部～底部を欠損する。このような中形土器は、日常煮炊用に使われていたようで煤とおこげ痕が顕著であり、内面はおこげ痕と共に器膚が剝落している。長石、石英粒が多量に混入している。

9、10はミニチュア土器である。文様は両者共櫛状施文具による斜線文で構成されている。器形は、9が胴部が大きくくびれるキャリパー形深鉢で、10は桶形である。

12から17は土器底部である。12、14は編網の圧痕が施されているが、14は磨消されかすかに残るのみである。15は木の葉圧痕である。18～21は唐草文系土器の把手及び突起である。19は

第27図　Ｊ８号住居址出土土器拓影No.１（１：３）

第28図　Ｊ８号住居址出土土器拓影No.２（１：２）

第29図　Ｊ８号住居址出土土器拓影No. 3（１：３）

渦巻沈線文を主体とした突起で、20は突起状の把手である。18、21は口縁部に無文帯および頸部を持たない第31図3と同様の中形樽形状の土器に付く把手である。

第27・28・29図は、本住居址から出土した土器片の拓影図である。そのほとんどが唐草文系II式であり、それに併行する曽利II式の土器片も小数の出土があった。

1～40、42、43、45、47、50、55、56、58、60、62～65は、唐草文系II式の土器群である。口縁部無文帯を有さない土器群(1～3、5、6、8、11、17、19、20、22、23、32、40、42、47、50)と無文帯を有しても狭いことも特徴である。口縁無文帯を有す土器群には、区画帯及び組紐文が配されている。また、無文帯を有さない土器群の口縁部区画帯は箆描縦線文、渦巻沈線文が配されている。また、中形の日常煮炊用土器の破片が多く、樽形の大甕は(2、3、7、26、30、43、55、60、62)と9点で少ない。さらに大甕は硬く焼きしめられてはいるが、(3、30、55)のように膚のあらいものがみられる。口縁部片はそのほとんどが蓋受口を有すことと、器形は、樽形の無頸甕がほとんどであるが、稀に20にみられる胴上に弱いくびれをもつキャリパー形の深鉢もある。さらに、44、61は藤内I式に、59は第25図9、10と同類のミニチュア土器片である。41、48～54、57は、懸垂文、縄文が地文であり、47、48のように蓋受口を有していることから該期の唐草文系に加わった新しい要素である。

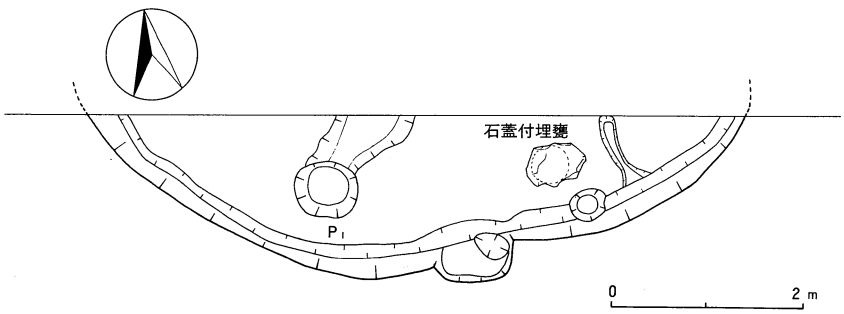
また、本住居址からは土偶2点、土笛、耳飾片各1点が出土している。埋甕4点の出土、土偶等の土製品の出土等により本住居址はマジカルな様相が感じられる。唐草文系II式文化の盛華であろう。　　(島田　恵子)

9) J9号住居址

遺　構(第30図)

本住居址は、調査区西北端のA・B－12・13・14グリッドに位置し、住居址のほとんどが調査区域外で全体の2割程度しか検出できなかった。

平面プランは、円形ないし楕円形を呈するものと思われ、壁はやや急な斜壁で25～30cmの高さである。周溝は、検出された壁下に全面巡っている。巾は、8～18cm、深さ10cm前後である。床面はかなり凹凸があり、あまり堅く踏み固められてはいない。壁



第30図　J9号住居址実測図(1：80)

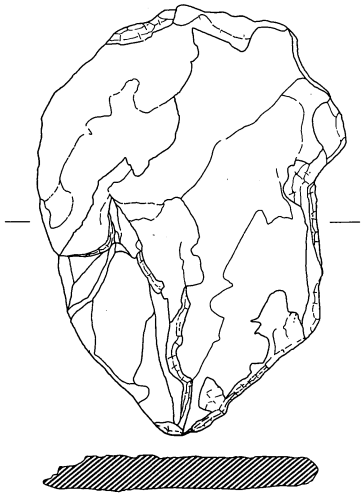
面から30cmほど内に入って、石蓋付の大形埋甕が検出された。蓋石は60×40厚さ5cmの楕円形を呈し、石質は粘板岩である。埋甕はほとんど完形で唐草文の美しい優品である。他に主柱穴の一つと考えられるピットが検出された。（柴　登巳夫）

遺　物（第31・32・33・34図）

本住居址は、調査区域の境界線上にかかっていたが、石蓋を共なった埋甕の出土により急拠拡張して住居址の4分の1を調査した。

1は、大埋甕であり、第32図に図示した厚さ5cmの粘板岩質の平らな石を石蓋として使用し

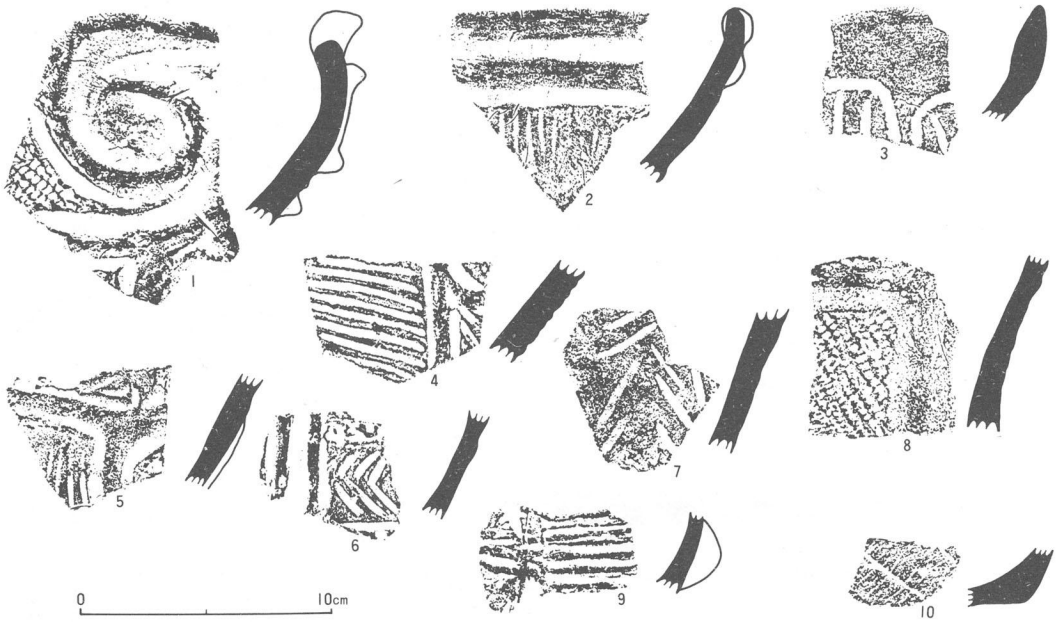
第31図　J 9号住居址出土埋甕実測図（1：4）



第32図　Ｊ９号住居址出土石蓋実測図（１：８）

て、セットで出土した。器高58cm、口径40cmを測るこの埋甕は大人が抱えて持ち運ぶのが精一っぱいで、物を入れて運ぶのは大変な労力を用する。文様構成は、頸部の区画帯は狭く、交互刺突文が一帯施されている。地文としては、箆描き斜線文が描かれ、主文様は、隆線と沈線の２線が平行して描かれる大柄過巻文が配されている。胎土、焼成が良好で金雲母が含まれキラキラ光っている。大形であるのにもかかわらず、底部は特に器肉が薄く、不安定である。本遺跡出土の大埋甕はそのほとんどが器肉が薄い。また、右に傾斜しており多少のゆがみが生じている。胴下部から頸部にかけて煤が広範囲に付着している。内面は胴下部の一部分におこげの付着がみられる。しかし、その他の壁面は使用された感じがしない程きれいである。

第33図　Ｊ９号住居址出土遺物実測図（１：４）



第34図　Ｊ９号住居址出土土器拓影（１：３）

２は、キャリパー形の深鉢である。口辺に巾広の一条の沈線が配され、地文は綾杉文、斜線文が粗雑に描かれる。頸部に区画帯があり篦描き縦線文が描かれ、区画帯と区画帯の間には渦巻隆線と沈線文が配されている。煤とおこげ痕が顕著である。器形のみでは加曽利Ｅに類似する。３は、口縁の無文帯がなく全面文様で埋められている。双把手付深鉢であるが把手を欠落する。文様構成は口縁の区画帯、篦描き斜線、縦線文、渦巻隆線文、懸垂文とから成る。茶褐色を呈し、煤、おこげ痕が顕著である。

４は、２つの孔を有す、ミニチュアの壺形土器である。硬く焼きしめられ、焼成時の黒斑が内面の３分の２をおおっているが、茶褐色を呈する部分および外面にも同様になにかのこびり付きが黒く斑点状に付着している。孔にひもを通し、なにか特殊なものを入れて住居内に吊しておいたのではないだろうか。

土器片の出土は少く、拓影も10点だけである。１、８は、地文に縄文が施されており、１は渦巻隆線文が口縁に突起する。３～７までは、篦描き綾杉、斜線、縦線文等で構成される。９は、こぶ状の隆起と横位の沈線文が施された土器片であり、判然としない。10は、木の葉圧痕の底部片である。

以上がＪ９号住居址の出土遺物である。１にみられる石蓋付大埋甕が唐草文系土器文化の盛華であるのに対し、２のキャリパー形深鉢および拓影の土器片にみられる粗雑な文様構成等、次第に衰退してゆく唐草文系文化の両側面が混在している。これは、本住居址出土の土器片のみでなく、該期のＪ８号住居址、Ｊ10号住居址、Ｊ15号住居址も同様である。このことについては、別章の考察で触れてある。

本住居址は、唐草文系IIに比定される。　　（島田　恵子）

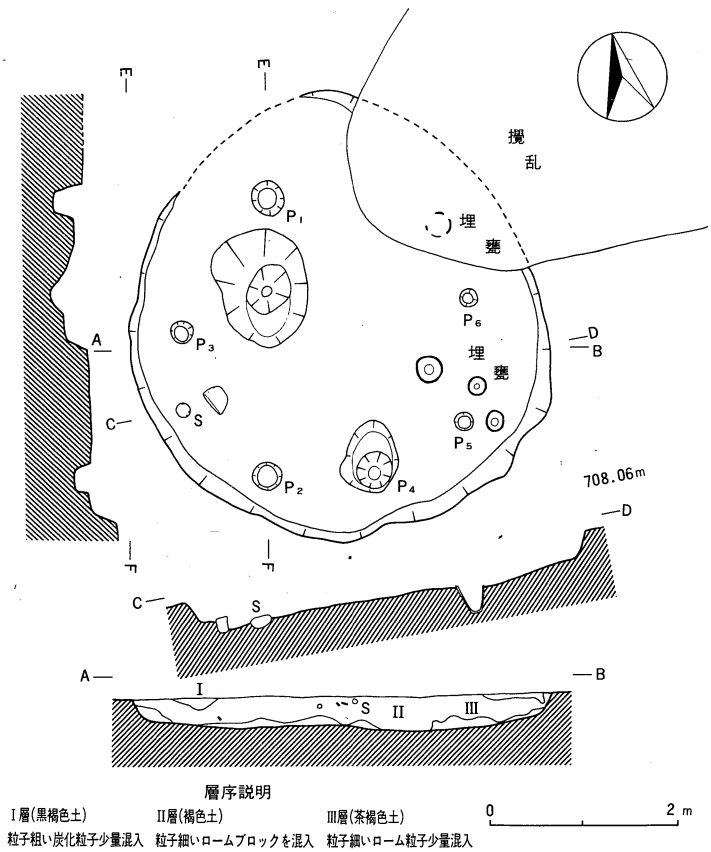
10）J10号住居址

遺　構（第35図）

本住居址は、C・D・E－3・4・5グリッドに位置している。調査区の都合で東北側の一部が検出できなかった。

平面プランは、ほぼ円形を呈し、径450cmを測る。調査区域内全体に共通することであるが、校舎建築時や今回の解体作業における、基礎掘り出し作業等で、区域内の土層が攪乱されており、初期作業の平面プラン確認においてその検出に苦労した。

床面は、部分的に凹凸があり、炉周辺の他は軟弱である。壁はゆるやかな立上りを示し、壁高は平均25cm前後である。主柱穴P_1、P_2、P_3、P_4、P_6等が該当すると考えられる。住居址施設として竪穴炉がある。P_1とP_3の間に位置し楕円形を呈す。底が一方に偏っている。炉壁にはわずかな小石を押し付けてあるだけで、J 8号住居址のような石は使用していない。



第35図　J 10号住居址実測図（1：80）

東南の壁寄りで住居址の入口に位置する場所に3個の埋甕が埋設されている。又、西壁寄りに頭部が平らで、周囲に彫刻（玉抱三叉文）を配した石棒が立って出土している。石棒は、頭部下から欠損しているが、なかなかの優品である。

（柴　登巳夫）

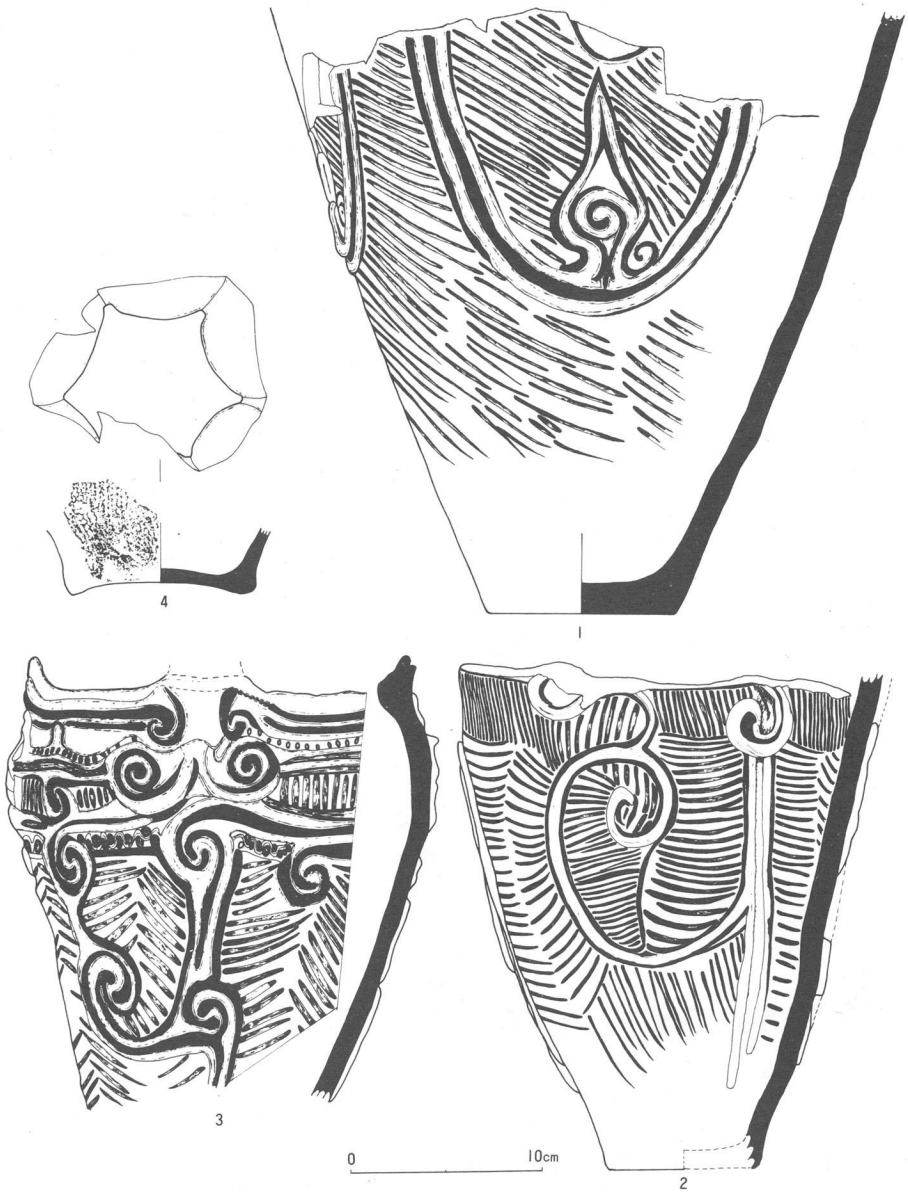
遺　物（第36・37図）

本住居址からは、4個の埋甕が出土している。その内拓影に図示した第37図1は、胴中央～底部が欠損し、口縁部片のみであったが、埋められた状態で出土しているので

一応埋甕とした。他の3個体とは大分離れた北東コーナー寄りに埋設されていた。

1、2、3は、20～30cmの間隔をおきほぼ並んで東壁際出入口部から出土した。1は、胴上部から口縁部を欠失する。篦描き斜線文、渦巻、隆線および沈線文、さらに剣先文等で構成されている。外面は煤の付着が認められる。2もやはり胴上部～口縁部を欠失する。渦巻隆線文、篦描斜線文、縦線文で構成されるが、文様の巣純化と粗雑さがうかがえる土器である。

3は、胴下部～底部を欠失する双把手付土器であるが、埋甕であったため把手は、J9号住居址出土の第33図3の土器と同様に欠落している。内面の蓋受口、さらに相対する突起の渦



第36図　J10号住居址出土遺物実測図(1：4)

第37図　J10号住居址出土土器拓影(1：3)

巻文が内面にも施されている。刺突文および交互刺突波状文、組紐文、大小の渦巻隆線文、頸部区画帯、篦描綾杉、縦線文とで構成されるが、唐草文系土器の特徴をほぼ備えた土器であろう。外面には煤が内面にはおこげ痕が顕著である。2、3は日常煮炊用土器の埋甕への転用であろう。この3個体の埋甕は、レベル、配置等から同時に埋められた可能性が強い。

4の底部片は、6角形を呈す。器肉が薄く、黒褐色を呈し、硬く焼きしめられている。外面には、磨消縄文が施されているが、内外面共に調整は粗雑である。六角形の角の配置も4cm、4.5cm、5cmと不揃いである。しかし、珍しい器形で欠損していることは残念である。

又、拓影は、1～18、21、25は唐草文系土器群である。22、23は篭畑II式の格子目文で、その他、19、26は隣接するJ11号住居址の藤内II式の混入である。24は、底部圧痕であるが、アンギンとは異なるが細片なので判然としない。本住居址も、J8号住、J9号住と同様に第37図1の埋甕にみられるように、加曽利Eの影響の強い土器片の出土がみられる。

また、本住居址からは、緑泥岩、蛇紋岩質の見事な磨製石斧が2個床面直上より出土している。さらにチャート製の手斧、玉抱三叉文が彫刻された石棒が南西コーナーの床面に埋められていた。本住居址は、小形ではあるが出土遺物から多面的な要素を持った住居址であるといえよう。唐草文系IIに位置付けられる。（島田　恵子）

11）J11号住居址

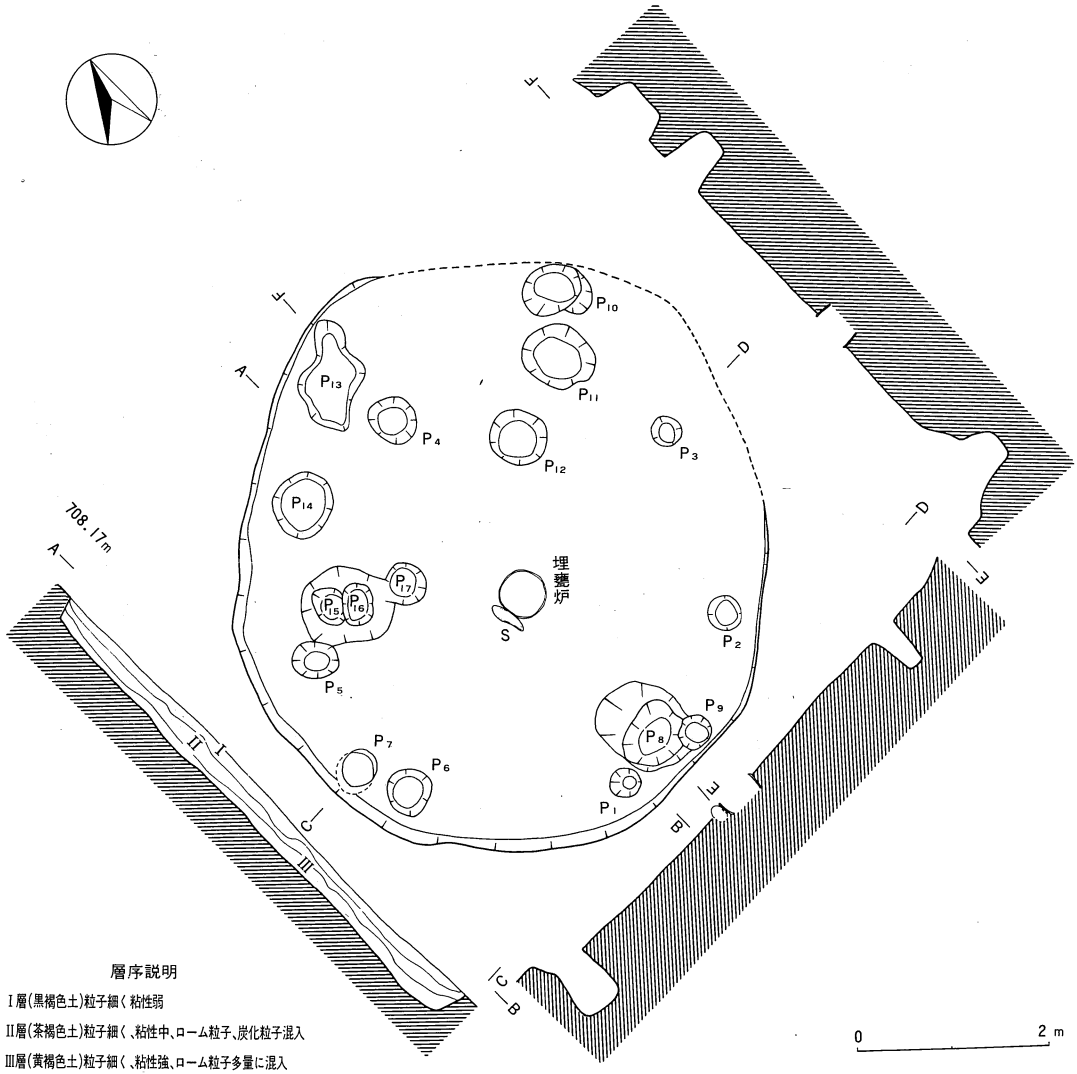
遺　構（第38図）

本住居址は、調査区中央やや北寄りのB～E－5～8グリッド内に検出された。平面プランは、長径610cm、短径550cmを測る楕円形を呈す。J10号住居址と接する部分や北側の特殊遺構に切られた部分はプランがはっきりしない。

住居址内覆土は3層に分かれ、上から黒褐色土、茶褐色土、黄褐色土に区分される。床面は軟弱でありそれと同様に壁面も不安定で、全体のプランを確認して掘り下げを開始するまでに大変苦労した。この一角は、本住居址が構築される以前に何回か住居が造られたため、全体に土が動いており、基本的な層序がなくなっている。そのためにはっきりとした住居址の落込みが現われないのである。

住居内からは、多数のピットが検出されたが、本住居址の主柱穴としては、P_1～P_6と考えるのが適当と思われる。深さは30～57cmで東西に3個ずつ対になって規則的な配列を示している。他のピットは、貯蔵穴として本住居址に共なうものと、前述した事情等により、本住居址構築以前にこの位置に存在した住居址の主柱穴であったり貯蔵穴であるものが含まれているものとおもわれる。中央には、大形埋甕炉が設置され、口縁が床面よりわずかに出る状態に埋設されていた。炉に使用した大甕は、胴下部を欠損しており、口径50cmを測る大形である。

（柴　登己夫）



層序説明

I層(黒褐色土)粒子細く粘性弱

II層(茶褐色土)粒子細く、粘性中、ローム粒子、炭化粒子混入

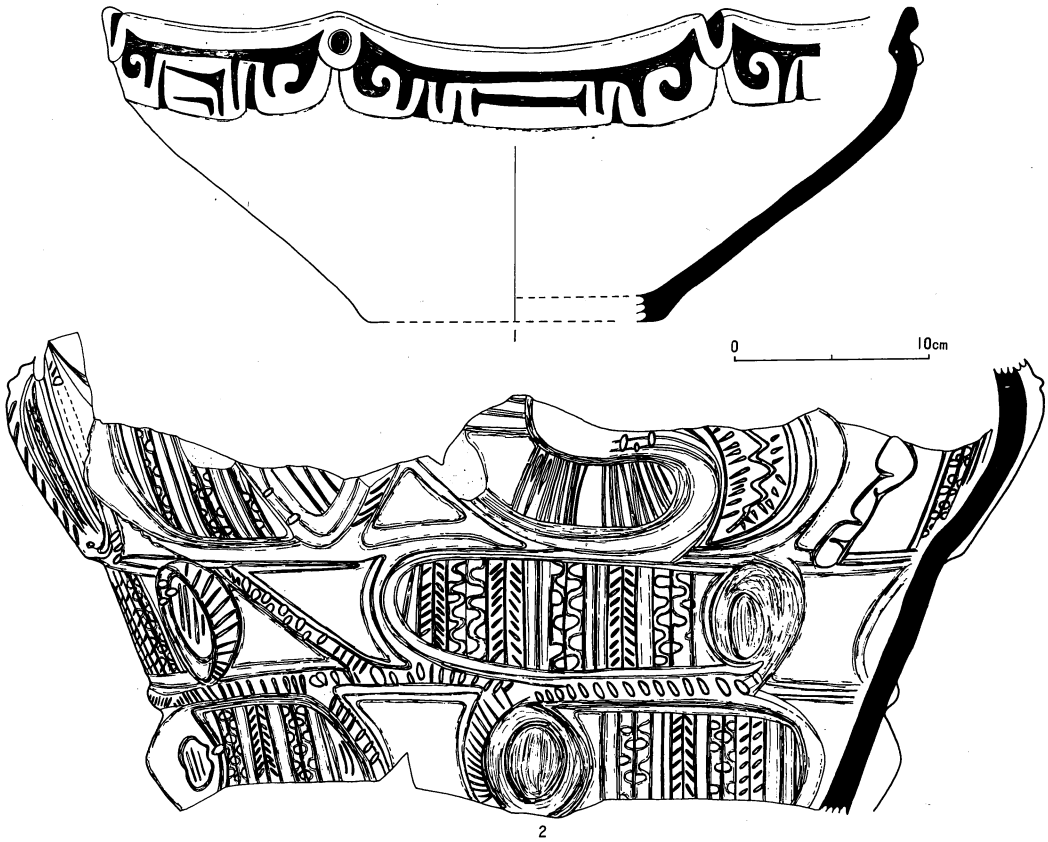
III層(黄褐色土)粒子細く、粘性強、ローム粒子多量に混入

第38図　J11号住居址実測図（1：80）

遺　物（第39・40図）

本住居址の出土土器は、1の大浅鉢片と2の炉内埋設大鉢形土器の2点の他は拓影に示した土器片と少量である。

1の浅鉢は、口径41.5cmを測る大形で屈折部からの口縁部は巾狭で文様もこの部分に集中する。半肉彫りの太い沈線による力強いタッチで、渦巻、コの字、三叉文等が描かれている。6分割でU字文と円形文が突起し波状口縁を形成している。地膚は赤褐色を呈すが焼成時の黒斑が表裏を広範囲におおっている。朱の生漆が内面全面に塗布されているが、胴部はほとんど剝落している。特に、内側口縁部はベッタリ残着していて見事である。器膚はスベスベしており



第39図　J11号住居址出土遺物実測図（1：4）

硬く焼きしめられている。

2は、炉埋設大鉢で最大径53cmを測る。口縁部を3～4cm、胴下部～底部を15cm程欠落し器高は45cm位になる大鉢形土器である。胴部に耳状突起が区画帯の左右に配され、区画帯内の文様は連続コの字文、綾杉状の刻目文が施される。その他隆帯上にも刻目が施されている。褐色を呈し硬く焼きしめられている。炉内に埋設されて時間的に短かかったのか焼けただれた様相がない。

拓影は、隣接したJ10号住居址の唐草文系IIの土器群と混入している。10、11、15が蓋受口を有し、渦巻沈線文が描かれた唐草文系の土器片である。

1は、耳状突起で茶褐色を呈し器膚があらい。2、5、21、25は、隆帯に連続刻目を配した破片で、蛇体や区画帯に施される。3、6は同一個体で接合される。細い竹管の先を押圧した文様は、この時期の装飾突起等に施されているが、これは、コの字連続文と共に口縁に施文されている。4、9も同一個体の口縁部である。器肉がうすく、煤とおこげが顕著である。9は突起部の蛇体文が垂下するとおもわれる。7は、口縁部のヘラによる連続刻目文、8、13は、渦巻突起口縁部に細線文が施されている。14、22は接合される同個体であるが、12と文様構成が同

第40図　ＪＩＩ号住居址出土土器拓影（１：３）

一である。ひねり突起と三角形の区画が沈線によって描かれる。

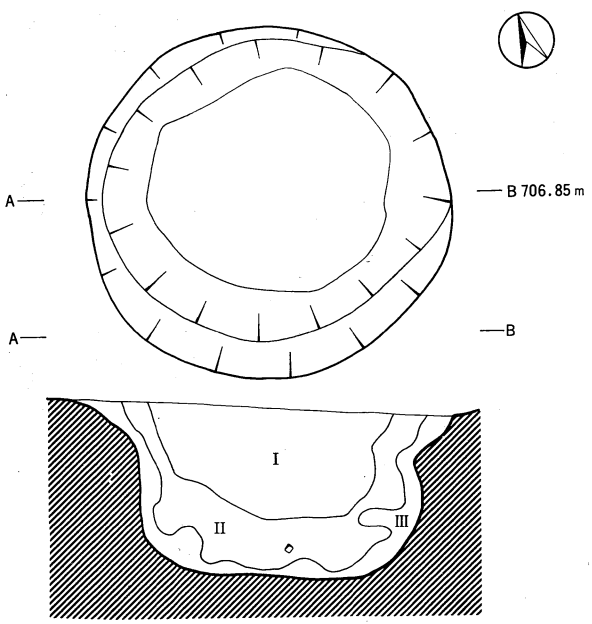
16、17、18、29は、連続コの字文、隆線刻目文、三叉文等で構成されている、19、20、27は、共に折り返し口縁をもち、19は三角押引文が20は角押文に細線文が、27は斜線文で文様構成され、23、24とともに古い様相を呈する土器群で混入であるとおもわれる。26、30は浅鉢である。30は、39図1の浅鉢と同類であり、2次使用として径1.3cmの孔が穿ってある。26は、押引文が施され、特に内側口縁の巾が狭く皿状の浅鉢である。28は、五領ケ台の影響が強い。三角刻目文を交互にえぐることによって連続コの字文が描かれている。さらにコの字文上に細線文が施される。

本住居址は、混入土器片が多いが、埋甕炉に使用されていた大鉢形土器に代表される、藤内II式に比定されるであろう。

（島田　恵子）

2　土　　坑

1）D1号土坑（第41図）



第41図　D1号土坑実測図（1：30）

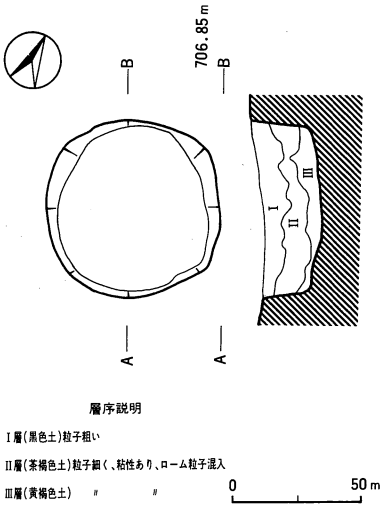
本遺構は、H・I－1・2グリッド内にて検出された。

平面プランは、長径140cm、短径138cmを測る円形を呈する。主軸方位は、N－17°－Eを示す。底面は確認面から65cmを測る。掘り込みは立上り際まで袋状を呈しているが、立上り際20cmからはなだらかな様相を呈する。覆土は3層によって形成され、I層は炭化粒子を混入していた。

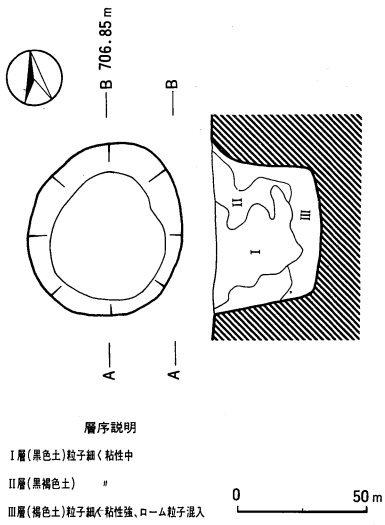
遺物の出土は皆無で時期を決定する所見は得られなかったが、袋状の掘り込みからして、D6号、D7号土坑に類似点が多く、さらに近接していることからも同土坑群に位置付けられよう。

土坑の性格は、貯蔵穴であるとおもわれる。

（島田　恵子）



第42図　D２号土坑実測図（１：30）



第43図　D３号土坑実測図（１：30）

２）Ｄ２号土坑（第42図）

本土坑は、Ｅ－７グリッドより検出された。Ｄ３号、Ｄ４号土坑と隣接し、掘立建物２号址内に位置する。

平面プランは、68cmを測る円形を呈し、主軸方位はＮ－27°－Ｗを示す。確認面からの深さは23cmを測り、壁は垂直に立上る。

覆土は３層によって形成され、Ｉ層は粒子の粗い黒色土で、II、III層はローム粒子を混入するきめ細く粘性のある褐色土を基調とする。

遺物の出土は皆無で、時期、性格を決定する所見は得られなかった。

３）Ｄ３号土坑（第43図）

本土坑は、Ｄ－７グリッドより検出された。Ｄ２号土坑と同じく掘立建物２号址内に位置し、Ｄ４号土坑に隣接する。

平面プランは、長径67cm、短径60cmを測る楕円形を呈する。主軸方位は、Ｎ－３°－Ｅを示す。最深部は40cmを測り壁は垂直に立上る。覆土は黒褐色土を基調とした３層によって形成される。

Ｄ２号土坑と同様、遺物の出土は皆無であった。

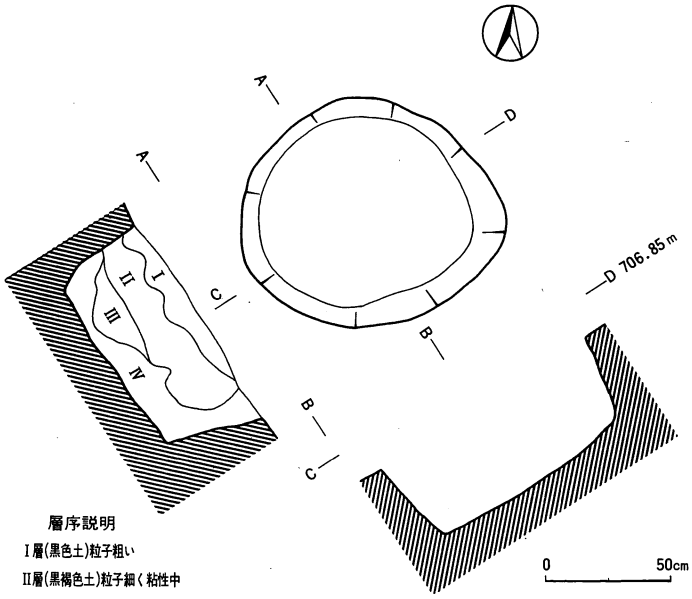
（島田　恵子）

４）Ｄ４号土坑（第44図）

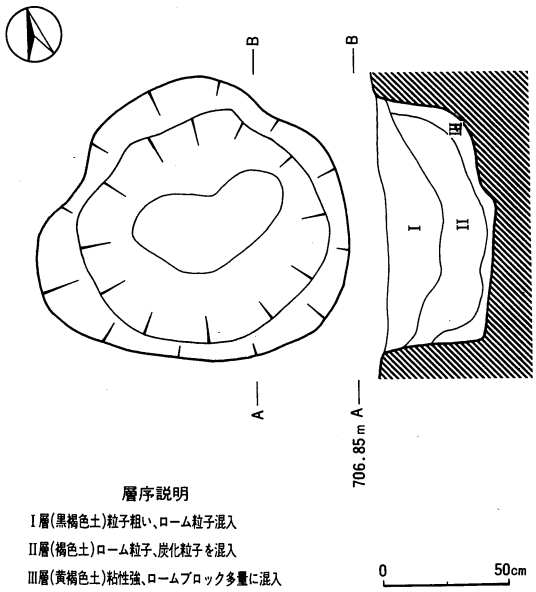
Ｄ４号土坑は、Ｄ－６・７グリッド内より検出された。掘立建物２号址内に位置し、Ｄ２号、Ｄ３号土坑に隣接する。

平面プランは、長径105cm、短径92cmを測る楕円形を呈する。主軸方位はＮ－８°－Ｗを示す。確認面からの深さは40cmを測り、壁は垂直に立上る。覆土は、黒褐色土を基調とした４層で形成される。

本土坑も遺物の出土は皆無であったが、掘立建物２号址のP_3が本土坑に入り込んでいることから、時期は掘立柱建物址に先行する。このことから、Ｄ２号、Ｄ３号土坑と共に、おおよその時期は、その規模、様相、覆土、レベル的な面等から、Ｄ10号～Ｄ17号土坑群に類似するた



第44図　D４号土坑実測図（１：30）



第45図　D５号土坑実測図（１：30）

め、同土坑群の時期に含まれるものと考えられる。

本土坑群は、11世紀初頭の国分期後葉に比定されよう。

（島田　恵子）

５）D５号土坑（第45図）

本土坑は、D・E－１グリッド内にて検出された。H４号住居址内の北西側に存在する。

平面プランは、長径124cm、短径113cmを測るゆがんだ不整形を呈する。主軸方位はN－13°－Eを示す。

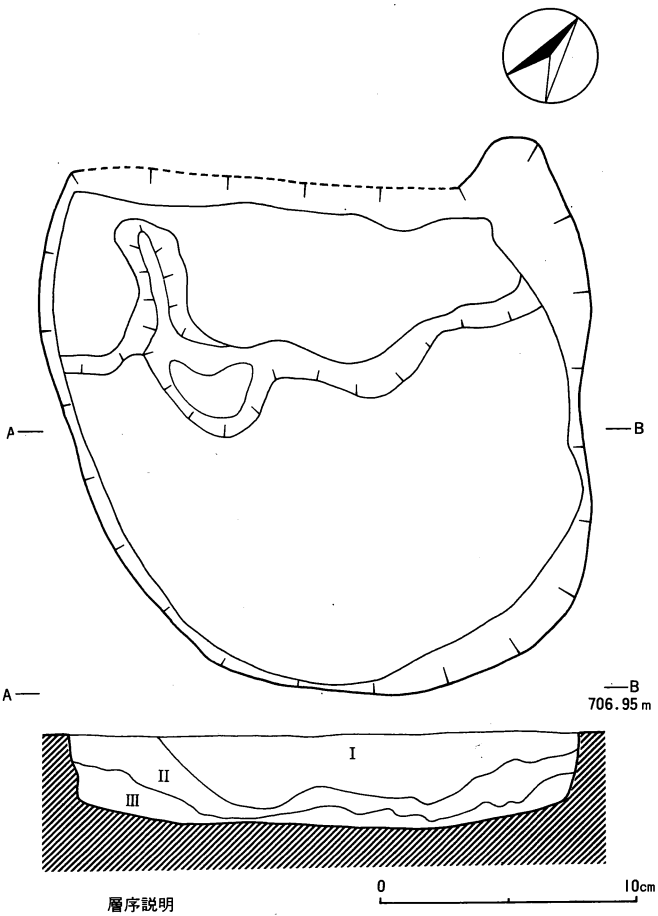
底面は段差があり、最深部は43cmを測る。覆土は、褐色土を基調とした３層によって形成される。II層に炭化粒子を混入する。

本土坑は、H４号住居址の貼床面が軟弱であったことから検出に至った。貼り床が本土坑上面のみ沈んでおり、H４号住居址構築以前よりD５号土坑が存在していたことを裏付けているといえよう。規模、レベル的関係、覆土等の様相から、近接するD６号、D７号、D８号、さらにD１号土坑群に含まれるとおもわれる。　（島田　恵子）

３　特殊遺構

１）T１号特殊遺構（第46図）

本遺構は、B－７・８グリッド内にて検出された。J11号藤内II式期の住居址を切って構築している。プラン確認においては、鮮明な黒色土を呈しており新しい遺構であること



第46図　T 1 号特殊遺構実測図（1：30）

が判然としていた。

平面プランは、東西215cm、南北197cmを測るが北壁は攪乱が入っており推測である。主軸方位はN－37°－Wを示す。

覆土は黒褐色を基調とした3層によって形成される。北壁際75cmを測る範囲は深さ10cmの凹みが生じ、遺構内に段差を形成している。

遺物は、須恵器、土師器等の細片が覆土中より出土しており、本遺構は、H 4 号住居址とほぼ同時期に比定できるものとおもわれる。遺構の性格は、規模、形状、遺構内の段差等から土坑とは異なるとおもわれるが、判然としない面が多い。

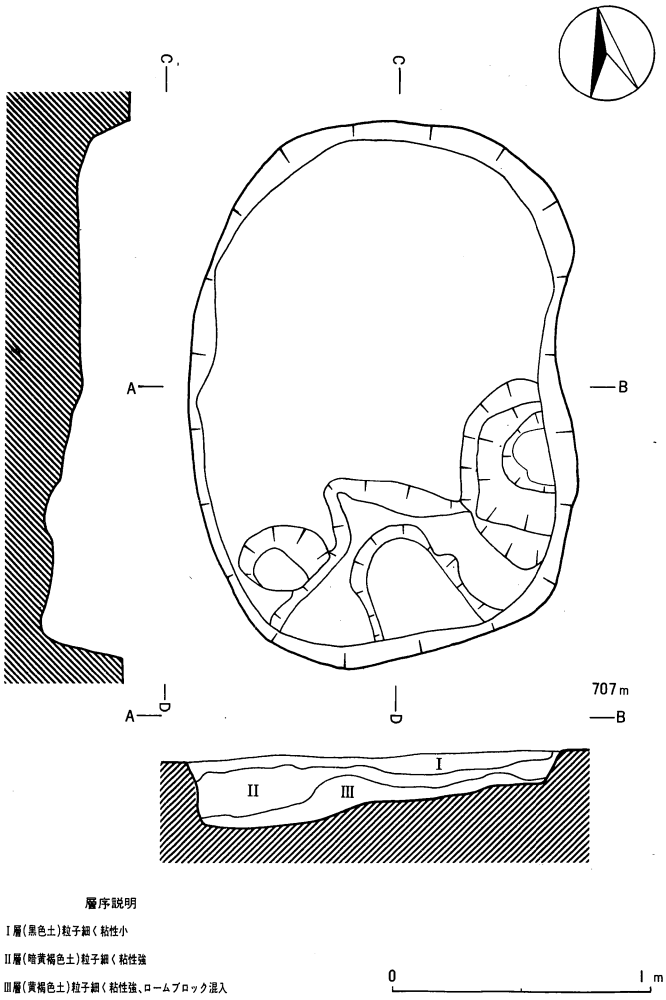
2）T 2 号特殊遺構（第47図）

本遺構は、B・C－5・6グリッド内にて検出された。遺構の約半分はJ 11号住居址を切って構築されている。

本遺構も、T 1 号と同様にプラン確認は容易であった。

平面プランは、南北に210cm、東西150cmを測る楕円形を呈する。主軸方位はN－12°－Eを示す。覆土は3層によって形成されている。床面は凸凹で深さは20～30cmを測り壁は垂直に立上る。特に南壁際80cmの範囲の床面は、凸凹が生じていて東壁にかけて深さ20cmの大きな凹みが存在する。

遺物は、T 1 号と同様に須恵器、土師器の細片が覆土中より出土している。H 4 号住居址、D 2 号～4 号土坑と同時期の国分期前葉～後葉にかけての遺構であるとおもわれる。しかし、その性格は、遺構内に凹凸が生じており、T 1 号と同様に何等かの施設にかかわるものと考えられ、やはり土坑とは区別されるものであろうとおもわれるが判然としない。



第47図　T 2号特殊遺構実測図（1：30）

中央道発掘調査箕輪町中道遺跡から、同様な規模、形状を呈す遺構が検出されており、竪穴4号、竪穴5号がこれにあたるもので、やはり性格は不明とされている。

（島田　恵子）

4　掘立建物址・ピット群

1）第1掘立建物址（第48図）

本遺構は、D・E－10・11グリッド内にて検出された。

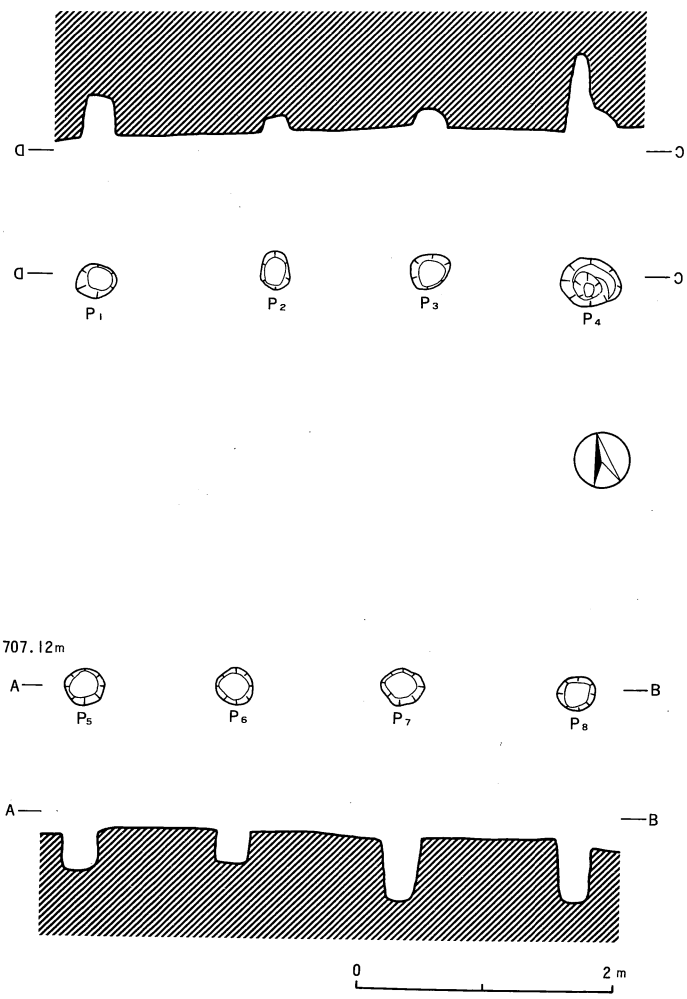
ブルトーザーによる廃土後の平面整地作業中において、8個のピットがほとんど同時に検出されたのである。一見して配列ピットであることがわかり、地上建造物の掘立柱穴址であることを予想した。

配列ピットを一棟の建造物とした場合、長軸はほぼWを示し、ピットの中心間距離は東西380cm、南北320cmを測る。ピット列はほとんど一直線上に並び、ピット間も120～130cmを測り、かなり正確なピットの配列状況である。各ピットの規模は次のようである。

P_1は47×37－60cm、P_2は30×27－15cm、P_3は22×30－10cm、P_4は31×27－30cm、P_5は30×30－30cm、P_6は29×29－25cm、P_7は35×28－50cm、P_8は30×25－50cmである。ピットはほとんどが径30cm前後となっているが、深さにはかなりのバラツキが見られる。

この掘立建物址の時期であるが、決め手となる所見はあまり得られていないが、本柱穴P_3が、D 3号土坑を切って掘り込まれていることから、本遺跡中の遺構では一番新しくなるとおもわれる。従って、D 3号土坑の時期である11世紀初頭の国分期後葉から中世に位置付けられるものと考えられる。

（柴　登巳夫）



第48図　第Ⅰ掘立建物址実測図（Ⅰ：60）

2）第2掘立建物址（第49図）

本遺構の位置するところは、C～F－6～8グリッド内である。前述した第1掘立建物址と同じ性質の遺構であるため比較しながら考察した時、かなりの相違をみる。

第1掘立建物址は、8個のピットで構成されているのに対し、本遺構は6個のピットで構成されている。

又、それぞれのピットも径が20cm前後であり、深さも落込み確認面より10～18cmがほとんどである。

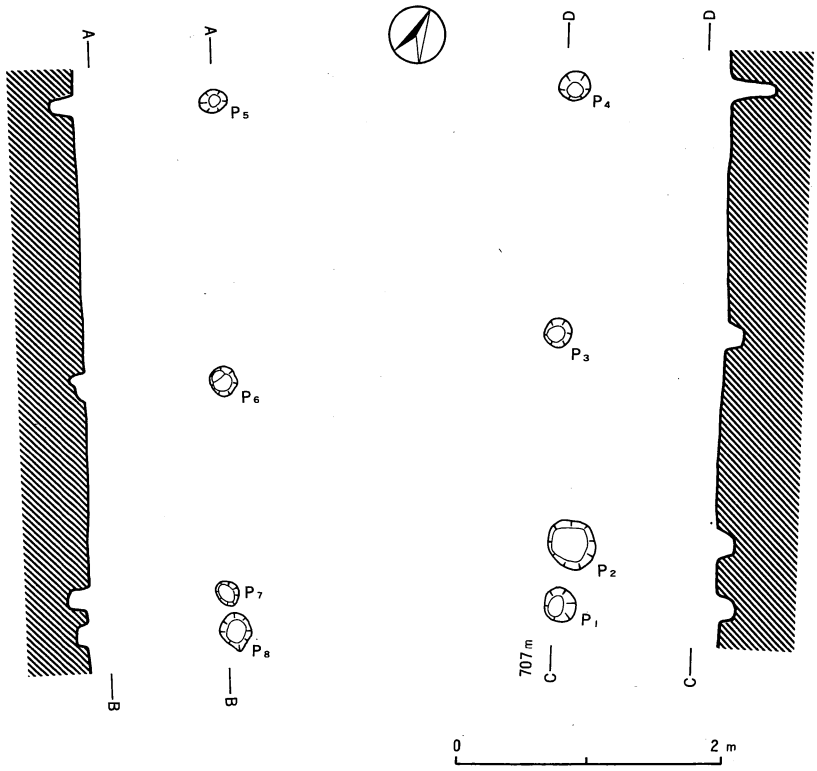
図に示すP2およびP8は本遺構の主柱穴ではなく、他の遺構のものと考えるのが適当であろう。長軸のピット中心間距離は370cm、短軸は約260cmとなっている。各ピットの配列位置にも多少ずれがあり、規則正しい配列にはなっていない。

本遺構も、第1掘立建物址と同様、時期、性格等に関する所見は得られなかったが、ほぼ同様に位置付けてよいとおもわれる。ただ、本遺構は規模が小さいことから、簡単な掘立状の建物であったと考えられる。

（柴　登巳夫）

3）ピット群（第50図）

B・C・D・E－6・7・8・9・10グリッドにかけて、29個のピット群が検出されている。8cm～15cmを測る円形の小ピット18個と、20cm～35cmを測る中ピット11個の2群に大別される。特に中形のピットは、楕円形、円形、テラスを有する楕円形と形状は統一していない。



第49図　第２掘建建物址実測図（１：60）

深さは、小ピット群がほぼ10cm内外で、中形ピット群は20cmを測る。ピット底面は、約10～20cmの角形、方形状の掘り込みを呈し、柱痕の形態をあらわしている。これ等配列の規格性のないピット群は、廃絶後の住居の柱穴が相当含まれているものと考えられる。また、８cm～15cmを測る小ピット群は、住居の柱穴にしては弱すぎる。住居址とは関係のない柱穴となろうがその性格は判然としない。

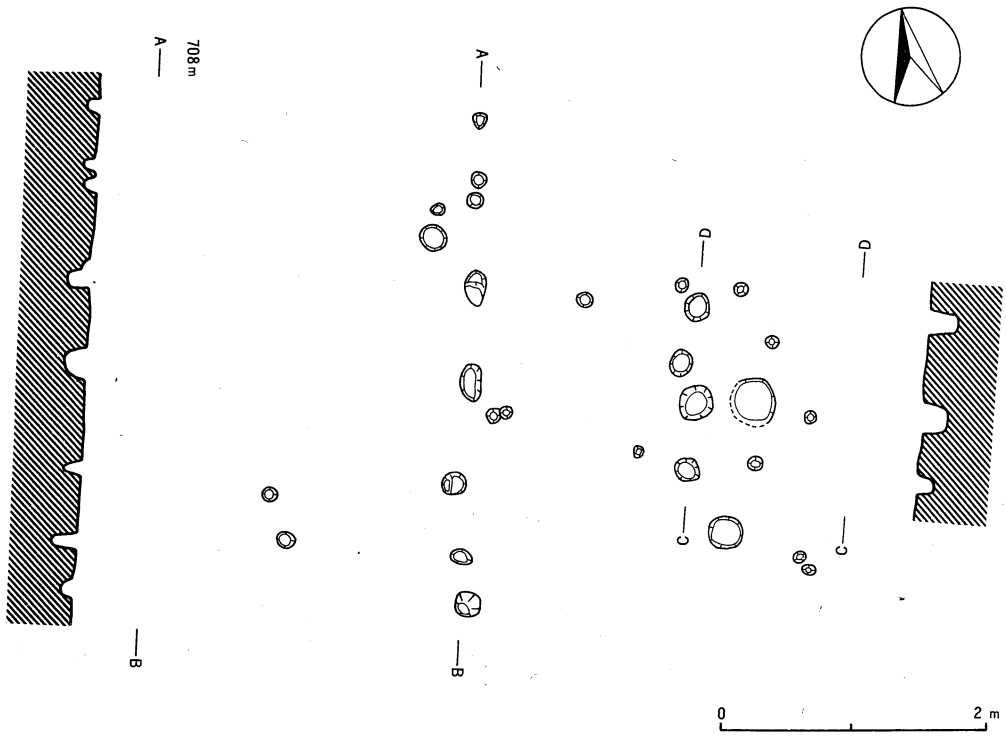
本ピット群は、掘立建物址の存在した国分期後葉から中世に位置付けられよう。

（島田　恵子）

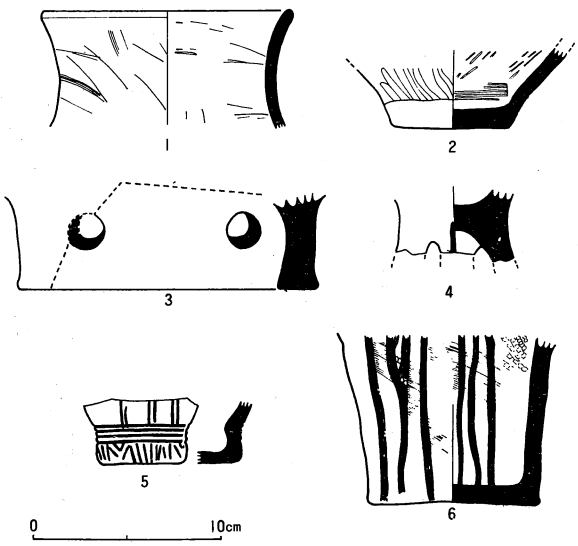
５　グリッド出土遺物

第51図は第１次調査のグリッド出土土器を一括した。１は、口径13.5cmを測る弥生時代後期後半の小形甕形土器である。口縁部は横ナデが、頸部は斜めのヘラミガキが施され、赤褐色を呈し硬く焼きしめられている。甕は胎土が精選されている天竜川流域の特徴を表わしている。

２は、唯一の土師器甕の底部である。表面は縦方向のヘラケズリが施され、内面は櫛状工具による調整がなされている。黄褐色を呈しかたく焼きしめられており、弥生土器と比較して膚



第50図　ピット群実測図（1：60）



第51図　グリッド出土.遺物実測図(1：4)

のなめらかさ硬さの様相が異なる。土器製作時に底部貼り付けの調整が充分でなかったため、すっぽり底がぬけた状態で出土したが幸いにも接合が可能となった。

3の器台は、粗雑な調整である。径2cmの孔をあける際に生じた粘土が裏面の孔のまわりにはみ出て器膚もゴツゴツである。赤褐色を呈し焼成はかたい。4は、台付土器の脚部と鉢底部の接合部の破片である。脚は4足となるように4分割されている様相を呈する。3・4ともに藤内式前後に出現する土器である。3の器台は表採で、4はJ11号住居址確認時のE－6グリッドより出土。

5は、B－5グリッド出土のミニチュア土器である。底径4.5cmを測る。器形は、胴下部がく

びれ胴中央にかけて外反する深鉢形であろう。ヘラで沈線を施している。横位の沈線文は線が深く、半隆起線といった感じを呈している。その下部の沈線文はヘラで切り刻みを粗雑に入れている。黒褐色を呈し調整および焼成が悪い。篭畑II式の土器である。

第52図　表採・グリッド出土土器拓影（1：3）

6は、磨消縄文と沈線文とによって文様構成がなされ、内面はよく磨かれており外面と共にきれいな器膚を呈する。胴部でわずかにくびれるキャリパー形深鉢である。内面は茶褐色を呈し、外面は褐色を呈する。焼成は良好である。曽利Ⅳ式に比定される。

第52図は第1次調査の表採およびグリッド出土縄文時代の土器片を一括した。ここでも前期末の土器片が数多く見出されている。

1、4は、篭畑Ⅰ式のソウメン状貼付文土器である。4は、口縁突起部で半割竹管による連続爪形文が施され、口唇部には微細な粘土紐による小円形の浮き出し文様を施している。

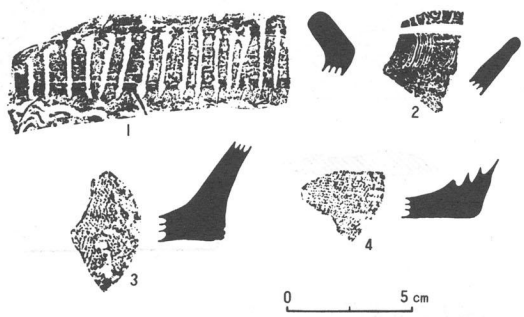
2、5、6、13、16は、篭畑Ⅱ式の土器片で、格子刻目文、結節状沈線文、線の深い縦線文などで構成され、13は口唇部にソウメン状貼付文をもつ。茶褐色を呈し、硬く焼きしめられている。3、7、8は、日向Ⅰ式の土器片である。3、7はヘラ切り平行条線に結節状沈線文が配されている。8は、綾杉状の条線文に結節状浮線文が施された口縁部である。9、14、15は連続爪形文、地文に大粒で撚りのゆるい縄文を施している。器肉がうすく、焼成が硬い。黄灰色を呈し胎土も異なる。関西系土器の搬入品である。

12は、三角形の刺突文に渦巻隆線が施された把手で20、21、22、23、25、26とともに唐草文系Ⅱの土器群に含まれる。17、27、28は藤内式の土器片で28は浅鉢である。18、29は平出3A式に、19は押引文に三叉文が配され赤褐色を呈す。狢沢式の土器片である。24は、条痕文土器である。拓影は晩期のように見えるが、胎土、焼成から中期に属するであろう。30は、斜縄文にヘラまたは貝殻状の背腹で沈線を描き、斜縄文の間に組紐状の懸垂文を施した新しい要素の土器片であるが唐草文系Ⅱに含まれる。

第53図は、弥生時代の表採、グリッド出土の土器片を一括した。

1は、段上ヘラ描縦線文で座光寺原式期より発生し、中島式期で普偏的になる壺形土器口縁部である。

2は、口唇部に点烈をもち、弱い櫛描き短線文が口縁部に施された小形甕片である。3、4は細い糸で織られた布圧痕が底部に施された、きわめて稀な織布圧痕底部片である。詳細は考察編に記してある。　　（島田　恵子）

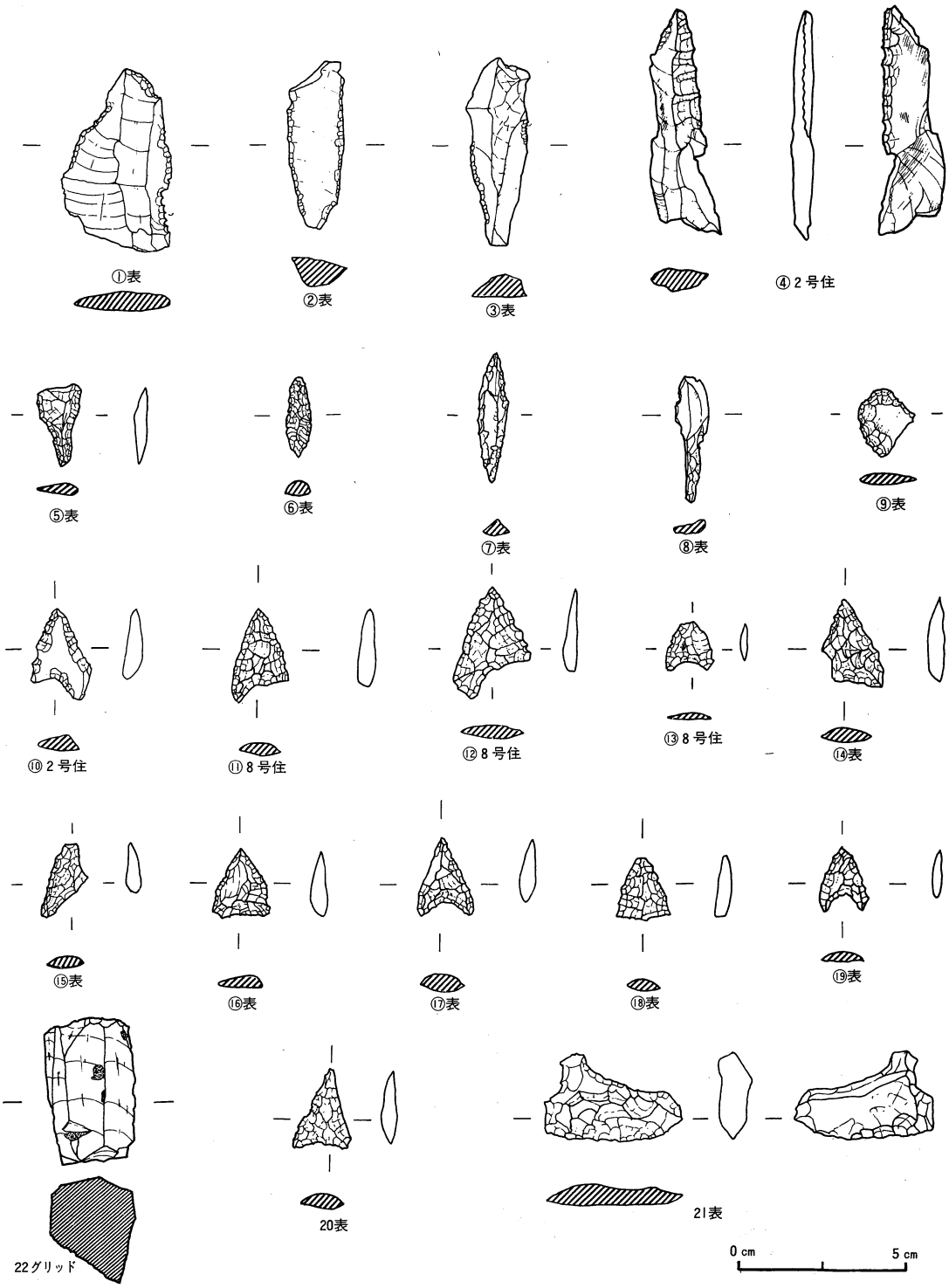


第53図　表採・グリッド出土の弥生土器拓影（1：3）

6　石　　器

第54図は、剥片石器、石鏃類を中心にまとめた。

1は、刃部を左に、刃つぶしを右に調整加工し、刃部は使用痕による刃こぼれが顕著である。親指を表面中央におき、裏面に人差指



第54図　上の林遺跡出土石鏃その他実測図(1：3)

と中指で石器を持ち、皮はぎやナイフのかわりに一寸したものを切ることに使用するには格好の絶品である。刃部の鋭利さは、22の石匙に比べてはるかに勝るものである。断面がうすく、裏面が湾曲する。黒曜石剝片を使用し加工したものである。

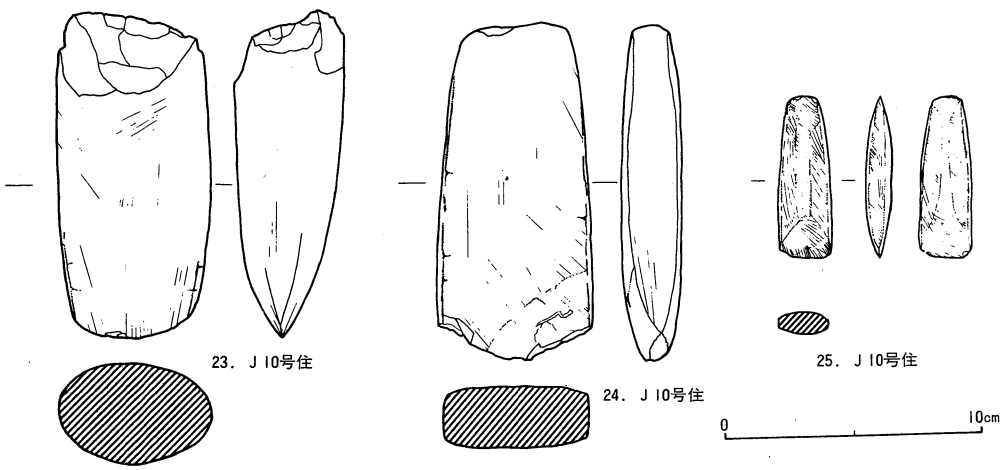
2、3は、両側部に微少の調整が施されている。剝片石器である。4は、右側縁全面に連続的な調整を施し刃部を形成、刃部は直線で鋭利である。5～8はドリルである。5は錐部が湾曲し、先端を欠損する。6は錐部が細く調整されている。7は、チャート製で両端を鋭く尖らせ表面中央に陵を有す菱形の細身棒状である。8は、錐部を細身に細長く尖らせ上部につまみを用いたもっともドリル的な形状である。9は、右下端部を欠損する円形の剝片石器である。

10～20は石鏃である。10は、J2号住居址出土で、製作途上で左脚部が打損したため製作をとりやめたものであろう。11～13は、J8号住居址出土で、11、12は右脚部を欠する。11は両刃が鋭利で大形石鏃である。12は、側縁を細く剝離した優品である。13は、上部先端を欠く。快りが深く小形である。14は、左下端部を欠いた無茎鏃、剝離は12に類似する。14～20までは表採である。15は、右脚が打損、快りが深い。16は完形の平基無茎鏃で表側縁は細く調整されている。17は快りが深く、両側の刃縁がほぼ直線に近い。18は下端部を欠損。19は、快りの最も深い凹基無茎鏃の完形品である。20は、右側縁を欠損した、19と同類のものである。

21は、赤色チャート製の横刃形石匙で左端を欠損する。表面は比較的細かく調整されているが、裏は刃部側縁がわずかに加工されているのみで無加工に近い。22は、円筒形状の石核である。上、下端部に打面をつくり、縦長に剝離した痕跡が4面認められる。

第55図は、J10号住居址出土石器を中心にまとめた。

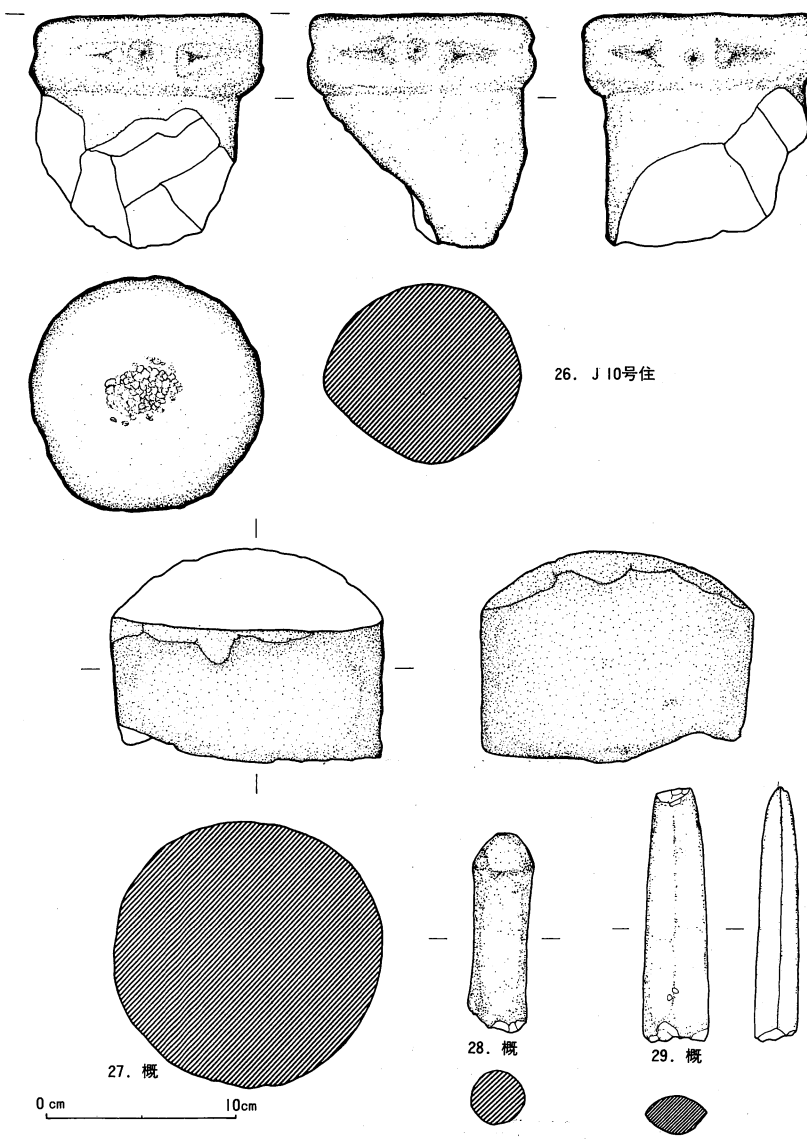
23～25は、J10号住居址床面直上より出土した。23は、緑泥岩製の磨石斧で基部上端を打損する。無鎬の円刃で鋭利な刃部を有す。緑色を呈し研磨はなめらかによく磨かれている。刃部



第55図　J10号住居址出土石器実測図（1：3）

が一度打損し再度刃部を形成した痕跡が明らかであるが、刃部全面が研磨されていないため両側刃角は打損が残っている。

25はチャート質のノミである。刃部を直刃にし、さらに基端部にも円刃がつけられている。両刃には研磨痕が明瞭に残っている。縁青色を呈す優品である。



第56図　上の林遺跡出土石棒実測図（1：4）

第56図は、石棒、石剣を中心にまとめた。26は、J10号住居址出土の石棒である。床面から頭部が顔を出した状態で欠損部分が埋めこまれていた。頭部は平らで敲打痕が認められ、再利用していたか屋内祭祀として祭っていたものであろう。砂岩質で頭部側面に3単位に分割して玉抱三叉文の彫刻が陰刻されている。一部に赤色が染みこんでいる。27は、両端を欠損した石棒である。径14cmを測り、かなり大形の石棒となろう。巨晶花崗岩を使用した概出遺物である。28は、同じく概出の石棒で、輝緑岩を使用し、敲打のあとわずかに研磨している。下端部を欠損している。単頭で亀

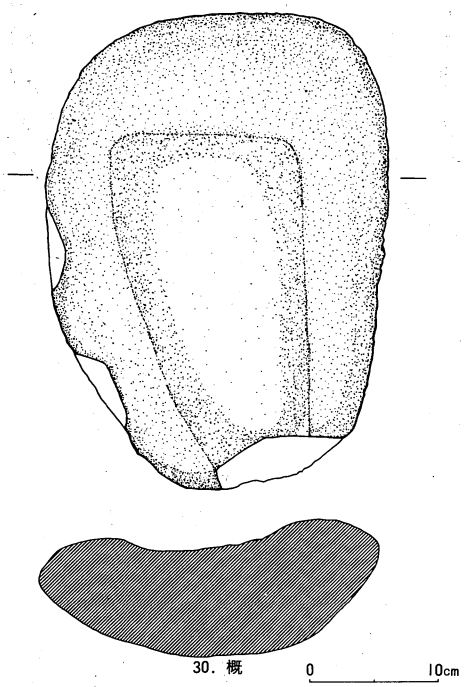
頭状を呈す。

29は、概出遺物の石剣である。輝緑凝灰岩を使用している。晩期のものであるとおもわれる。

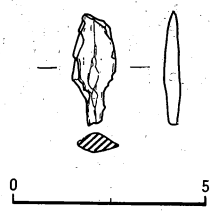
第57図の石皿は概出遺物である。巨晶花崗岩質で磨り凹めた部分が浅く、楕円形を呈す。

第58図は、本調査中に表採した銅鏃である。中央に陵を有す。全長径3㎝、巾1.2㎝を測る小形である。形態等から弥生時代に属する銅鏃であるとおもわれる。伊那では豊岡村伴野原遺跡喬木村帰牛原遺跡（十万山地区）等から出土している。

（島田　恵子）



第57図　上の林遺跡出土石皿実測図（1：6）



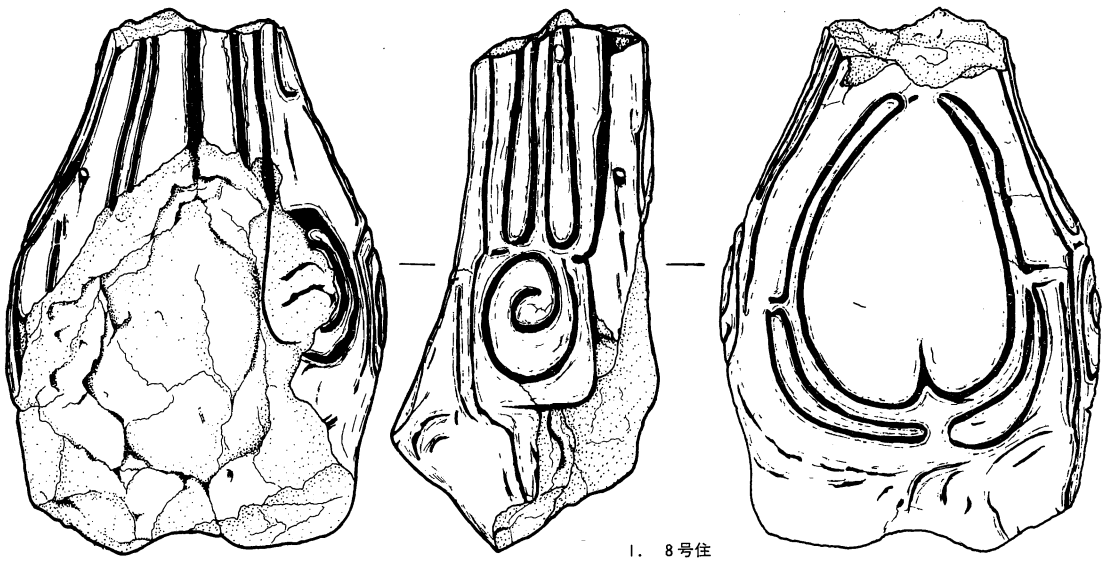
第58図　上の林遺跡
出土の銅鏃（1：2）

7　土　製　品

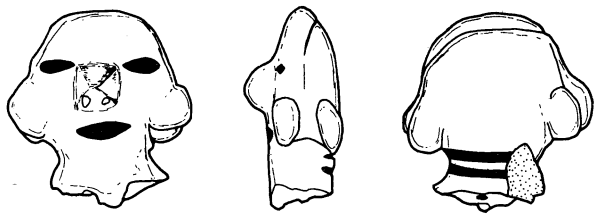
図示した土製品は、J 8号住居址出土のものが大半である。

1の土偶は、現存高15㎝を測る大形土偶の胴部片である。脚、胴上部から顔が毀たれ、妊娠状態でふくらんでいたおなかの部分がえぐり取られたようにポッカリ穴が空いている。沈線を主体にした文様構成で、下端で突き出た逆ハート形のお尻、おなかとお尻の側面は渦巻沈線文が配されている。同じ類型のこの土偶は、下伊那郡豊丘村伴野原遺跡、高森町増野新切遺跡、上伊那郡中川村刈谷原遺跡、南箕輪村、茅野市和田遺跡、塩尻市平出遺跡、同栃久保遺跡、富士見町立沢遺跡、東筑摩郡波田村葦原遺跡、本町の中山遺跡等の広範囲にわたって出土している。

J 8号住居址P_6の貯蔵穴内から出土した。中期に入ってより土偶の住居址内出土がみられるようになるが、本住居址の唐草文系IIに共なう土偶であることから、祭祀の一つとして住居内に顔と手を毀ち土偶を埋めたものと考えられる。赤褐色を呈すが焼成時の黒斑が所々に付いている。2の土偶顔面も、J 8号住居址内P_2とP_6の間の覆土中よりミニチュア土器と共に出土した。ややつりあがった目、開いた口、高くつき出た四角形の鼻、髪を耳もとで2つに結えた可憐な髪形、大きな耳は耳飾りを、首の2条の沈線は首かざりを表現したものであろう。ほほ笑みを浮べたこの土偶は、うら若き乙女が想定される。首と胴を木の棒でつないだ径3㎜の

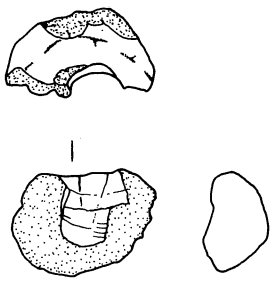


1. 8号住

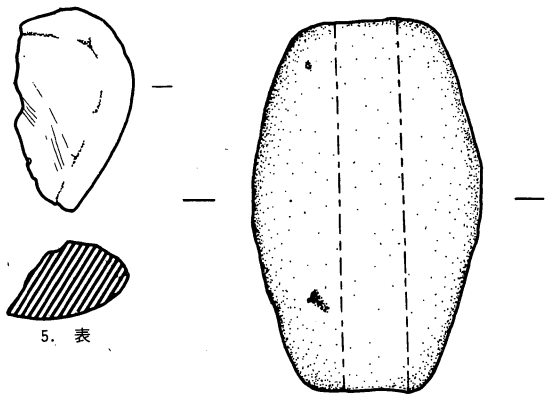


2. J 8号住

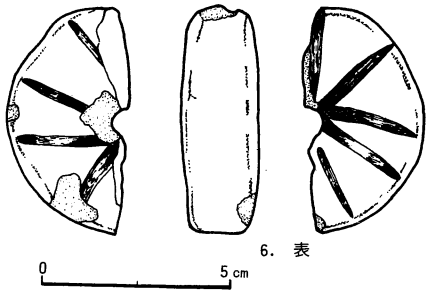
3. 表



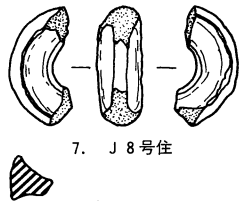
4. J 8号住



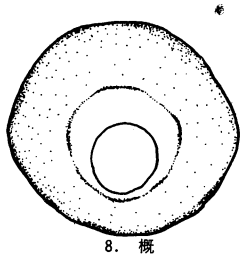
5. 表



6. 表



7. J 8号住



8. 概

0 5cm

第59図　上の林遺跡出土土製品実測図(1：2)

穴が毀たれた首の断面に残っている。顔面は、金雲母が光る白褐色を呈し、後の髪の部分は黒漆が塗られている。

3は、表採の土偶顔面である。粗雑な作りで鼻と目の上はいきなり頭部であり、はぎとられた様相の割れ口が鼻の下から後の頭部へとつづき、よく観察しなければ土偶と判別もし難い。

4、5は、土笛の破片である。4は、J8号住居址覆土内から出土したもので、口唇をおしあてて空気を送って音を出す孔の真中で割れている。黒漆を全体にしみ込ませた粘土で作ったものらしく漆黒を呈し、小形である。5は、表採で赤褐色を呈し器膚はきれいに調整されている。大きさは8cm程になるとおもわれる土笛片である。

6は、円盤状の紡垂車で表採である。白褐色を呈し、かたく焼きしめられている。文様は孔を中心に花びらのように開いた状態で5連の貝殻の背ばらによる条痕文が施され、弥生時代の紡垂車である。

7は、環形で中心孔を有し両面共に孔にむけて凹んだ無文の耳飾りである。赤褐色を呈し、調整は粗雑である。8は、大形土錘で青灰色を呈し、無調整で膚はザラついている。天竜川の激流の中での漁労に使用したとおもわれる大形である。概出遺物であるが、調整、焼成等の様相等から新しい時代（奈良・平安）であるとおもわれる。

（島田　恵子）

第1表　上の林遺跡出土石器一覧表

挿図番号	種別	石質	最大長	最大巾	最大厚	重量	出土状態	備考
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
54－4	剝片石器	黒曜石	6.8	1.6	0.7	5.6	J2号住	井戸尻II式
54－9	剝片石器	黒曜石	2.1	1.6	0.4	1.2	J2号住	
54－10	石　鏃	黒曜石	2.7	1.2	0.5	1.7	J2号住	
54－11	石　鏃	黒曜石	(2.8)	(1.3)	(0.4)	(1.2)	J8号住	唐草文系II
54－12	石　鏃	黒曜石	(3.3)	(1.9)	(0.4)	(1.5)	J8号住	
54－13	石　鏃	緑泥岩	(1.5)	(1.3)	(0.2)	(0.4)	J8号住	
55－23	磨石斧	蛇紋岩	(12.7)	(5.9)	(4.0)	(530)	J10号住床面	唐草文系II
55－24	手　斧	チャート	6.4	2.1	(2.4)	19.3	J10号住床面	
55－25	磨石斧	蛇紋岩	(13.1)	(5.8)	0.9	(350)	J10号住床面	
56－26	石　棒	砂　岩	(12.5)	(12.4)	(12.7)	(1.980)	J10号住床面	

挿図番号	種別	石質	最大長	最大巾	最大厚	重量	出土状態	備考
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
54－1	剥片石器	黒曜石	5.4	3.2	0.5	7.0	表採	(発掘時の表採である)
54－2	剥片石器	黒曜石	5.0	1.7	0.8	7.5	表採	
54－3	剥片石器	黒曜石	5.5	1.7	0.7	5.1	表採	
54－5	ドリル	黒曜石	2.3	1.1	0.4	0.8	表採	
54－6	ドリル	黒曜石	2.4	0.8	0.5	0.6	表採	
54－7	ドリル	チャート	3.9	0.9	0.5	1.8	表採	
54－8	ドリル	黒曜石	3.7	1.0	0.4	1.0	表採	
54－14	石鏃	黒曜石	(2.5)	(1.4)	(0.5)	(1.2)	表採	
54－15	石鏃	黒曜石	(2.2)	(1.1)	(0.4)	(0.5)	表採	
54－16	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.4	0.9	表採	
54－17	石鏃	黒曜石	2.3	1.3	0.6	0.9	表採	
54－18	石鏃	黒曜石	(1.8)	(1.0)	(0.4)	(0.6)	表採	
54－19	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.4	表採	
54－20	石鏃	黒曜石	(2.7)	(1.7)	(0.4)	(1.0)	表採	
54－21	石匙	赤チャート	2.6	4.0	0.6	81	表採	
54－22	石核	黒曜石	4.2	2.5	3.2	46	表採	
56－27	石棒	巨晶花崗岩	(11.5)	(14.3)	(14.3)	(3040)	表採	
56－28	石棒	輝緑岩	(10.7)	(2.9)	(2.9)	(200)	概出	
56－29	石剣	輝緑凝灰岩	(13.6)	(3.3)	(2.1)	(160)	概出	
57－30	石皿	巨晶花崗岩	(37.1)	(26.2)	(8.5)	(15000)	概出	

上の林遺跡第2次調査

昭和56年

箕輪町教育委員会

本　文　目　次

第１章　発掘調査の経緯 …… 1
　第１節　発掘調査の概要 …… 1
　第２節　発掘調査日誌 …… 3
第２章　遺構と遺物 …… 6
　１．住　居　址 …… 6
　　１）Ｙ12号住居址 …… 6
　　２）Ｊ13号住居址 …… 8
　　３）Ｙ14号住居址 …… 12
　　４）Ｊ15号住居址 …… 15
　　５）Ｊ16号住居址 …… 24
　　６）Ｊ17号住居址 …… 26
　　７）Ｊ18号住居址 …… 28
　２．土　坑 …… 30
　　１）Ｄ６号土坑 …… 30
　　２）Ｄ７号土坑 …… 31
　　３）Ｄ８号土坑 …… 33
　　４）Ｄ９号土坑 …… 34
　　５）Ｄ10号土坑 …… 34
　　６）Ｄ11号土坑 …… 34
　　７）Ｄ12号土坑 …… 35
　　８）Ｄ13号土坑 …… 35
　　９）Ｄ14号土坑 …… 36
　　10）Ｄ15号土坑 …… 36
　　11）Ｄ16号土坑 …… 37
　　12）Ｄ17号土坑 …… 37
　　13）Ｄ18号土坑 …… 37
　３．小　竪　穴 …… 38
　　１）小竪穴１号址 …… 38
　４．グリッド出土土器 …… 39
　５．上の林遺跡出土の概出土器 …… 39

6．石　　器……41
7．土 製 品……51
　ま と め……56
第3章　考　察（第1次・第2次調査）……57
第1節　遺　構……57
　1　縄文時代の住居址……57
　2　弥生時代の住居址……59
　3　土　　坑……60
第2節　集　落……62
　1　縄文時代……62
　2　弥生時代……63
　3　平安時代……74
第3節　遺　物……65
　1）前期の遺物……65
　2）中期初頭～中葉の遺物……65
　3）唐草文系II式土器……66
　4）唐草文系II・IIIの編年について……67
　5）弥生時代の遺物……68
第4節　煮 炊 用 土 器……69
第5節　屋 内 祭 祀……72
引用参考文献……75
結　語……77

付　　表　　目　　次

第1表　出土石器一覧表……54
第2表　上の林遺跡第1次調査検出住居址一覧表……57
第3表　上の林遺跡第2次調査検出住居址一覧表……58
第4表　上の林遺跡第1次調査検出土坑一覧表……60
第5表　上の林遺跡第2次調査検出土坑一覧表……61
第6表　煮炊用土器一覧表……71

挿　図　目　次

第１図　Ｙ12号住居址実測図 …… 7
第２図　Ｙ12号住居址出土遺物実測図 …… 8
第３図　Ｙ12号住居址出土土器拓影 …… 8
第４図　Ｊ13号住居址実測図 …… 9
第５図　Ｊ13号住居址出土土器実測図 …… 10
第６図　Ｊ13号住居址出土土器拓影 …… 11
第７図　Ｙ14号住居址実測図 …… 13
第８図　Ｙ14号住居址出土遺物実測図 …… 14
第９図　Ｙ14号住居址出土土器拓影 …… 14
第10図　Ｊ15号住居址実測図 …… 16
第11図　Ｊ15号住居址出土遺物実測図№１ …… 18
第12図　Ｊ15号住居址出土遺物実測図№２ …… 19
第13図　Ｊ15号住居址出土土器拓影№１ …… 20
第14図　Ｊ15号住居址出土土器拓影№２ …… 21
第15図　Ｊ15号住居址出土土器拓影№３ …… 22
第16図　Ｊ15号住居址出土土器拓影№４ …… 23
第17図　Ｊ16号住居址実測図 …… 24
第18図　Ｊ16号住居址出土土器実測図 …… 25
第19図　Ｊ16号住居址出土土器拓影 …… 25
第20図　Ｊ17・18号住居址実測図 …… 27
第21図　Ｊ17号住居址出土土器拓影 …… 28
第22図　Ｊ18号住居址出土遺物実測図 …… 29
第23図　Ｄ６号土坑実測図 …… 31
第24図　Ｄ６号土坑出土土器拓影 …… 31
第25図　Ｄ７号・Ｄ９号土坑実測図 …… 32
第26図　Ｄ７号土坑出土土器拓影 …… 32
第27図　Ｄ８号土坑・小竪穴１号址実測図 …… 33
第28図　Ｄ10号土坑実測図 …… 34
第29図　Ｄ10号土坑出土古銭拓影 …… 34
第30図　Ｄ11号土坑実測図 …… 35

第31図　D12号土坑実測図 ……35
第32図　D13号土坑実測図 ……35
第33図　D14号土坑実測図 ……36
第34図　D15号土坑実測図 ……36
第35図　D16号土坑実測図 ……37
第36図　D17号土坑実測図 ……37
第37図　D18号土坑実測図 ……38
第38図　D18号土坑出土遺物実測図 ……38
第39図　グリッド出土土器拓影 ……39
第40図　上の林遺跡出土概出遺物 ……40
第41図　上の林遺跡出土石鏃・その他実測図 ……41
第42図　上の林遺跡出土打石斧実測図 ……42
第43図　上の林遺跡出土磨石斧実測図 ……44
第44図　上の林遺跡出土凹石実測図 ……45
第45図　上の林遺跡出土磨石実測図 ……46
第46図　上の林遺跡出土磨石・砥石実測図 ……47
第47図　上の林遺跡J13号住居址出土石器実測図 ……48
第48図　J13号住居址出土石匙実測図 ……48
第49図　上の林遺跡J15号住居址出土石器実測図 ……49
第50図　J15号住居址出土石器実測図 ……50
第51図　D7号土坑出土石器実測図 ……50
第52図　D6・D8・D13号土坑出土石器実測図 ……51
第53図　上の林遺跡出土横刃形石器実測図 ……52
第54図　上の林遺跡出土土製品実測図 ……53
第55図　縄文時代前期末の土坑群と中期の住居群分布図 ……62
第56図　弥生時代後期・平安時代の住居群と土坑分布図 ……64
第57図　上の林遺跡出土土器の煤とお焦げ ……70

図　版　目　次

図版1　1．発掘調査区近景
図版2　1．Y1号、J2号住居址　　2．Y3号住居址
図版3　1．H4号住居址　　2．Y5、6、7号住居址

図版４　１．　Ｊ８号住居址　　２．　Ｊ９号住居址
図版５　１．　Ｊ10号住居址　　２．　Ｊ11号住居址
図版６　１．　Ｄ１号土坑　　２．　Ｄ２号、３号、４号土坑
３．　Ｄ５号土坑
図版７　１．　Ｊ８号住居址堅穴炉　　２．　Ｄ６号土坑
３．　Ｄ７号土坑
図版８　１．　第１掘立建物址　　２．　第２掘立建物址
図版９　１．　Ｙ１号住居址出土土器　　２．　Ｙ３号住居址出土土器
３．　Ｙ７号住居址出土土器　　４．　Ｈ４号住居址出土土器及び同時代のグリッド、概出土器
５．　グリッド出土土器
図版10　１．　Ｊ２号住居址出土土器　　２．　Ｊ８号住居址出土土器
図版11　１．　Ｊ８号住居址出土土器
図版12　１．　Ｊ８号住居址埋甕出土状態
図版13　１．　Ｊ９号住居址出土土器
図版14　１．　Ｊ９号住居址石蓋付埋甕出土状態
図版15　１．　Ｊ10号住居址出土土器　　２．　Ｊ11号住居址出土土器
図版16　１．　Ｊ10号住居址埋甕出土状態　　２．　Ｊ11号住居址埋甕炉
３．　同上出土状態
図版17　１．　Ｙ１号住居址出土土器片　　２．　Ｊ２号住居址出土土器片
３．　Ｙ３号住居址出土土器片
図版18　１．　Ｙ５号住居址出土土器片　　２．　Ｙ７号住居址出土土器片
３．　Ｊ８号住居址出土土器片
図版19　１．　Ｊ８号住居址出土土器片
図版20　１．　Ｊ９号住居址出土土器片　　２．　Ｊ10号住居址出土土器片
図版21　１．　Ｊ11号住居址出土土器片
図版22　１．　表採、グリッド出土土器片　　２．　表採、グリッド出土土器片
図版23　１．　剝片石器、石鏃、磨石斧、手斧、石剣、石棒
図版24　１．　石皿、銅鏃、土錘　　２．　出土土製品
図版25　１．　遺物出土状態
図版26　１．　石器出土状態
図版27　１．　発掘調査スナップ
図版28　１．　Ｙ12号住居址　　２．　Ｊ13号住居址

図版29　1．Y12号住居址埋甕炉　2．Y14号住居址埋甕炉
3．Y14号住居址埋甕炉
図版30　1．Y14号住居址　2．J15号住居址
図版31　1．J16号住居址埋甕　2．J15号住居址埋甕・石器出土状態
3．J15号住居址伏甕
図版32　1．J16号住居址　2．J17号住居址、J18号住居址
図版33　1．J15号住居址竪穴炉　2．J17号住居址炉
3．J18号住居址炉
図版34　1．D6号土坑　2．D7号・9号土坑
3．D8号土坑、小竪穴1号
図版35　1．D10号土坑　2．D11号・12号土坑
3．D13号土坑
図版36　1．D15号土坑　2．D16号土坑
3．D17号土坑
図版37　1．D18号土坑　2．H4号住居址
図版38　1．Y12号住居址出土土器　2．Y14号住居址出土土器
3．グリッド出土土器　4．上の林遺跡出土概出遺物
図版39　1．J15号住居址出土土器
図版40　1．J13号住居址出土土器　2．J16号住居址出土土器
3．J18号住居址出土土器　4．D18号土坑出土土器
図版41　1．Y12号住居址出土土器片　2．J13号住居址出土土器片
図版42　1．Y14号住居址出土土器片　2．J15号住居址出土土器片
図版43　1．J15号住居址出土土器片
図版44　1．J15号住居址出土土器片　2．J16号住居址出土土器片
図版45　1．J17号住居址出土土器片　2．D6号土坑出土土器片
3．D7号土坑出土土器片　4．グリッド出土土器片
図版46　1．剥片石器、石鏃、打石斧、磨石斧
図版47　1．凹石、磨石、砥石
図版48　1．J13号住居址出土石器　2．J15号住居址出土石器
3．J17号住居址出土及び概出石器
図版49　1．土坑内出土石器　2．出土土製品
3．織布圧痕底部
図版50　1．発掘調査スナップ

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の概要

第２次の調査は、昨年度に引続いた敷地で、南北に20ｍ、東西16ｍの範囲を７月１日～21にわたって調査した。

グリッド設定は、昨年度区域外となったため完掘に至らなかった平安時代のＨ４号住居址を基点に、昨年度のグリッドに続行するように設定した。調査経過の詳細は日誌に明記してある。

●発掘期間　昭和56年７月１日～21日
●調査委託者　箕輪工業高等学校長　高橋　博彦
●調査受託者　箕輪町教育委員会
●調査会・調査団の構成は下記の通りである。

調査会

会　長	市川　脩三	町誌編纂専門委員
理　事	荻原　貞利	教育委員会社会教育指導員
〃	竹花　久木	〃
〃	大槻　　剛	町誌編纂専門委員
監　事	小林　重男	郷土博物館専門調査委員
〃	堀口　貞幸	〃

調査団

団　長	丸山　敞一郎	日本考古学協会会員（伊那弥生ケ丘高等学校教諭）
担当者	柴　　登巳夫	長野県考古学会会員（箕輪町郷土博物館学芸員）
主　任	島田　恵子	長野県考古学会会員
調査員	山崎　勝彦	

作業協力者

山内　志賀子　（辰野町）
清水　宗一　後藤　武雄　神子柴　喜義　向山　千晴
中島　友衛　小林　三喜男　藤森　智博　大槻　豊　三沢　保
小林　豊男　清水　今朝雄　唐沢　清人　戸田　千百　（以上地元）
吉江　康輔（箕輪工業高校教諭）

古屋　公彦　　藤林　正則　　西沢　　聡　　小笠原　勝巳　（以上箕輪工業高等学校歴史研究部員）

参　与

馬場　昤一	教育委員会教育委員長	
原　　茂人	〃	〃　　職務代理
戸田　宗十	〃	教育委員
桑沢　良平	〃	〃
荻原　貞利	文化財保護審議会委員長	
藤田　寛人	〃	副委員長
市川　脩三	〃	委　員
矢沢　喬治	〃	〃
堀口　貞幸	〃	〃
小林　正之進	〃	〃
唐沢　忠孝	〃	〃
小林　健男	〃	〃
山崎　義芳	〃	〃
上田　晴生	〃	〃

●調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口　彦雄	教育委員会教育長
唐沢　行明	〃　教育課長
太田　文陳	〃　社会教育係長
柴　登巳夫	郷土博物館学芸員
竹入　洋子	〃　〃

第２節　発掘調査日誌

○６月30日（火）　はれ

グリッド設定に先立ち、調査区全域に重機を入れて50cm程、表土の削平を行なう。落込みとおもわれる黒色土が部分的に露顕する。

○７月１日（水）　はれ

本日より調査を開始する。

昨年の調査区からグリッドを続行させるために、前年調査を３分の２のみ行なったＨ４号住居址の残りの部分のプラン確認を行ないグリッドの延長基点を定める。東西にＡ～Ｉ、南北に１～10（２ｍ×２ｍ）の計90グリッドを設定する。

11時より、団長、調査会長、教育長をはじめ地元協力者の出席をもって、結団式および簡単な神事を行なう。

午後よりプラン確認作業に入る。Ｆ・Ｇ・Ｈ－１～３グリッドより弥生の住居址が検出される。昨年からの続き番号でＹ12号住居址と命名する。Ｂ～Ｄ－１～８グリッドまで全体的に落込みが見られるが切り合いが判明しない。Ｃ－１グリッドに伏甕とおもわれる大形甕の胴中央部の輪郭が姿を見せる。また、Ｇ・Ｈ－５～10にかけても落込みがみられるがここも切り合いが判然としない。

○７月２日（木）　雨

雨のため作業中止

○７月３日（金）　雨

雨のため作業中止

○７月４日（土）　雨のちくもり

雨のため作業中止。午後連日の雨でグリッド設定した調査区全面が池のような状態となったので水ぬきを行なう。

○７月５日（日）　くもり後はれ

水びたしでドロドロになった調査区全面のプラン確認を続行。Ｅ・Ｆ－１～６グリッドより土坑５基検出される。それぞれ昨年からの通し番号で５号～10号と命名する。縄文時代の住居址のプラン確認は、褐色土のロームを掘り込んで構築しているため、堆積土層との区別がつきにくく、もう一歩のところである。Ｃ～Ｅ－５・６グリッドより１軒検出されたが、真中に基礎工事による攪乱が入り住居址が半分壊されている。

○７月６日（月）　くもり後はれ

昨日に引続きプラン確認を行なう。Ｇ～Ｉ－５～９グリッドの落込みの精査を行なう。縄文中期１軒と弥生の住居址を確認。この重複は土層の色ではっきりと判別できたが、弥生の住居址は２軒の複合ともなりそうである。取り合えずＪ13号住居址、Ｙ14号住居址と命名。さらにＢ～Ｉ－５～９グリッドにかけて土坑７基を確認する。各々Ｄ11号土坑～Ｄ17号土坑と命名。

Ｊ13号住居址確認面直下より両耳壺と石匙が出土する。また、Ｂ～Ｄ－８・９グリッドからはプラン確認の際に縄文前期末葉の土器片出土が目立った。

○７月７日（火）　くもり後雨後はれ

本日で調査区全面のプラン確認を終了する。Ｂ～Ｄ－２～５グリッドの落込みは再度の精査の結果、１軒となりそうである。Ｊ15号住居址と命名。さらに調査区ぎりぎりの北側Ｂ・Ｃ－５・６グリッドより住居址の約４分の１が検出される。Ｊ16号住居址と命名。埋甕の口縁部が顔を出す。また、Ｃ～Ｅ－５～８グリッドよりＪ17号住居址、Ｊ18号住居址が

検出される。重複した両住居址のほぼ中央を校舎建設にともなう基礎工事の攪乱が入っていて住居址を破壊している。H・I－4グリッドより土坑1基を確認、D18号土坑と命名。

本調査区の遺構は、昨年の続きであるH4号住居址1軒、弥生時代後期の住居址2軒、縄文中期の住居址5軒、土坑13基が確認された。午後よりD10号～D13号土坑の掘り下げに入り、写真撮影まで終了。さらにD6号～D14号土坑の掘り下げに入る。

○7月8日（水）　はれ

昨日に引続き土坑の掘り下げおよび昨日完掘したD10号～D13号土坑の実測を行なう。D6号～8号、14号～17号土坑の掘り下げ完了。さらにY12号住居址、H4号住居址の掘り下げを開始する。

○7月9日（木）　はれ

昨日に引続きY12号、H4号住居址の掘り下げを行なう。

D6号～8号、15号～17号土坑の写真撮影、実測をする。

○7月10日（金）　はれ

重複していたD9号土坑、小竪穴1号の掘り下げに入り、写真撮影、実測を終了。

H4号、Y12号住居址の掘り下げ続行。さらにJ17号住居址の掘り下げに入る。H4号住居址のカマド切開、J17号住居址の断面実測を行なう。床面直上より磨石斧出土。Y12号住居址より小形の壺形土器および土製小玉が出土する。

○7月11日（土）　はれ後雨

引続きH4号、Y12号、J17号住居址の掘り下げを行なう。H4号住居址は、J15号住居址と重複しているため住居内の土坑が重なっていたり、重複部分の貼り床がどうしたことかプッツリ切れているため、複雑で掘り下げに困難をきたしたが本日で終了する。またJ13号、Y14号住居址の南側のG列グリッドの拡張を開始する。廃土の始末が大変である。

ひどい夕立のため4時20分で作業を中止。

○7月12日（日）　はれ後雨

Y12号、J17号住居址の掘り下げ続行。本日よりJ18号住居址の掘り下げを開始。J17号住居址の炉実測、J18号住居址の覆土断面実測を行なう。なお、炉の切開、床面精査を残しながらY12号住居址の実測に入る。本日も夕立のため4時に作業中止。

○7月13日（月）　はれ

休　日

○7月14日（火）　はれ

本日よりJ13号、Y14号住居址、D18号土坑の掘り下げに入る。H4号住居址の実測に入り全て終了。

一昨日に引続いてY12号住居址の実測を行なう。また、J17号住居址の掘り下げを終了し、H4号住居址と共に写真撮影を行なう。

○7月15日（水）　はれ

J15号住居址の掘り下げを開始するにあたり、再々度輪郭不明な部分の精査を行ないながら、トレンチ状に掘り下げに入る。

本日でJ18号住居址の掘り下げが終了する。J17号の実測に入り終了。本日もY12号住居址の実測及び炉の切開を行なう。D18号土坑はほぼ掘り下げを終了する。

本日よりY14号住居址の掘り下げに入る。

○7月16日（木）　はれ

J13号、Y14号、J15号住居址の掘り下げ続行。J18号住居址の炉の掘り下げ、実測に入り終了。

J16号住居址の掘り下げに入る。

Y12号住居址の実測本日で終了する。

○ 7月17日（金）　はれ

J 13号、Y 14号、J 15号住居址の掘り下げ続行。J 18号土坑の実測に入る。

J 17号、J 18号のエレベーション・レベリング、J 17号住居址の炉の実測を行ない両住居址の実測を全て終了。

また、J 16号住居址の埋甕の断面図を実測する。

○ 7月18日（土）　はれ

J 13号、Y 14号、J 15号住居址の掘り下げを続行。J 13号住居址はほぼ終了する。

D 18号土坑、J 16号住居址の実測に入り終了する。

○ 7月19日（日）　はれ後夕立

J 13号住居址の実測に入る。また、Y 14号住居址も炉の切開を終り実測に入る。

J 15号住居址の掘り下げがほぼ終了となり、全体写真と共に撮影の準備をするべく、全員で調査区全体の清掃にかかったが、もう少しというところで雲ゆきがあやしくなり、3時半よりはげしい夕立となる。清掃も一瞬の間に泥まみれとなり無惨な状態を呈したため止むなく作業を終了とする。

○ 7月20日（月）　はれ後夕立

休　み

○ 7月21日（火）　はれ

一昨日に引続いて清掃を再び行ない、全体写真およびD 18号土坑、J 13号、Y 14号、J 15号住居址の写真撮影をおこなう。

J 15号住居址の遺物の取り上げ、細部の精査を行ないながら実測に入る。

Y 14号住居址の実測を午前中で終了し、手の空いた人達で器材、テントの撤去を行なう。最後にJ 15号住居址の埋甕の取り上げを行ない、現場作業は本日ですべて終了となる。

○ 7月10日～8月25日　遺物洗い及註記作業
○ 8月26日～8月30日　遺物の整理
○ 9月1日～9月25日　遺物複原及び拓本の土器えらび。
○ 9月26日～10月30日　遺物実測、拓本
○ 11月1日～12月20日　拓本測面実測、トレース
○ 11月17日～11月20日　図面整理
○ 11月21日～12月13日　遺物、遺構トレース
○ 12月14日～12月27日　挿図作成、活字指定
○ 1月6日～1月25日　原稿作成、編集

（尚、8月26日から12月27日までの整理作業は第1次と第2次の調査分を同時におこなった。）

（島田　恵子）

第2章　遺構と遺物

1　住　居　址

1）Y12号住居址

遺　構（第1図）

本住居址は、F・G・H・I－1・2・3グリッド内で検出された。表土削平時にすでに暗黒色が露顕しており、鮮明な黄色ローム層を掘り込んで構築しているためこれ程容易にプラン確認のできた住居址は本遺構のみである。

平面プランは、北壁410cm、南壁425cm、東壁、西壁とも510cmを測り、東西壁が長い方形を呈する。主軸方位はN－18°－Wを示す。壁高は確認面より19cm～27cmを計測し、ほぼ垂直の立上りである。床面は、ローム層を踏み固めた床で本遺跡の粘土質層の特質から日常の生活において踏み固められたものとおもわれる。さらに南側に厚さ1cm程のかなり堅い貼り床が存在しており、入口部と考えられる。また、この入口部にやや凹んだ小規模の出張りがあり入口におけるなんらかの施設が存在したものとおもわれる。覆土は黒色を基調とした3層で形成されている。

ピットは、大小合せて24個確認されており、主柱穴はP_1～P_4の4本で住居址プランに平衡した長方形の配列を示している。深さは、P_1が26×20－42cm、P_2が30×26－35cm、P_3が26×28－23cm、P_4が30×24－22cmを計測する。また、P_9は45×35－29cmで主柱穴とは一まわり規模が大きい。さらに南東コーナーに存在するP_{11}は、75×50－21cmで何等かの用途を果した施設であろうとおもわれる。その他のピットは5～10cmの深さで配列等不規則である。

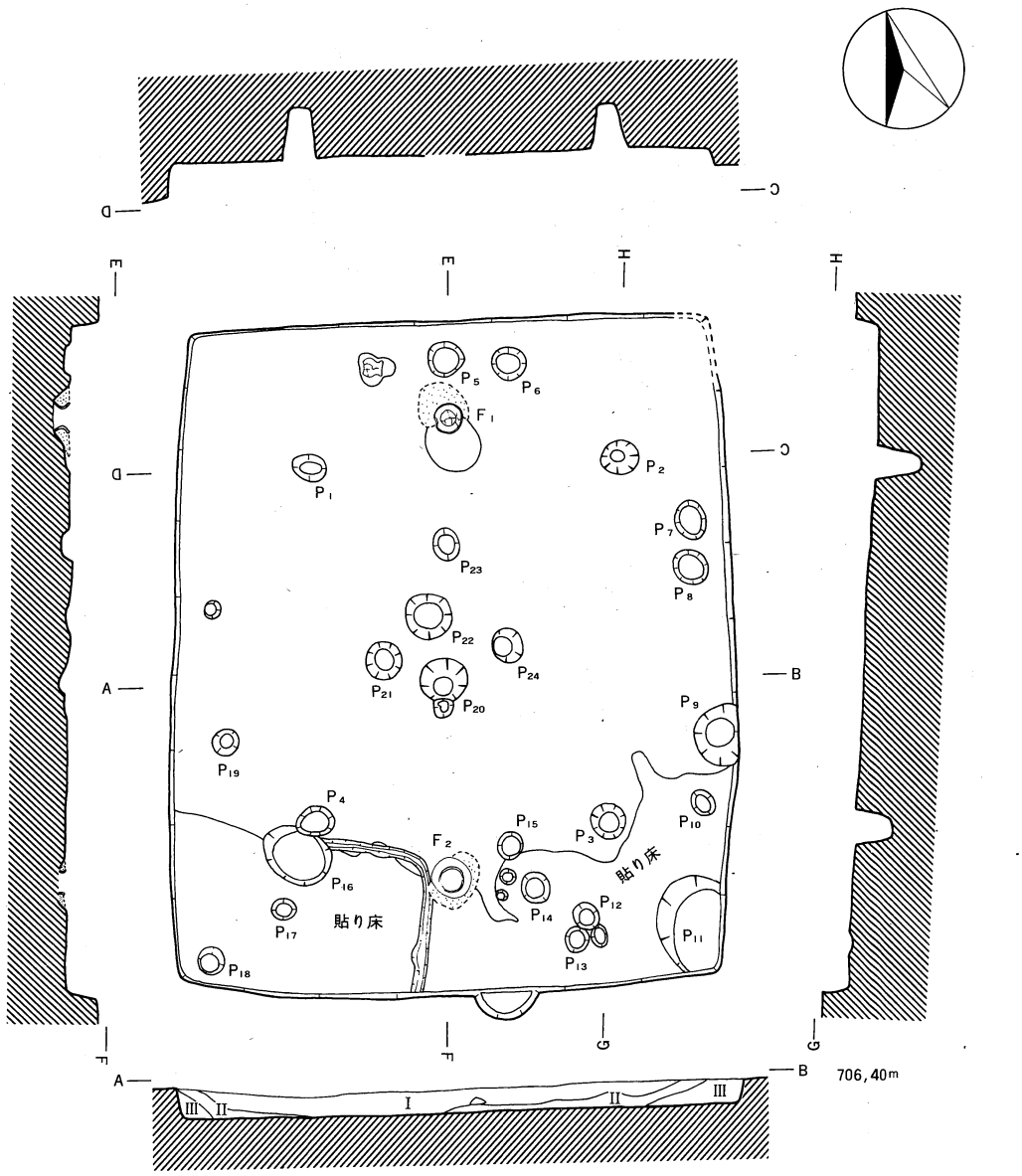
埋甕炉は、南・北の両端にあり、北側の炉は口縁部の約半分と胴部から底部を欠く壺を正位に埋設したもので、壺側面の北側に厚さ13cm、巾20cmの焼土が堆積していた。また、埋甕炉の底面に土器片3点が敷かれている。さらに南側の埋甕炉は波状文が全面に施されている口縁部片のみで一周し、他を欠損する。焼土は5cm程の堆積であり埋甕炉の南側上面は貼り床が存在する。

遺　物（第2図、3図）

本住居址から出土した遺物は、1、2の埋甕炉に使用されていた壺と甕口縁の2点と北側の炉周辺から出土した小形の壺形土器の3点である。その他第3図に示した拓影の土器片のみで少量であった。

1は、北側の埋甕炉に埋設されていたもので口縁部がラッパ状に開き、段を有す。最大径は胴部にある。文様帯は頸部から胴上部に施され、ややかすれぎみの簾状文と6条のU字状櫛描文で組み合されている。

2は、南側埋甕炉に使用されていたもので、口縁全面に櫛描波状文が施されている。



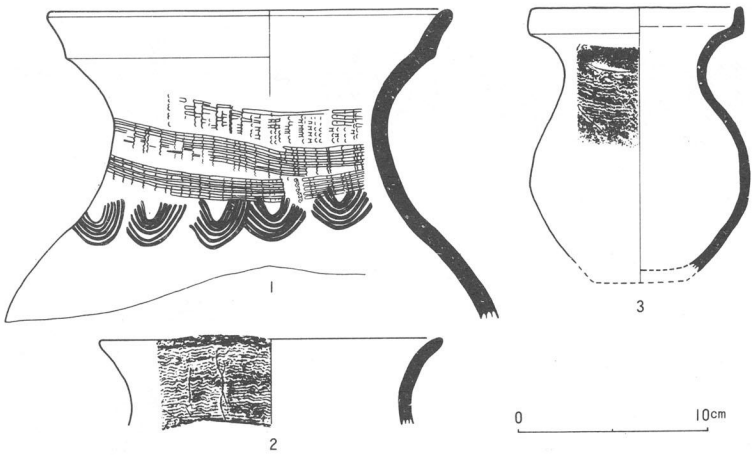
層 序 説 明
Ⅰ層(黒色土)粒子細く粘性あり、パミスを少量混入する。
Ⅱ層(暗黒色土) 〃 粘性強
Ⅲ層(褐色土) 〃 〃 ローム粒子を多量に混入。

第Ⅰ図 Y12号住居址実測図(1:60)

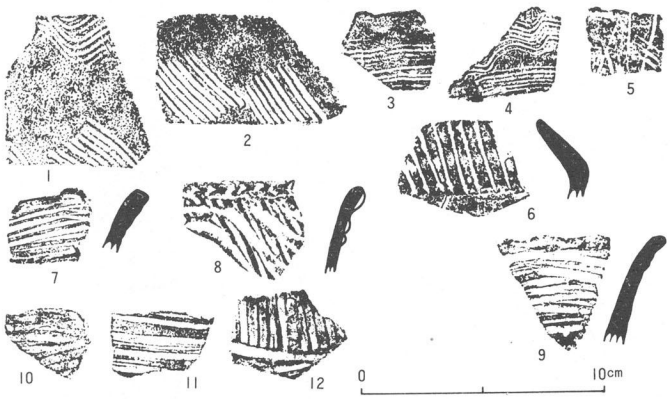
3は小形壺で、北壁寄りの炉付近から出土した。口縁はやや直立気味に内屈し段を有す。最大径は胴中央にある。頸部から胴上部にかけて振幅の小さい波状文が施されている。ところどころ摩滅している。

第3図の拓影1～6は、波状文、短線文、簾状文、口縁部段上の縦沈線等が描かれた口縁から胴上部の破片である。

8は、器肉の薄いおせんべい状の体部に粘土紐がはり付けられ、さらに斜めの貝殻条痕文が施



第２図　Ｙ12号住居址出土遺物実測図（１：４）



第３図　Ｙ12号住居址出土土器拓影（１：３）

されている。また口縁にも同様な隆帯が一条付けられ、口唇部には三角形の刺突が連続的に施されている。内側は指おさえ痕が目立つ。縄文前期初頭に位置付けられる土器で、伊那市の伊勢並遺跡から出土している。また、７・９～12は、貝殻条痕文系の土器群で、７は口唇部に貝殻で、９は指頭でおさえて波状をつけている。弥生中期初頭の水神平系に属する土器群であるが、いずれも覆土上部の出土であり混入であろう。他に床面直上から土製の小玉が出土したが整理作業中に不注意のためつぶしてしまって図示できなかった。直径５㎜で孔は１㎜であった。

石器は砥石が２点出土している。南壁から30cmの場所より粉々にくだけた鉄器が出土しており、鉄製品を使用していたことがうかがえる。

本住居址の遺物出土は少数であったが、日常生活に使用していた土器により、弥生時代後期後半の中島式に比定されよう。

（山崎　勝彦・島田　恵子）

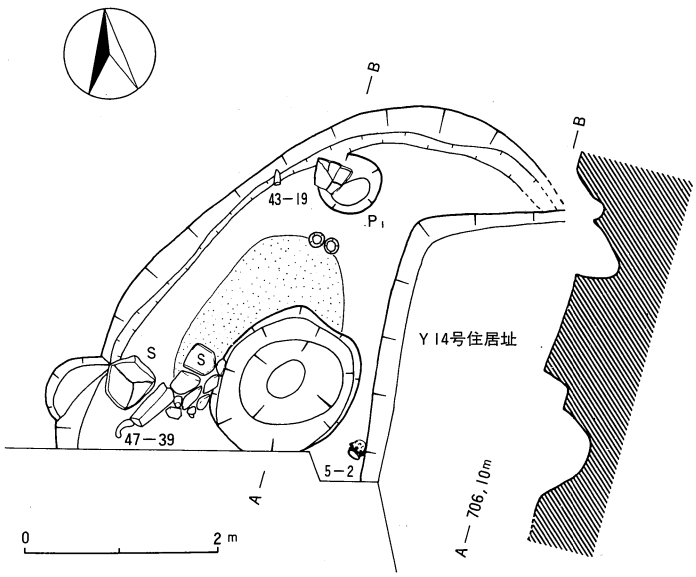
２）Ｊ13号住居址

遺　構（第４図）

Ｊ13号住居址は、Ｇ・Ｈ・Ｉ－５～７グリッド内で検出された。西壁コーナー上面にＤ15号土坑が、北東コーナー上面にＤ17号土坑が、さらに住居址の南西東面をＹ14号住居址に切られている。また、調査区の境界線上にぶつかり住居址の３分の１の検出にとどまってしまった。プラン確認の際、本住居址の覆土は黒褐色を呈し、Ｙ14号住居址は暗黒色土であったため切り合い関係は判然としていた。覆土上部より第５図２の両耳壺と第48図40の石匙が20cmの間隔をおき並んで出土した。

遺構プランは、640×550cmの規模で楕円形を呈し、主軸方位はN－40°－Eを示すものと推測される。弥生のY14号住居址が本住居址を切って構築してあり床面の差は、Y14号住居址が37cm程低く完全に本住居址の床面を破壊している。壁高は26～36cmを測りなだらかに立上っている。床面は炉際の配石付近に焼土が薄く堆積していてその部分のみ敲きしめたように堅い状態であり、他の床面はこれに比して軟弱であった。また、床はわずかに北東へ傾斜している。炉際の配石は13個で組み合されており、大きいもので50×50cm、50×20cm、30×28cm、26×22cm、小さいもので10×８cm、12×８cm等があり、平に並べて敷きつめた感を与える。石質は付近で採集できる砂岩、チャート等である。第47図38の立石や39の石皿であったもの等が再利用されていることもおもしろい現象である。屋内祭祀に関連する祭壇的様相を呈している。この配石が顕現した瞬間、チャートの青さと焼土の赤がコントラストになって、なんともいえない神秘的な雰囲気をかもしだしていた。

炉は、住居址の西側寄りほぼ中央に位置する。150×150cm、深さ70cmの大形堅穴炉で、30cm掘り込んだ所で段があり、巾15～35cmで炉内を一周する。床面に腰を下し、この段に足を置くといったいわゆる掘りごたつ式ともいえる形態の炉である。また、柱穴をはさみながら壁溝が巡っている。柱穴の規模は60×65－45cmを測る。



第４図　Ｊ13号住居址実測図（１：80）

遺　物（第５・６図）

本住居址出土の遺物は、柱穴上面より出土した第５図１の唐草文様の大形甕破片、２の覆土上部出土の両耳壺、底部にヘラ痕の顕著な小形深鉢の底部と微少である。１の唐草文土器は、無頸で最大径を頸部に有し、口縁、胴～底部へとゆるやかに内湾する。この器形は樽に似た様相を呈するが、口縁や底部を欠いた出土が多く、完形での出土は稀であり、本住居址では４分の１の破片である。文様構成は、口縁部が巾狭の無文帯でその直下に区画帯がありその間と間に粘土紐を貼り付けた組紐文がある。区画帯内の文様は、中心に小渦巻を配し、両側に交互刺突文が施されている。胴部は渦巻隆線文と斜線文とで飾られている。白味を帯

びた褐色を呈す。部分的に煤の付着がある。2は、渦巻沈線文で文様が構成される両耳壺である。有孔鍔付土器から転化した器形で肩部に鍔があり、鍔より口縁にかけては無文帯である。本遺跡の土器は付近から産出する粘土が良質であるため、焼成も良好で金雲母が器面全体をおおってキラキラ光っているが、この土器は器膚が粗く、石英、長石が目立ち雲母が見受られない。胎土が粗く搬入品とも考えられる。赤褐色を呈し、煤の付着がある。

第6図の拓影土器片は、1～6の口縁部片、8・9・12～19、21～26の胴部片で唐草文系の土器群である。渦巻隆線、斜線文、綾杉文、交互刺突文、ハケ目状の条線文等で構成されている。7、20、29は篭畑Ⅱ式に属する土器群で、7は鋸歯状三角列点文が粗悪に器面全体に施されている。表面は黒色を呈し、裏側は黄褐色土である。胎土、焼成が悪く搬入品であろう。20は三角形の浅い掘り込みと29と同様の格子状のヘラ切り刻目文が施されている。27はソウメン状貼り付けが施される同式の土器である。10は、表裏に小円形の列点がなされ、この部分は山形状の突起にあたり直径5cmの正円形の窓が突起の下に設けられているキャリパー形の深鉢である。

以上の土器群の他に石器は、打石斧、磨石斧、凹み石、磨石、石皿、立石、剝片石器が各1点と石鏃2点が出土している。

第5図　J13号住居址出土土器実測図（1：4）

第６図　Ｊ13号住居址出土土器拓影（１：３）

本住居址は以上の出土土器から唐草文系Ⅱ（曽利Ⅱ式併行）の時期に比定されよう。

（島田　恵子）

3）Y14号住居址

遺　構（第7図）

本住居址は、H・I・J－6～10グリッド内より検出された。J13号住居址を切って構築されている。また、調査区の東南端に位置したため、廃土を除いて拡張をおこなったが再度の拡張に廃土の置き場がなくなり止むなく全容の把握をあきらめた。

平面プランは、北壁が7mを測るのみで不明であるが、炉および主柱穴の位置等から推測すると、東西が5mを測り南北に長い隅丸長方形を呈する住居址であるとおもわれる。主軸方位はほぼWを示す。検出した部分の壁高は18cm～37cmを測りなだらかな立ち上りを見せている。床面は、踏み固められた堅い床で、東側の炉近辺には160～250cmの巾にわたって、炭化粒子および焼土が薄く散在していた。また、西側角にはプラン確認時から粘土の固りがブロック状に散布しており、貼り床のくずれかともおもわれ、セクション等で精査したが貼り床とはならなかった。しかし他の床面と比べて堅く重複したJ13号住居址の床面との関係もあろう。

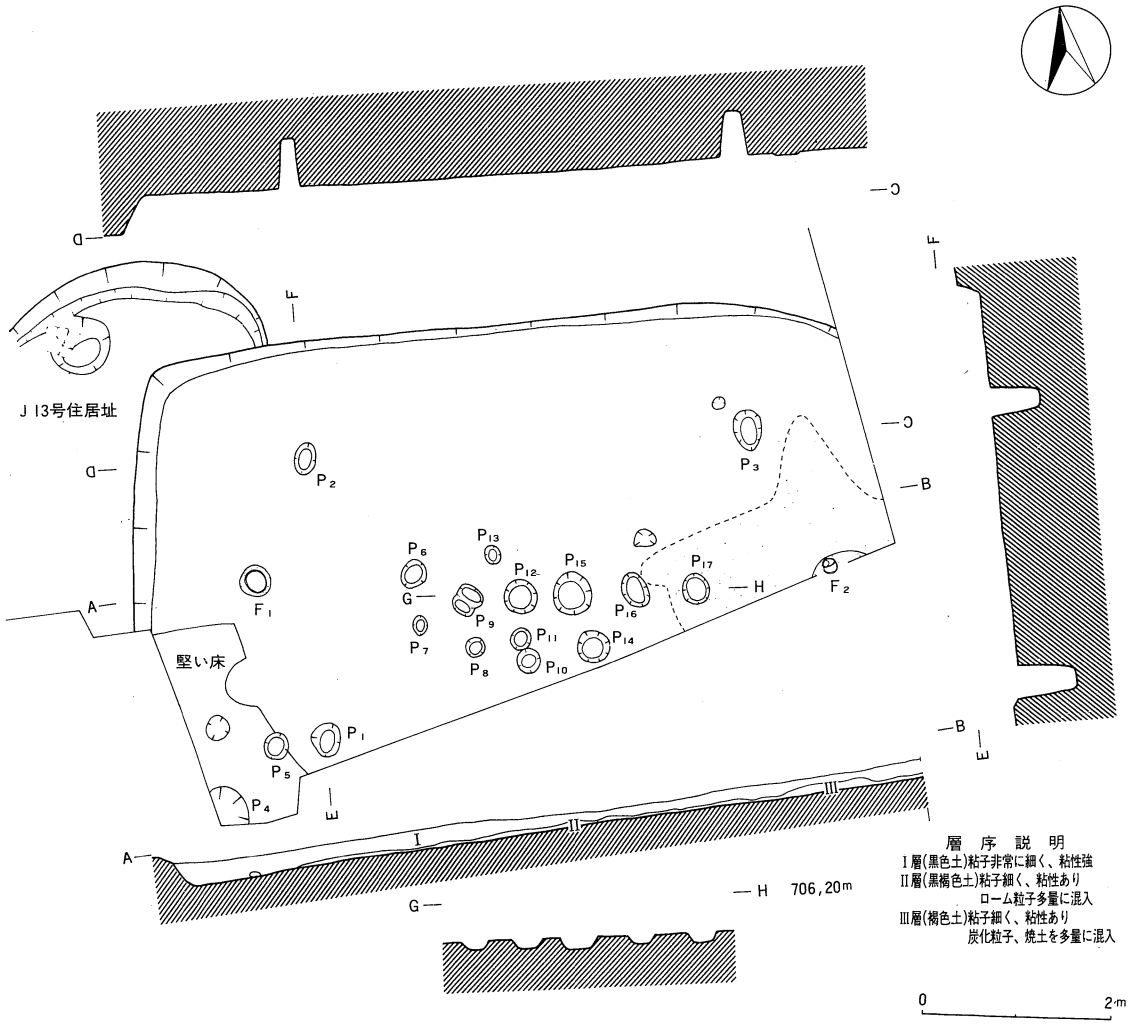
覆土は3層で形成されるが、プラン確認時にはほぼ住居址全面が暗黒色土で覆われており、J13号住居址との重複関係は明確につかむことができたが、Y14号住居址は北壁が7mにおよぶ大住居址であり北東コーナー付近の輪郭があいまいであったことと、西側角のブロック状の粘土の固まり等から2軒になるのではないかとの懸念から丹念に精査をおこなった。暗黒色土はこの精査時に大部分削り取ってしまうという結果となってしまった。

主柱穴は3個検出することができた。規模はP_1が35×30－60cm、P_2は35×22－52cm、P_3は43×30－48cmを計測し、掘り方はP_1、P_3は垂直であるが、P_2はやや内傾する。規則性のある配列から主柱穴は4本となろう。他に住居址中央にP_6～P_{17}まで11個のピットが存在するが、いずれも深さが10cm以内である。P_{12}～P_{17}は配列が認められ内部施設に関連することも想定されるが、残念ながら住居址の全容を把握できなかったためその性格は不明である。

炉は、埋甕炉が東西両端に2基存在する。両方とも甕が逆位に埋設されており、F_2は底に土器片が2点敷かれてあり、Y12号住居址と同類のケースを示す。F_1は埋甕胴部の周りに巾6cm程の焼土が巡っていて、床のない部分は狭い。F_2は調査区内ギリギリの線から検出され、一部線外にかかり、炉の部分のみ出っ張った形をとって掘り込んだ。焼土は広範囲に炉の囲りに散在し、特に埋設された逆位の甕周囲には固まった焼土が5cmの厚さで堆積していた。

遺　物（第8・9図）

Y14号住居址から出土した遺物は、第8図に示した7点と第9図の拓影の土器片と少数である。埋甕炉に埋設されていた1の壺は、頸部に波状文、その下は4分の1円弧文が描かれ、球形状に胴部中央が張り出しているが器形が左にわずかに傾いている。2は、F_1に埋設されていたもので振幅のあらい波状文が頸部に施されているのみである。わずかに胴部にヘラ状工具による調整が



第7図　Y14号住居址実測図（1：80）

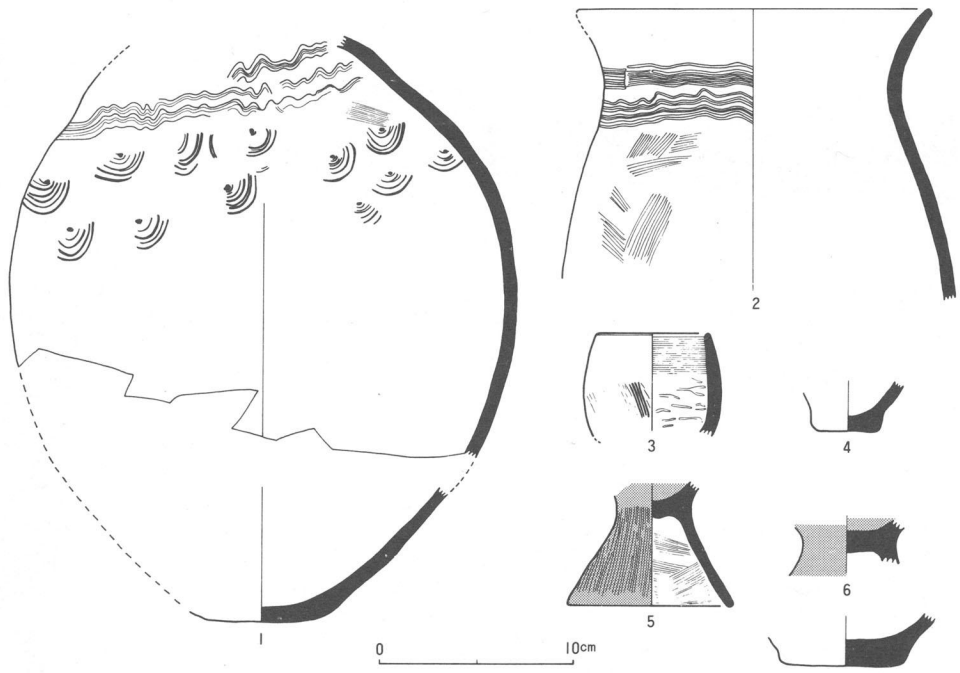
見受られる。器形は、口縁部が短く外反し頸部の張りは弱い。

3は、底部を欠失するミニチュア土器である。湯呑みのような器形で焼成が良好である。胴中央よりヘラ状工具による調整がなされ、内面は口縁から胴上部にかけて丁寧なヨコナデが施され、下部はヘラミガキとなる。4も同じくミニチュア的な小形壺の底部であろう。5、6は赤色塗彩された高坏の脚部である。裾部がラッパ状に広く開いている。

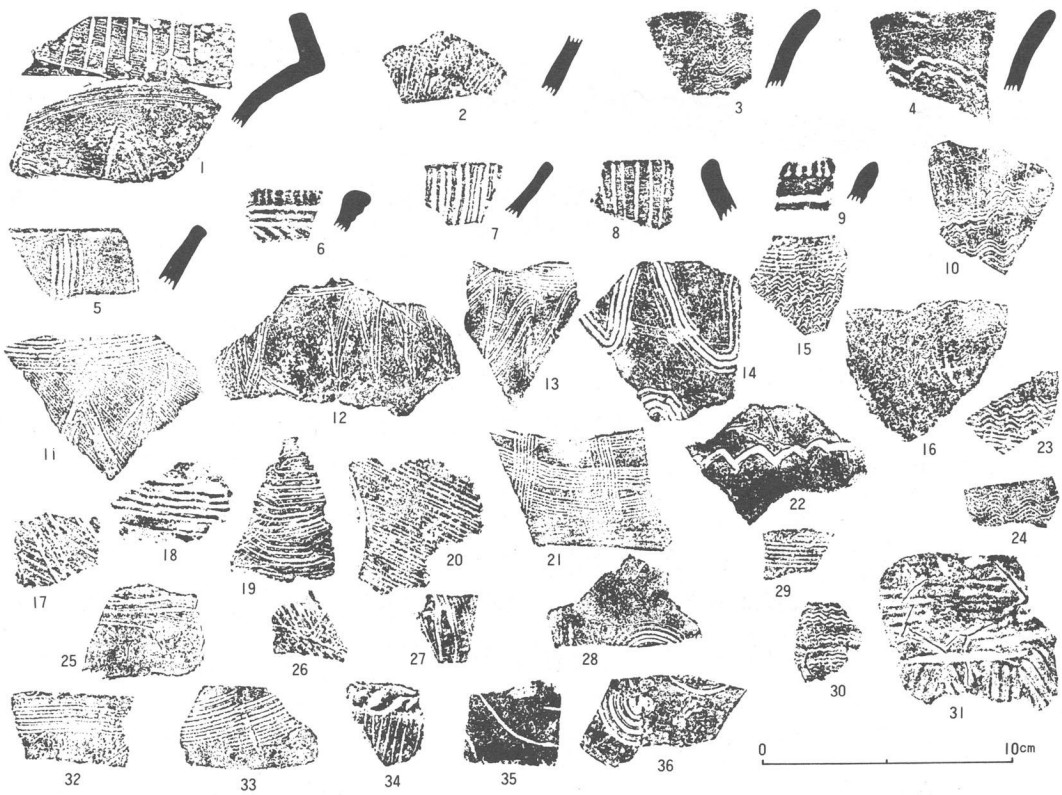
また、第9図の土器拓影は、波状文、簾条文、四分の一円弧文、口縁部段上の沈線文等の文様である。波状文は振幅の大形も目立つ。また22は、沈線文が一条波状に描かれている。18、19、20、34は沈線を主体とした縄文土器の混入である。

これらの出土土器から本住居址は、弥生後期後半の中島式に比定されよう。

（山崎　勝彦・島田　恵子）



第８図　Ｙ14号住居址出土遺物実測図（１：４）



第９図　Ｙ14号住居址出土土器拓影（１：３）

4）J15号住居址

遺　構（第10図）

本住居址は、A～D－1～4グリッドを中心に検出された。H4号住居址が本住居址の西側に重複し、また北側が調査区の境にかかり全容の把握に至らなかった。

プランは、一辺6mを測り楕円形を呈する。壁高は20cmを測りなだらかな立上りをみせている。主軸方位はほぼNを示す。覆土は2層によって形成され、I層は炭火粒子の混入がみられた。また、土器片もII層内に多量に包含されていた。

ピットは、P_1～P_4が楕円形を呈し、配列、規模からして主柱穴であろうとおもわれる。P_1は65×40－66cm、P_2は75×42－73cm、P_3は55×40－45cm、P_4は半分検出されただけであるが、東西に55cm、深さ47cmを測る。配列から北側にもう2個存在するとおもわれるが未調査区域にかかり未確認となった。住居中央の左右に柱穴はなく、南北に3本ずつの対になる計6個の主柱穴となろう。貯蔵穴は4個でP_5が75×57－43cm、P_7が100×83－76cm、P_9が58×50－26cm、P_{10}が85×82－64cmでP_9とP_{10}は連なる。P_6、P_8、P_{11}、P_{12}は深さ10～18cmを測り、規模や規則性のない配列等から内部施設にかかわるピットであろう。また、P_{14}、P_{15}は内面に配列した小穴があり、台の脚部等を想定させられる。

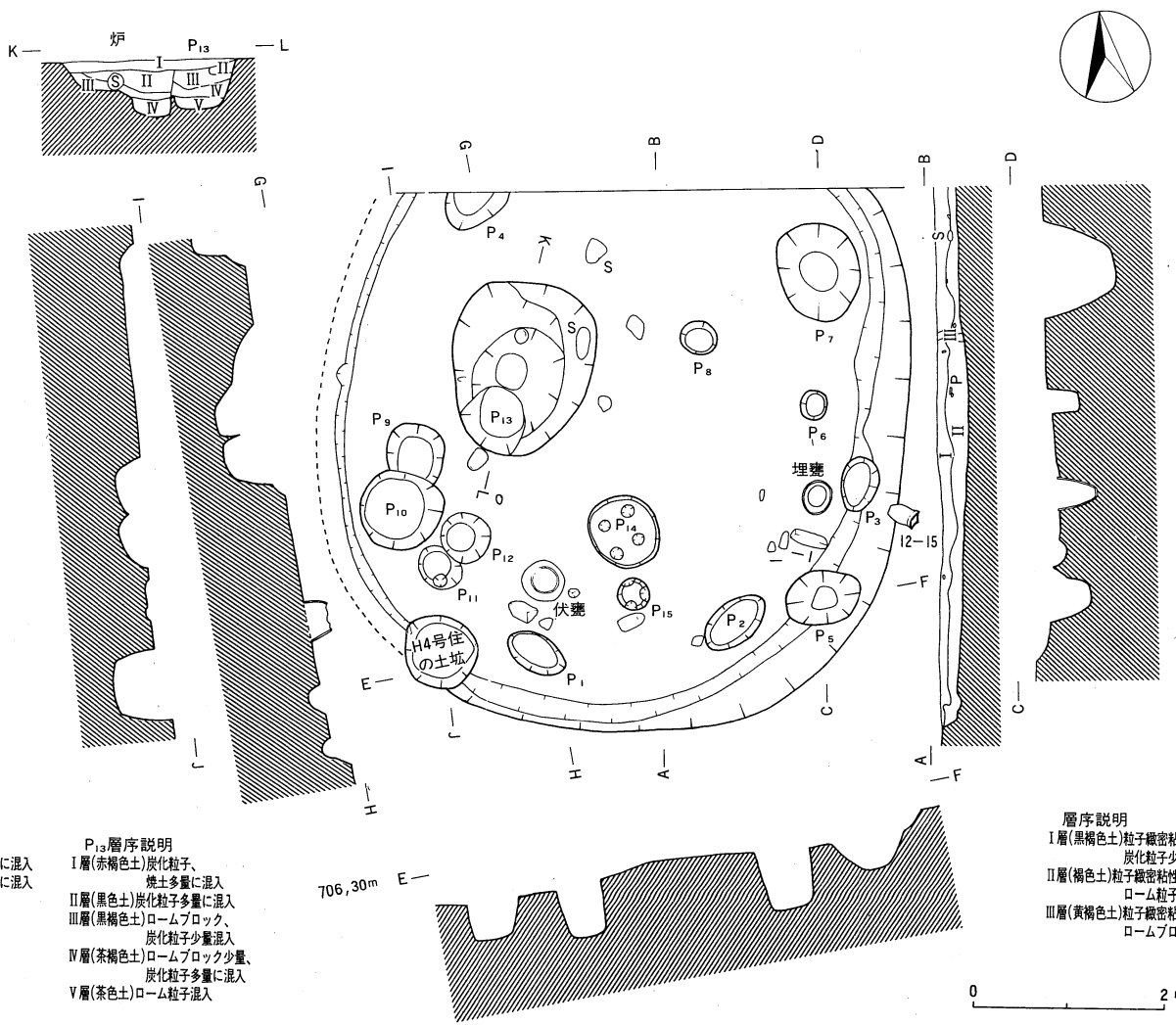
炉は、180×145－55cmを測る大形竪穴炉で、掘り込み際には33×13cmの立石と炉内の立上り壁面に20cmの丸石が存在した。また炉内からは第12図9の赤色塗彩された両耳把手付広口壺片が出土した。祭祀的なものを暗示している。炉を切ってP_{13}が存在するが後世のものであろう。

床面は全体に堅く締まって平坦な床であったが、埋甕が埋設されていた周囲の床面が一段低く段差があった。床の状態から住居址建設と同時に埋設されたものではなく後で埋められた様相が看取される。P_3から10cm内側に入った位置で、出入口がP_1とP_2の間と想定した場合、相当入口部からはずれる。また、該期における埋甕はその土器を唐草文に選定されているのが一般的であり、第1次調査のJ8号、J9号、J10号住居址の埋甕も唐草文であった。しかし、本住居址の埋甕は第11図1に図示したような、現存高48cm、内外面共に磨かれた器膚に磨消縄文が施された大甕であった。正位に埋設されていたが埋設状態は、甕周囲の土層は褐色土で床面のローム層に比べて黒味を帯びていた。だが埋甕の埋設はきっちりと甕と土が密着した状態で観察された。甕を埋設したあとの空間をきっちりと土を入れて埋め込んだのであろう。さらに、埋甕とは別にP_1の30cm内側床面直上に第12図7の大甕が伏せられていた。

また、周溝が柱穴および貯蔵穴をはさみながら住居内を巡っている。H4号住居址と重複していた部分の西壁は、H4号住居址に壁を壊されていたが周溝が残存していたので、本住居址のプランが判明したのであった。

遺　物（第11～16図）

本住居址から出土した遺物は、住居址の中央から直径3mの内側にかたまって出土した。周壁付近からの出土は極めて少量であった。拓影に示したものもII層下部～床面直上のNo.遺物がそのほとんどである。



炉層序説明
Ⅰ層(赤褐色土)炭化粒子、焼土多量に混入
Ⅱ層(褐色土)焼土、ローム粒子微量に混入
Ⅲ層(茶褐色土)焼土を多量に混入
Ⅳ層(黄褐色土)焼土少量混入

P13層序説明
Ⅰ層(赤褐色土)炭化粒子、焼土多量に混入
Ⅱ層(黒色土)炭化粒子多量に混入
Ⅲ層(黒褐色土)ロームブロック、炭化粒子少量混入
Ⅳ層(茶褐色土)ロームブロック少量、炭化粒子多量に混入
Ⅴ層(茶色土)ローム粒子混入

層序説明
Ⅰ層(黒褐色土)粒子緻密粘性あり、炭化粒子少量混入
Ⅱ層(褐色土)粒子緻密粘性あり、ローム粒子多量に混入
Ⅲ層(黄褐色土)粒子緻密粘性あり、ロームブロック多量に混入

第10図　J15号住居址実測図(1：80)

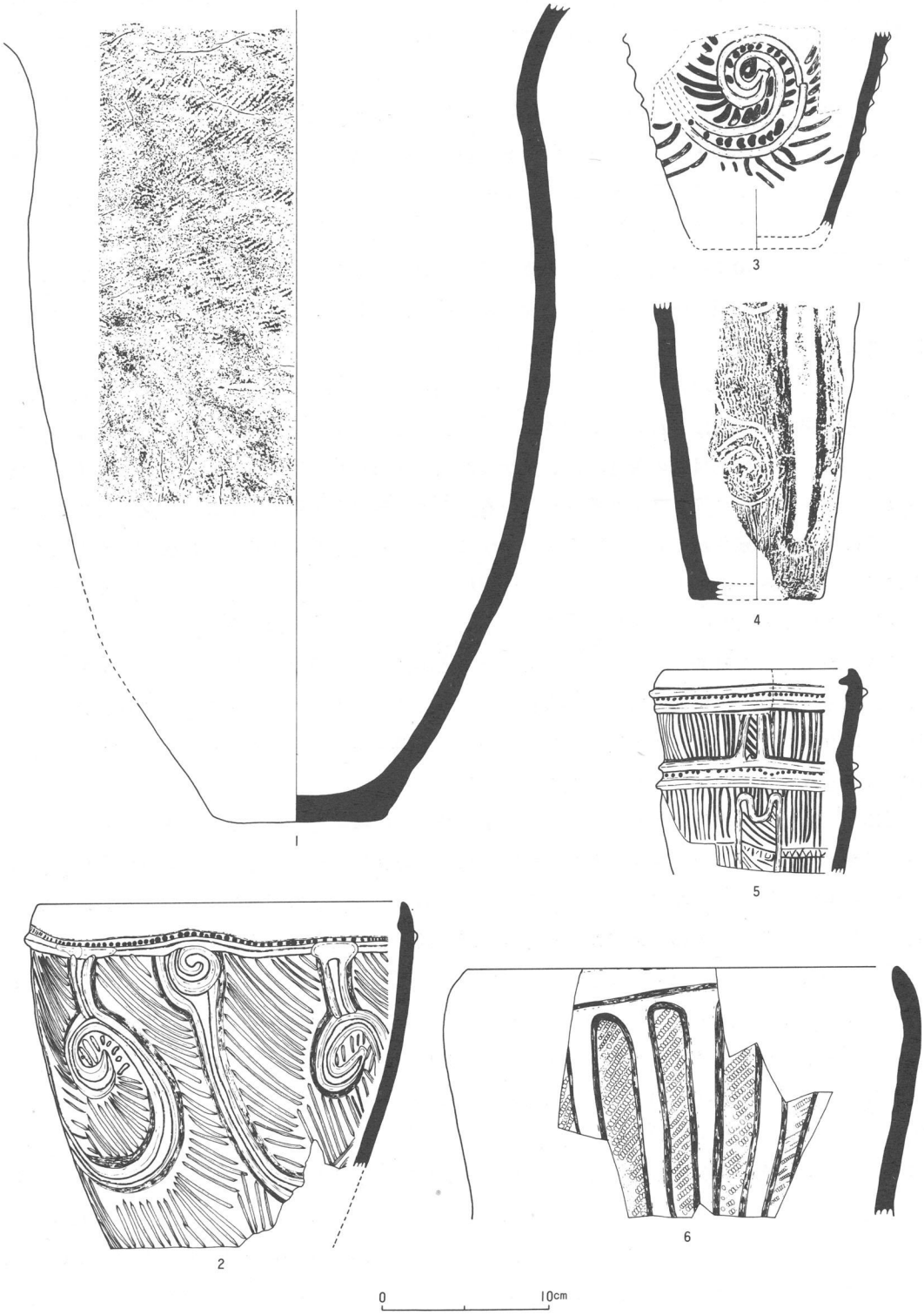
第11図１は埋甕として埋設されていた大形有頸甕である。頸部のくびれが弱く無文帯の口縁部が最大径となる。この時期より盛行する磨消縄文を胴下部まで用いており、内外面共に研磨されている。外面には煤の付着がみられる。口縁部を欠失する。６、８も縄文と沈線を地文としており、８は磨消及び渦巻沈線文が施されている。器形は口縁が内湾し、胴部がややくびれるキャリパー形深鉢の部類に属する。２～４、７、９、14は、唐草文系の土器で渦巻沈線文(4)、渦巻隆線文および斜線文（２、３、７、９、14）を主体とする。また、７は床面に伏甕として存在していたもので、少し丸味を帯びるが勾玉状刺突文、渦巻隆線文、綾杉文から変化した雨垂状沈線文で構成された、口径40.5cmを測る樽形の大甕である。唐草文系Ⅳ（曽利Ⅴ併行）の時期に位置付けられ、本住居址の時期（唐草文系Ⅱ）に伴なわない土器であり、伏甕として使用されていたことは埋葬に廃居となった本住居址が利用されたものと考えられる。

９は、堅穴炉出土の両耳把手付広口壺で、把手部分に朱漆が塗られている。外面は赤褐色で内面は黒褐色を呈す。器壁はきれいに研磨されているが長石、石英粒子が目立ち、炉の熱によって摩滅している。４は刷毛目状の条線文にわずかな波状のうねりをつけて施文し、その間に小さな列点文が付けられ、それ等に磨消が施されている。５は、横位の隆帯の中間に列点文が配され、その下部に条線文が施されている。頸部がわずかにくびれる筒形を呈する。３は製作技術の粗雑な土器で、渦巻隆線文の粘土紐の貼り付けが途切れたり、ゆがんだり、はげたりしている。その間を埋める綾杉変形文もゆがみがひどく幼稚な技術が感じられる。器肉が薄くおこげ痕が目立つ。

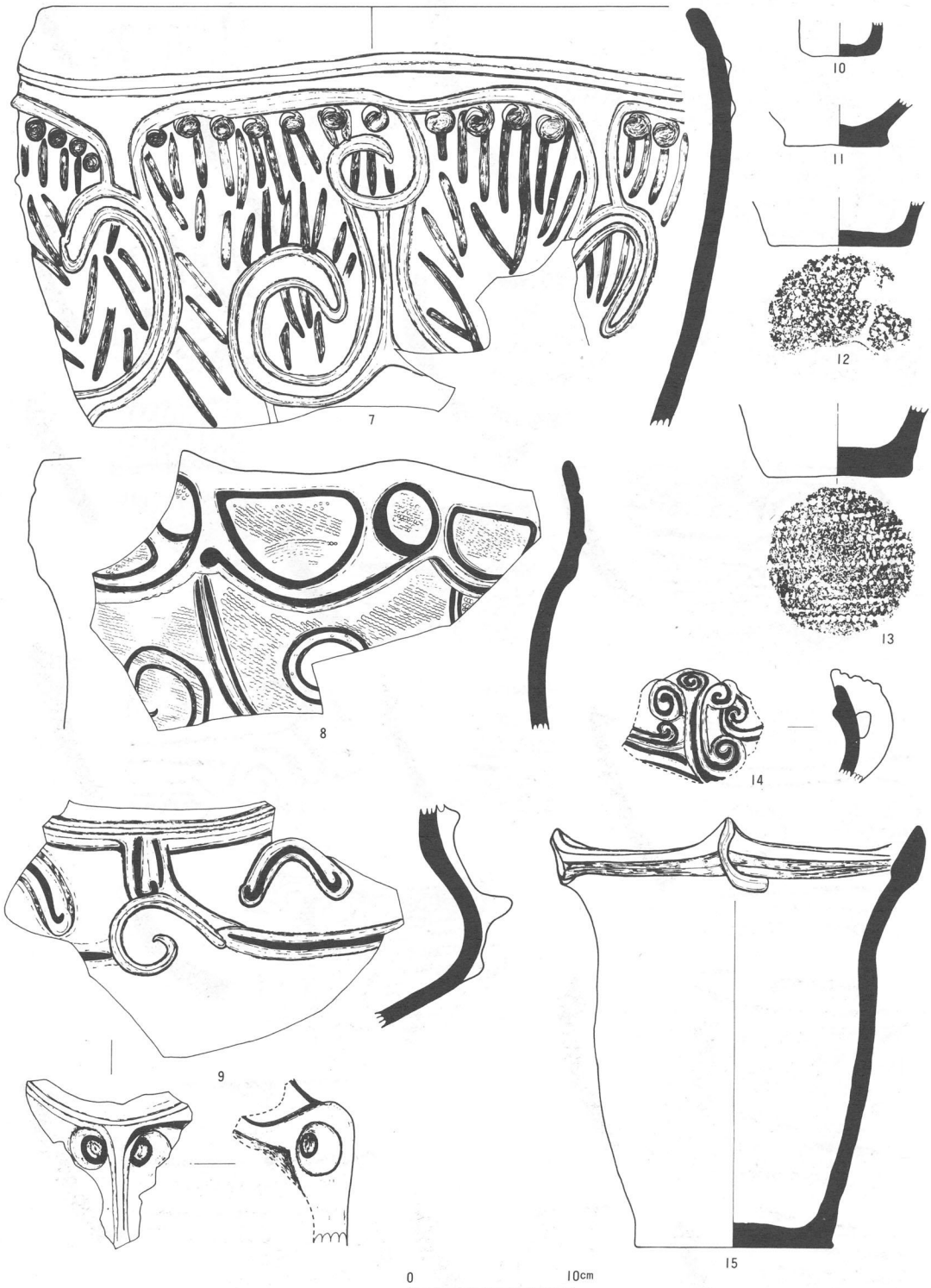
10は、器壁がよく研磨されたミニチュア土器の底部である。15は、東壁立上り際に横転していた九兵衛尾根Ⅱ式の深鉢形土器で、赤褐色を呈し器形共に阿玉台の影響が強い。Ｊ17、18号住居址の間に存在した九兵衛尾根式期の住居址中から、基礎工事の削平の際転がり出たのが幸いにも押しつぶされないで残存したものであろう。

第13図～16図までの拓影土器については、１～36まで口縁部をもつ土器片を主体とした。これ等の口縁の特徴は、内湾し無頸であり、狭い口縁部の無文帯、そして蓋受状の突起が内側の口唇部～口縁部にかけて貼付け調整されていること等である。器形は樽形状の大形甕とそれに相似する小形甕（２・３・４・13・19・20・22・24・27・32）とに大別できよう。文様構成は、狭い口縁部無文帯直下の渦巻沈線文、渦巻隆線文、頸部区画帯、その区画帯を飾る組紐文、交互刺突文等から成る。１は大渦巻隆線が口唇直下から描かれ、その周囲を弧をえがいてヘラ描沈線がめぐっている。以上の口縁部は唐草文系文化の全盛期のⅡ期（曽利Ⅱ式併行）に位置付けられる。

また、31、37～57、59・63は前述した唐草文系Ⅱ期の大形甕胴部片である。隆線と沈線の大柄渦巻文にヘラ描き綾杉文（39、41、53～55）、その変形文としての斜線文とによって構成される。44はヘラ描条線文に蛇行懸垂文が施され、55も蛇行懸垂文が認められる。58は、爪形連続の区画帯の破片で藤内式になろう。60、61は本住居址のプラン確認の時に出土した胴下部～底部へと続く破片である。ヘラ描沈線と細線文が交差している。64、65～67、69～71も共に篭畑式に比定される。特に64、65は五領ヶ台Ⅰ式の影響を強く受けている。また68は隆帯に細かい半割竹管文が三条刻まれている日向式の土器である。説明が前後してしまったが、第14図33は縄文が32、35、36はヘラ及び条痕文が施され、34は口縁突起部で、以上の土器群はどれも覆土上部からの出土で



第11図　J15号住居址出土遺物実測図No.1（1：4）



第12図　J15号住居址出土遺物実測図No.2（1：4）

第13図　J15号住居址出土土器拓影No.1（1：3）

第14図　J15号住居址出土土器拓影No.2（1：3）

第15図　J15号住居址出土土器拓影No.3（1：3）

第16図　J 15号住居址出土土器拓影No.4（1：3）

あって本住居址に伴なわない土器群である。30は曽利Ⅲ式の胴部にくびれをもつキャリパー形の深鉢に類似する。また、34、35はその焼成から九兵衛尾根式の部類に分類されよう。32はヘラ描沈線が、36は条痕文が施され折りかえし口縁をもつ。弥生時代中期初頭水神系の土器群とおもわれる。62は、唐草文系Ⅱの突起部でこの下部より把手がつくものとおもわれる。本住居址は前述したように唐草文系Ⅱ（曽利Ⅱ併行）期に比定される。

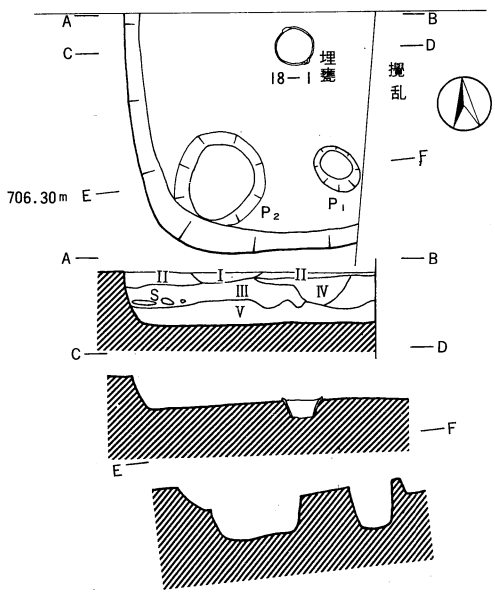
本住居址から出土した石器は、凹石1点、石鏃1点、磨石3点、立石1点、丸石1点、磨斧1点、石皿1点、チャート製剝片石器1点等であった。　　（島田　恵子）

5）J16号住居址

遺　構（第17図）

J16号住居址は調査区の北西端B・C－5・6グリッド内にて確認された。南壁際にD14号土坑が構築されていたが、新しい土坑で住居址の壁際で掘り込みが止まっており、本住居址への破壊は免れた。また、校舎建設の基礎工事により攪乱されていて、住居址の東南コーナーを中心に4分の1の検出となってしまった。プラン検出には重複と攪乱、さらに覆土と地山との色調が酷似していたため困難をきたした。層序は、調査区境界線をカットして断面としたためⅠ、Ⅱ層は攪乱層で実際の覆土はⅢ層からはじまる、3層によって形成される。

平面プランを推定複原すると、一辺340cmの隅丸方形になると思われる。壁高は、20～25cmを測りなだらかに立上る。床面は鮮やかな黄色ローム上に築かれ平担ではあったが軟弱気味であった。



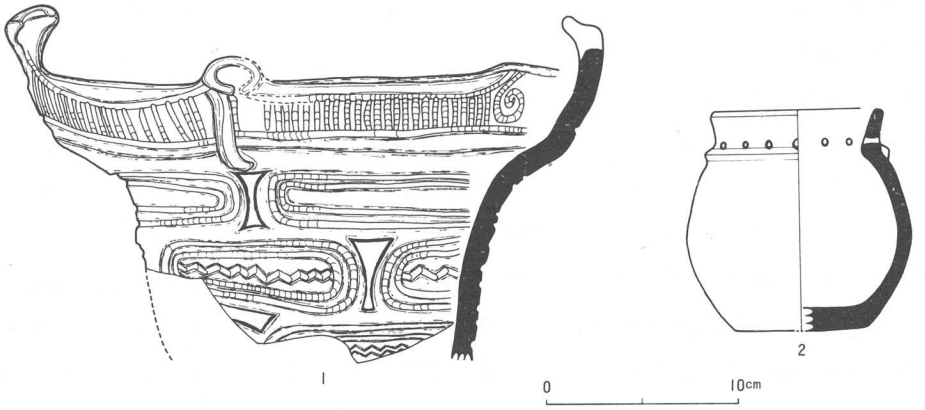
第17図　J16号住居址実測図（1：60）

ピットは、南東コーナーに存在する70×70－25cmと40×30－35cmの2個確認した。そのうちで主柱穴に属するものはP1であろう。また南東コーナーに存るP2は規模からして貯蔵穴であるとおもわれる。

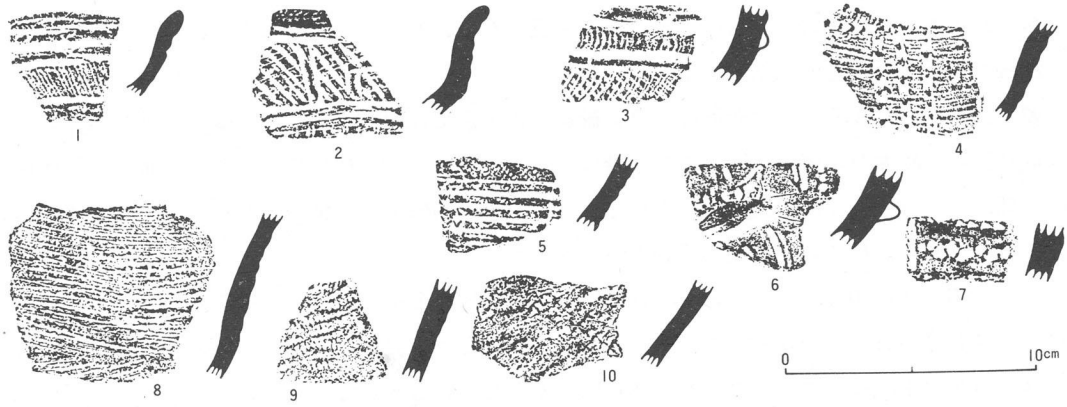
P1、P2の中央北寄りに底部の欠損した埋甕が埋設されていた。床面の平担さと埋設状態から観察すると住居址建設と共に当初から埋設されたものとおもわれる。出入口部を西壁の南西コーナー寄りと推定すると、埋甕は出入口部から1mほど離れた位置となる。周溝の施設は存在しなかった。

遺　物（第18・19図）

本住居址から出土した遺物は、埋甕として埋設されていた1とミニチュアの有孔鍔付土器の2点であった。1の埋甕は、口縁が内湾し、胴部は円筒形に近い器形となろう。赤褐色を呈し金雲母が多量に混入している。内面の器膚は粗く、長石、石英、金雲母が目立つ。また口縁の耳状突起とその間に配された口唇部の耳状小



第18図　J16号住居址出土遺物実測図（1：4）



第19図　J16号住居址出土土器拓影（1：3）

突起は左寄りに付されて、口縁突起部と間隔がずれる。頸部より下は楕円区画文を配し、区画帯には山形連続文に押引が施されている。口縁部の押引文と共に全体に押引が弱い。2のミニチュア有孔鍔付土器は器面の3分の2は黒色を呈し、3分の1は茶褐色を呈す。もともと普通に焼成を行なえば茶褐色の仕上りとなるが、焼成時に木の葉等にくるんで酸素の流入を防いだ焼成とみられる。器膚が荒く粗雑な調整である。また、第19図拓影の5、7、10も同様な焼成であるが器膚はなめらかで黒光りしている。7は山形連続文と押引が施されている。P_2貯蔵穴からの出土である。4は三角押引文が強く引かれ、8の横位のヘラ描細線文がその間を埋めている。2・3も連続爪形文およびヘラ切り格子目文が主体であり、篭畑式・九兵衛尾根式土器群との混入がみられる。石器の出土は皆無であった。土製品に毀たれた土偶の脚部が出土している。

本住居址の時期は、埋甕に代表される狢沢式期に比定できよう。

（山内　志賀子）

6）J17号住居址

遺　構（第20図）

本住居址は、D・E－5・6・7グリッド内にて検出された。J18号住居址と重複し、東側が校舎建設の基礎工事によるわたり廊下の170cmの巾が削り取られていた。しかし、わずかに南東コーナーが遺存していたことと、床面直下までの削り取りでおさまっていたので主柱穴は良好な状態で残存しており、本住居址のプランが把握できた。

平面プランは、350cmの円形を呈す。主柱穴は4個正方形に配列し、P_1は25×25－44cm、P_2は30×30－37cm、P_3は33×22－38cm、P_4は22×22－48cmを計測する。P_1とP_4の間にP_5が存在するが規模は30×20－15cmを測り、主柱穴4個と比較して深さからも支柱穴かあるいはJ18号住居址のピットと考えられる。P_6は85×77－10cmと浅く蓋のしてある貯蔵穴であるかも知れないとの懸念から丁寧に精査したが、その可能性はなかった。このピットの北側の立上り床面に25×14cmの礫が置かれてあり、工作用に木台のようなものを置いたとおもえるような凹みであった。壁高は20～26cmを測り垂直に近い状態で立上っている。

覆土は2層から成るが、北西面はプラン確認の折平面では判別しがたく、攪乱された部分の土を取り除いた断面から確認した。この一帯は、篭畑式・九兵衛尾根式の土器片が散布し、住居址の一部が（貯蔵穴）、J18号住居址と重複していたことに起因する。良好に残存していた床面はローム が踏み固められていて堅緻な状態をみせていた。

炉は、85×75－30cmの規模で10cm程掘り込んだ壁際に径8cm～15cm大の砂岩、ピカピカ光った絹雲母変岩等の石が7個存在した。その内の3片が接合し、径36×10cmの一つの石となった。これ等の石が炉中間に組まれた竪穴式石囲い炉であったとおもわれる。

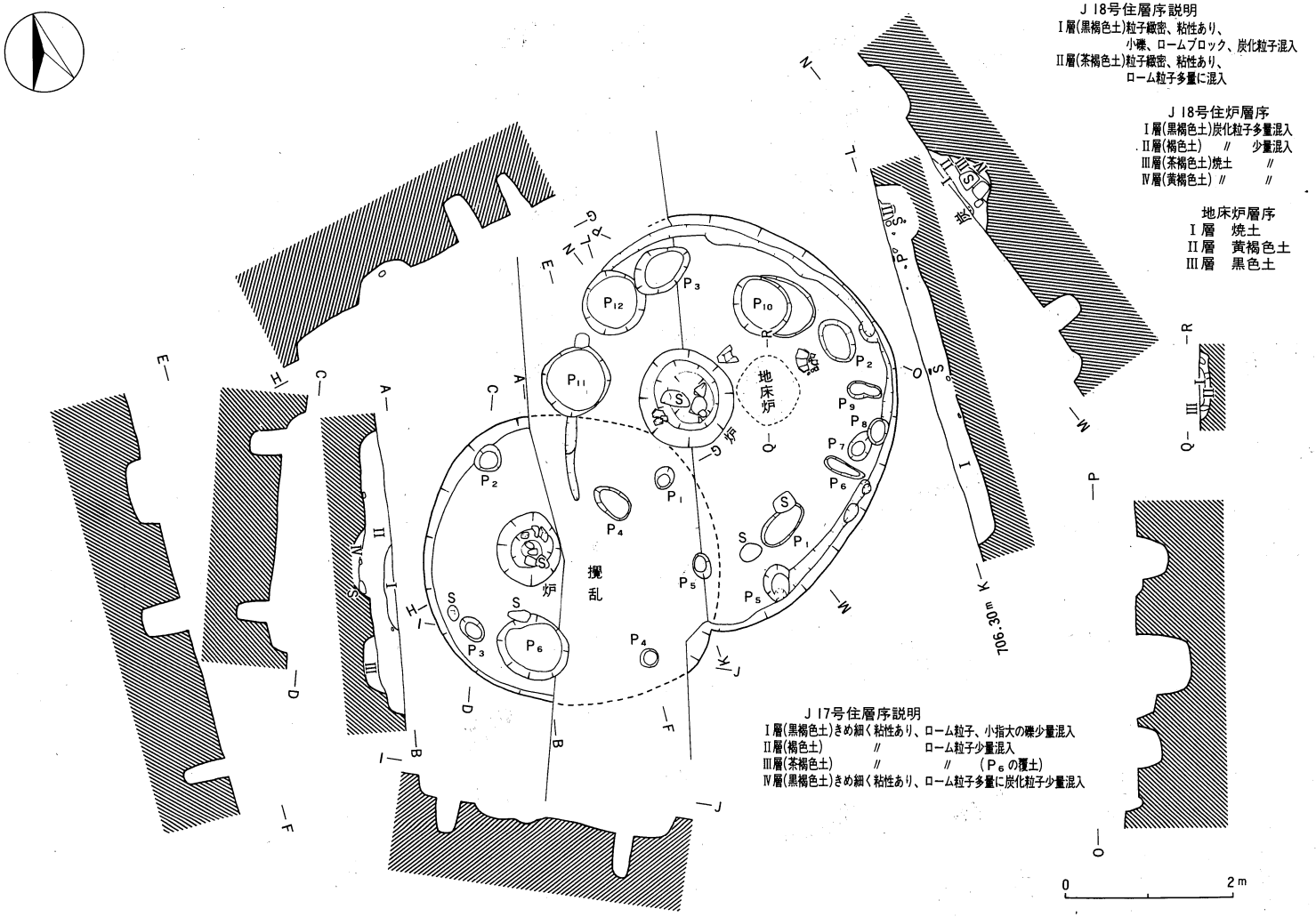
遺　物（第21図）

本住居址からの出土土器は、第21図拓影に示した小破片のみであった。また、この土器群はプラン確認時に覆土上部から出土したもの、攪乱グリッド内の本住居址内出土分も含めたが、やはり混入が多い。それは、本調査区の遺構確認時、または覆土上部から必ずという程出土する、縄文前期末～中期初頭の土器片がこの住居内においてもまた混入しているからである。1、12～21がその土器群で、19のボタン状貼り付けは日向式に、ソウメン状貼り付けの12、14は篭畑Ⅰ式に、4は藤内Ⅰ式に、その他はほとんど篭畑Ⅱ式・九兵衛尾根式期に比定される。

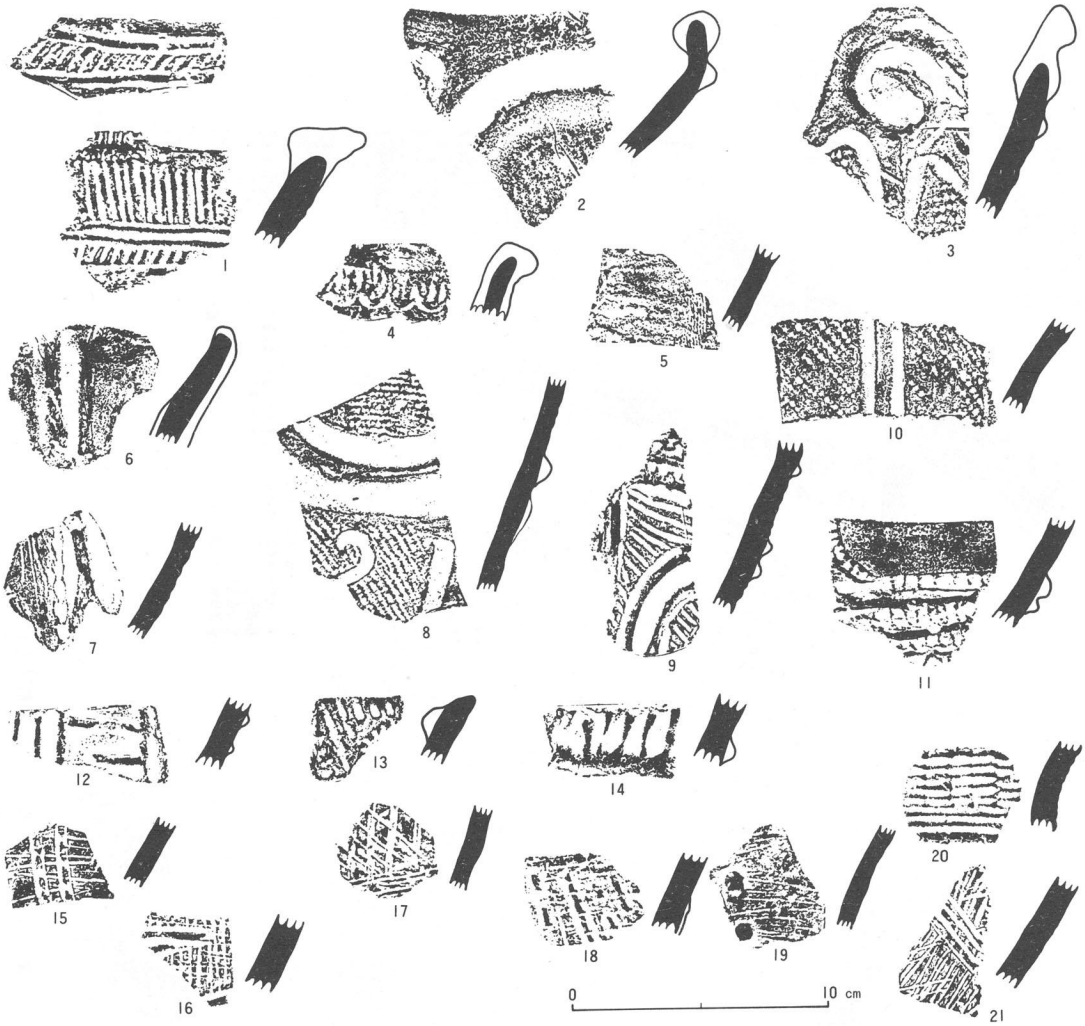
さて、本住居址に伴なう土器群は、覆土下部出土および床面直上の2、3、6～11があげられる。10は、拓影のものの他に2点がP_2から30cm西寄りの床面直上から出土したもので、平行沈線に磨消縄文が施されていて、器膚は表裏共によく研磨されている。一部分ではあるがおこげの付着が顕著である。2、3、8も渦巻沈線および磨消縄文が配される。7、9、11は衰退化した唐草文系土器群である。また、10はグリッドから出土した深鉢と同類である。

本住居址から出土した石器は、凹石2点、横刃形石器2点、磨石斧1点、乳棒状石斧片1点等であった。

これらの出土遺物から、本住居址の時期は曽利Ⅲ～Ⅳ式期に比定できよう。（島田　恵子）



第20図 J 17、18号住居址実測図(1:80)



第21図　J17号住居址出土土器拓影（1：3）

7）J18号住居址

遺　構（第20図）

本住居址は、C・D・E－6・7・8グリッド内で検出された。J17号住居址と重複し、校舎建設の基礎工事に破壊された攪乱層に切られる。また、北壁からJ16号住居址にかけて九兵衛尾根式期の住居が存在していることが、P_{13}の貯蔵穴によって判明したが、攪乱部分、D14号土坑、J16号住居址の重複、さらに調査区域の境まで35cmという狭い空間であったため、これ以上の混乱をさけるため止むなく中断した。

平面プランは、南北に490cm、東西420cmと推測され、隅丸楕円形を呈する。壁高は21～34cmを測り、やや垂直に近い立上りを見せている。主軸方位はN－21°－Eを示す。

覆土は、II層の部分的な堆積をのぞいては、黒褐色土のI層によって形成される。この層は小さな土器片や小礫、炭化粒子を混入する。

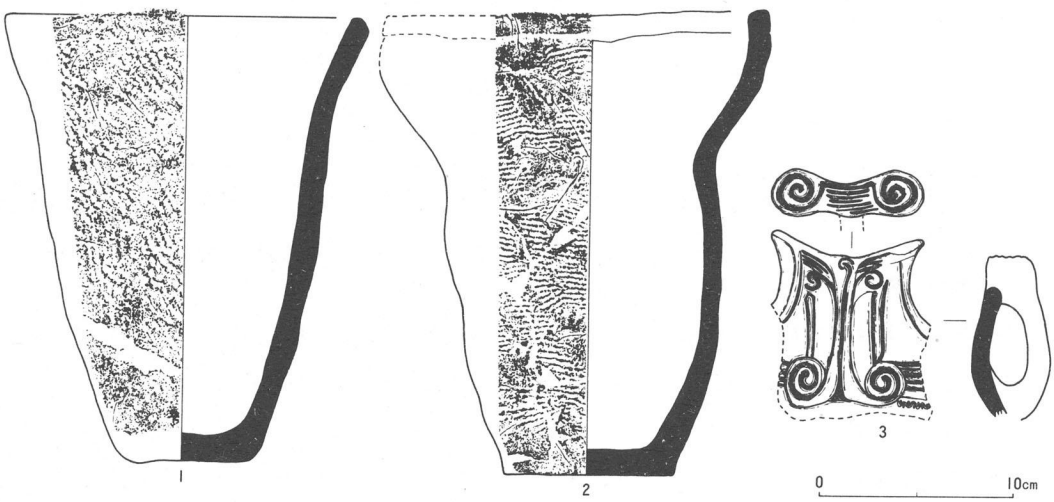
主柱穴は楕円状に掘り込まれて、P_1～P_4が正方形に規則的に配列している。規模は、P_1が63×

32－37cm、P_2が57×40－29cm、P_4が50×30－47cmを測る。

その他のピットでP_6は、50×17－30cm、P_7が35×25－10cm、P_9が40×20－25cmを測り、規模、位置からして屋内施設のためのピットであると考えられる。貯蔵穴は、P_{10}とP_{11}の2個でそのうちのP_{10}は段上のテラスを有し、73×67－55cmを計測する。P_{11}は82×82－20cmである。また、P_{12}は75×75－20cmを測り、底面より篦畑II式～九兵衛尾根I式期のヘラで格子目状に刻目を入れた深鉢の口縁部が出土した。摩滅が著しい。この貯蔵穴からJ18号住居址の北東壁際の一部分に床面が認められたが前述の事情から中断した。

炉は、北西寄りに位置し、110×110－50cmの円形の炉で段を有し、J17号住居址と同様に段の壁上に径13～33cmの石が組まれていた。硬砂岩性でこの石の周囲に申し訳け程度の少量の焼土が貼り付いているといった状態が観察された。炉の北西床面に深鉢が横転していた。また炉際の西側に焼土が75×80cmの円形状に堆積していて、地床炉であろうとおもわれる。断面図によると焼土の両脇に黒色土が5cm巾で、深さ6cm～10cmに入りこんでいて丁度、棒のようなものを立てかけた様相である。焼土は7cm程堆積していて、混入物のない真赤な焼土であり本調査区の縄文時代の住居中では焼土らしい焼土の一番みられたのがこの地床炉であるといえる。

また、遺構の周囲にはP_5や8cm～20cmの小穴をともなった周溝が巡っている。東南コーナー付近で周溝が切れていたが、丁度攪乱面にあたり削り取られてしまった可能性がある。



第22図　J18号住居址出土遺物実測図（1：4）

遺　物（第22図）

出土量は少数であるが、竪穴式石囲炉と地床炉の両脇から、複原の結果ほぼ完形品に近い状態となった2点が出土した。

1の器形は、口縁部が外反し胴上部にわずかなくびれを持つ。2は、口縁が内湾し胴部がくびれる。1、2ともに該期の特徴を最も強くあらわしたキャリパー形深鉢である。両者とも煤とおこげ痕が顕著である。文様は縄文が横位と斜位に施され、その間を一定の間隔で磨消が行なわれている。茶褐色を呈す。1は、長石、石英、金雲母が特に目立つ。

3は、唐草文土器の双把手付深鉢の把手部である。渦巻隆線、沈線、交互刺突文で構成された文様を持つ。長石、石英、金雲母が目立ち、本遺跡出土の唐草文土器にはまれな程器膚が荒い。覆土から出土した。その他覆土中から出土した土器片は、J17号住居址と同様に縄文前期末～中期後半と巾広く混在している。石器は磨石が1点出土した。

本住居址は、生活面から出土した1、2の土器から曽利Ⅲ式期に比定される。

（島田　恵子）

2. 土　　坑

1）D6号土坑（第23図）

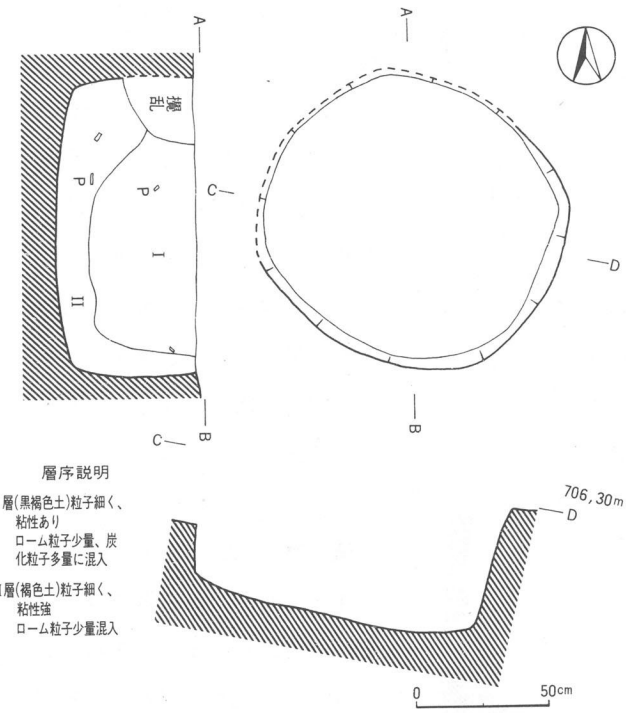
本土坑は、H4号住居址の南東コーナー寄りに検出された。D・E－1グリットに位置する。北西壁上面が攪乱を受けているが、平面プランは、南北120cm、東西が110cmを測る楕円形を呈する。主軸方位はほぼNを示す。

最深部は50cmを測り、壁はややオーバーハングして垂直に立上る。覆土は2層によって形成され、I層は炭化粒子を多量に混入する。人為的埋土である。

遺　物（第24図）

遺物は、土器小片が74点出土している。その中で底部片が4点ある。拓影に図示したものは比較的大きな破片である。石器は、第52図50の有溝石錘1点が出土している。

1～8は地文に細線文が施され、条線も交差したり、平行したり、集合したりと多用である。この種の条線を用いた土器の器形は、口縁がラッパ状に開口し、胴下部でわずかに内湾し底部



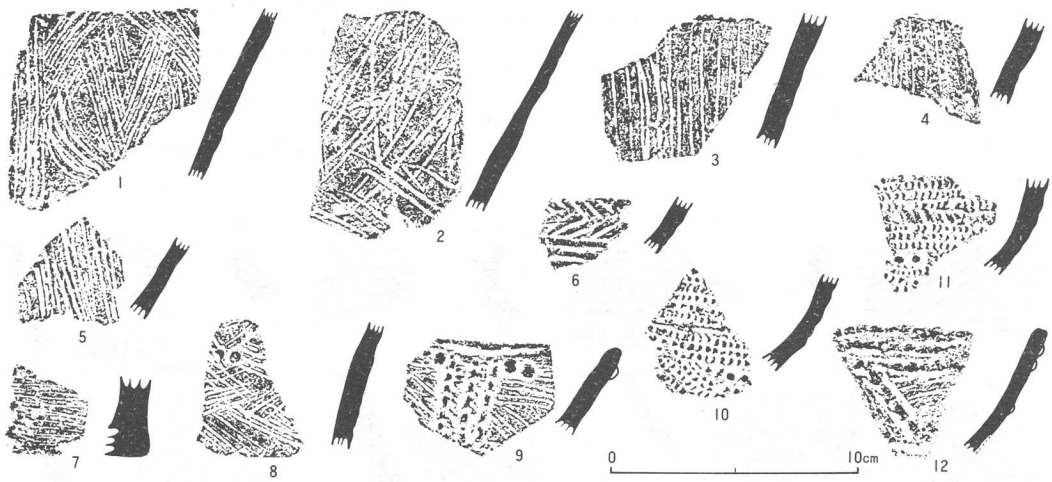
第23図　D６号土坑実測図（１：30）

にかけてわずかに外反する深鉢形土器である。また、８にみられるように口縁から胴下部までボタン状貼付文が付されることも特色である。

９～12は、細線文およびボタン状貼付文に半割竹管による刻目や連続爪形文等が加えられている。

全体に器肉が薄く、黒褐色を呈する（１、２、４、５、９）、茶褐色を呈する（３、６、７）、赤褐色を呈する（10～12）があり、焼成は固い。また、10、11、12はおこげ痕が顕著である。

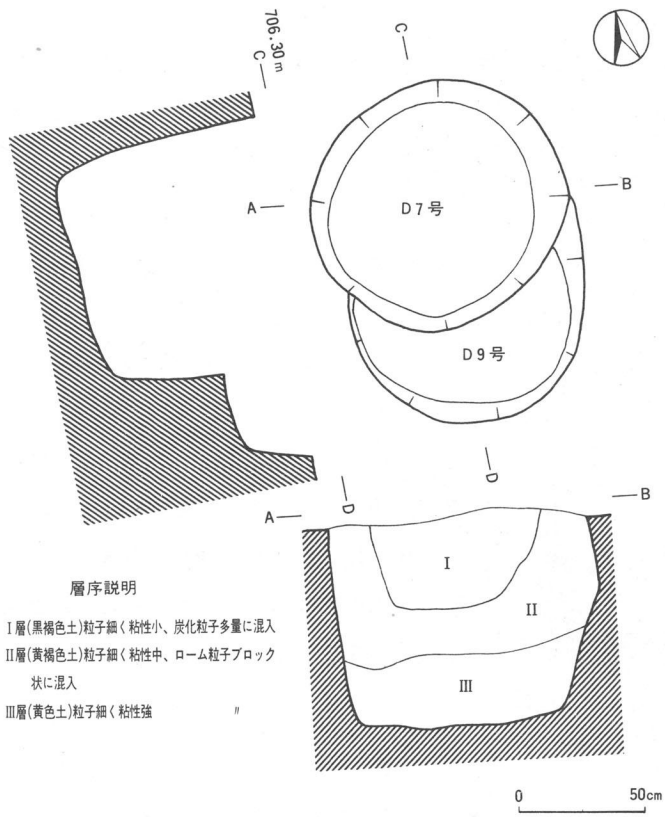
本土坑は以上の土器片から、前期末日向Ⅱ式（諸磯Ｃ式併行）に比定されよう。又、土坑の性格は貯蔵穴であろう。（島田　恵子）



第24図　D６号土坑出土土器拓影（１：３）

２）D７号土坑（第25図）

D７号土坑は、E－２・３グリッド内にて検出された。D８号土坑、小竪穴１号と隣接し、D９号土坑と重複関係にある。プラン確認時より南東面の輪郭が他の面に比べて不鮮明であったが、掘り下げ進行の段階で南東壁の断面にD９号土坑の存在がはっきり認められた。したがっ



第25図　D７号・D９号土坑実測図（１：30）

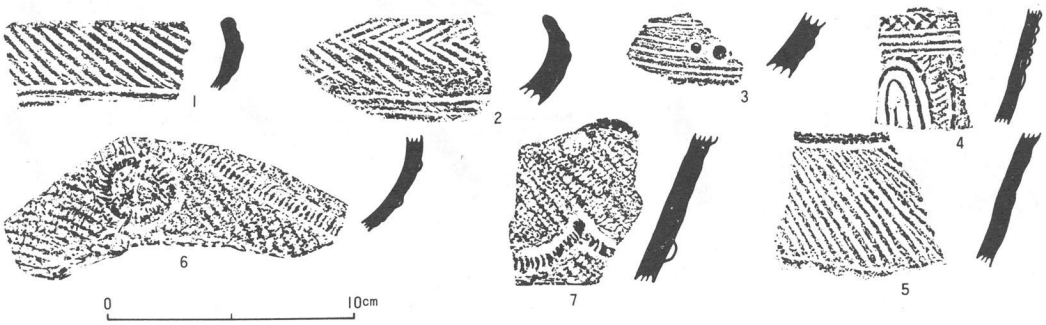
てD７号土坑は、D９号土坑を切って構築している。

平面プランは100cmの円形を呈する。主軸方位はN－10°－Eを示す。深さは85cmを測り袋状の掘り込みである。覆土は３層によって形成され、Ⅰ層は炭化粒子が多量に混入しており、D６号土坑と同様にやはり人為的な埋土である。

遺　物（第26図、第51図）

本土坑からの出土遺物は、土器片44点、石鏃１点、黒曜石剝片５点、石匙片、打石斧、横刃形石器各１点の出土があった。

第26図の土器拓影１～５は、篭畑Ⅱ式期の土器片である。４は、ソウメン状貼付文土器で、１～３・５は半割竹管による条



第26図　D７号土坑出土土器拓影（１：３）

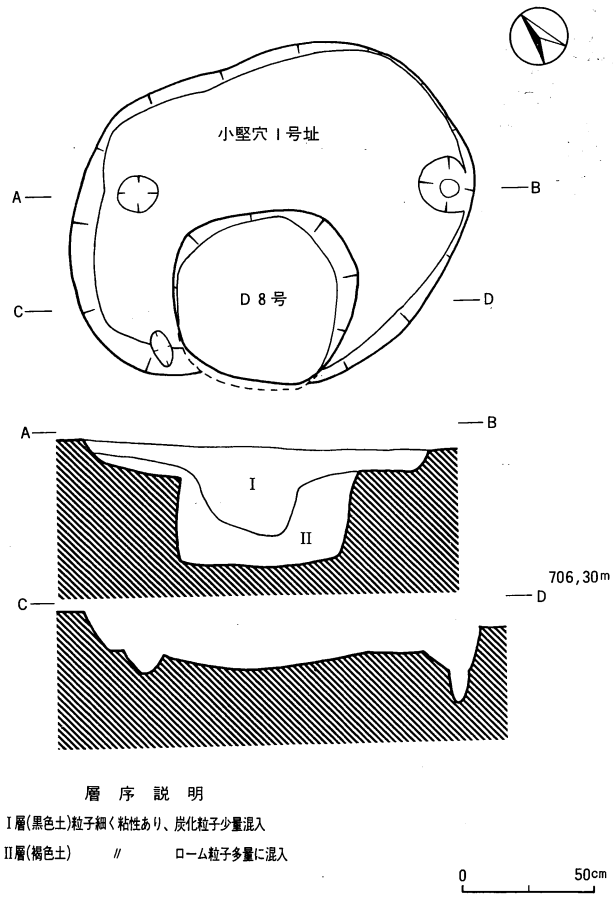
線が、斜位、横位、綾杉状の横位に施されている。

また、６、７は関西系の土器片である。塩や塩漬けにした海の幸を入れて交易のために運ばれてきたのではないかと想定されている。篭畑遺跡出土の完形品は和歌山県鷹島遺跡出土の土（註１）

器と類似している。斜縄文の地文に粘土紐が円形、波状、平行等に貼付けられその上を半割竹管による連続爪形文が施されている。胎土は一般に青灰色であるが、6は特に煤とおこげがベッタリ付着し暗黒色を呈する。その他拓影に示さなかった土器片も、ソウメン状貼付文3点と他はほとんど1～3、5の細片である。全体に暗黒色を呈し、器肉が薄く、1、2、5は器膚があらい。

本土坑は石器の出土が以外に多かった。横刃形石器・打製石斧は模造品として最初から製作した感を与える。また、本土坑の西壁際に20cm大の石が2個置かれてあった。袋状の掘り込み、規模、整った形状等から、D6号と同様に貯蔵穴と考えられる。西壁際の石はその目印として存在したものであろう。本土坑は前述したように、前期最末期の篦畑II式期に比定される。

（島田　恵子）



第27図　D8号土坑・小竪穴Ⅰ号址実測図（1：30）

3）D8号土坑（第27図）

D8号土坑は、E－2・3グリッド内の小竪穴1号址と重複して検出された。プラン確認の際にはこの重複のために苦労してしまった。

平面プランは、東西70cm、南北65cmを測る不整円形を呈する。主軸方位はN－37°－Eを示す。覆土はI層に炭化粒子の混入がみられ、ここでも人為的な堆積がみられる。深さは30cmを測り、南壁がオーバーハングして壁は垂直に立上る。

遺物は、土器片の出土は皆無であったが、第52図51に図示した石器が本土坑の地表面に突きささった状態で出土した。粘板岩質で中央に稜を持ち両側面に鋭い刃が存在したかのように刃こぼれが顕著である。柄をつけて鉾としたのではないかと思われる剣に形状が似ている。呪術的な感を呈する石器である。

（島田　恵子）

註1　間壁葭子「食生活」日本考古学を学ぶ(2) 1979

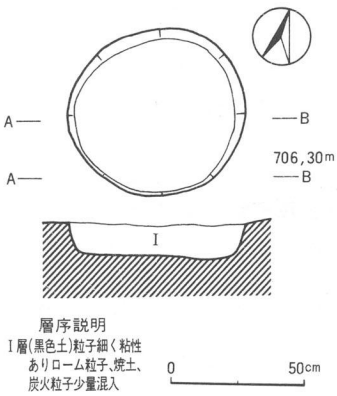
4）D９号土坑（第25図）

本土坑は、D７号土坑と重複して検出された。D７号土坑のところで前述したように、本土坑を半分破壊して、D７号土坑が前期末篦畑II式期に構築されていて、時期はD９号土坑が先行するが時間的差はあまりないものとおもわれる。

平面プランは、東西95cm、南北が推定で105cmを測るとおもわれる。深さは30cmで、主軸方位はほぼNを示す。遺物の出土は皆無であった。　（島田　恵子）

5）D10号土坑（第28図、29図）

本土坑は、D－７グリッド内に位置し、J18号住居址の上部にて検出された。J18号住居址確認面の土層に比べて、より暗黒色であったため新しい土坑であることが容易に判明した。



第28図　D10号土坑実測図(1：30)

第29図　D10号土坑出土古銭拓影(1：1)

プランは、南北に63cm、東西に67cmを測りほぼ円形を呈する。主軸方位はN－7°－Wを示す。確認面からの深さは13cmを測る浅い掘り込みである。

出土遺物は、古銭が床面より出土した。皇宋通宝で宝元二年（1039年）の古いもので宋銭である。無背文であった。

覆土に焼土、炭化粒子の混入がみられ人為的な埋土であることと古銭の出土からして、本土坑の性格は墓坑であると考えられる。

（島田　恵子）

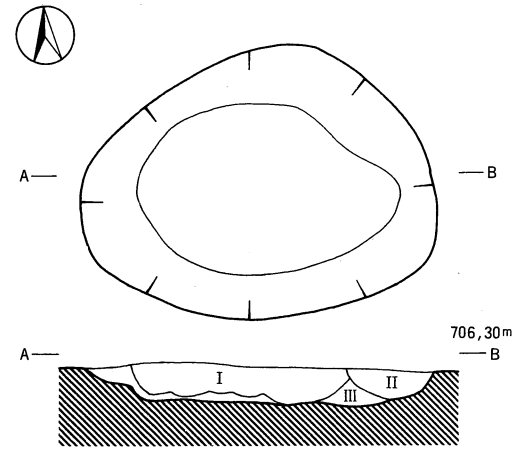
5）D11号土坑（第30図）

本土坑は、D－８・９グリッド境界線上で検出された。J18号住居址、D12号土坑に隣接する。平面プランは、南北に103cm、東西132cmを測り、南北の中央が張り出した楕円形を呈し、主軸方位はほぼNを示す。

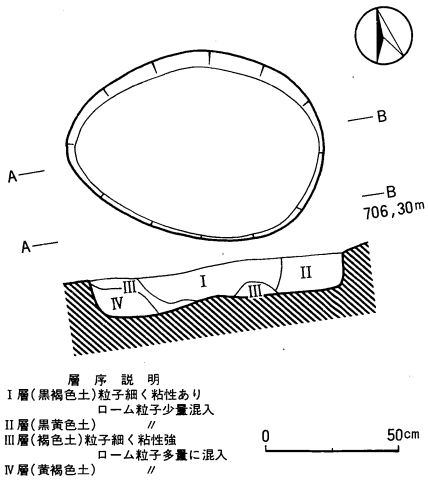
覆土は３層から成り、本土坑もＩ層に炭化粒子を多量に混入する人為的埋土である。最深部は14cmと浅い。

遺物の出土は皆無であったが、D10号土坑と覆土様相の類似、規模、同レベルの場所等からみて、本土坑の性格も墓坑であると考えられる。

（島田　恵子）



第30図　D11号土坑実測図(1：30)

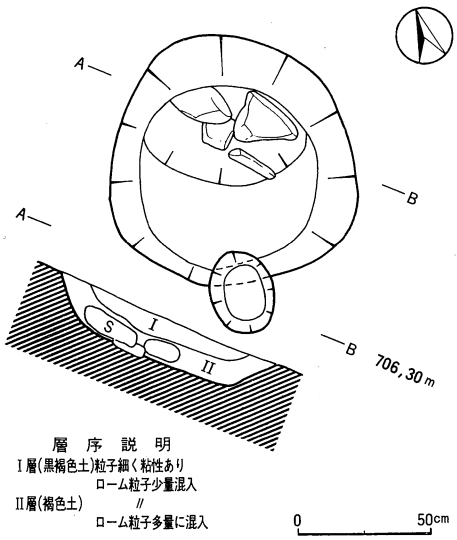


第31図　D12号土坑実測図(1：30)

6）D12号土坑（第31図）

本土坑は、D11号土坑、J18号住居址の際、D・E－8グリッド内にて確認された。

平面プランは、南北に73cm、東西98cmの楕円形を呈す。主軸方位はN－12°－Eを示す。最深部は15cmを測り、壁は垂直に近い立上りをみせているが、底面は中央が盛り上りやや凸凹である。そのためか覆土は4層に別れやや複雑な層を形成している。土坑内からの遺物の出土は皆無であった。規模、位置からして本土坑もD10号土坑、D11号土坑群に含まれるであろう。



第32図　D13号土坑実測図(1：30)

7）D13号土坑（第32図）

本土坑は、F－8・9グリッド内にて検出された。東側一帯の土坑群の中で、プラン確認の折に落込みは見られるものの、その輪郭が判明できず困難をきたした。

平面プランは、南北93cm、東西95cmのやや不整な円形を呈する。主軸方位はN－19°－Eを示す。壁高は12cmでなだらかな立上りをみせ、最深部は16cmを測る。また、北壁際底面に径12～20cmを測る硬砂岩質の4個の礫が存在した。また、南壁立ち上り際に30×25－18cmのピットが掘り込まれていたが、本土坑には伴なわない後世のものである。

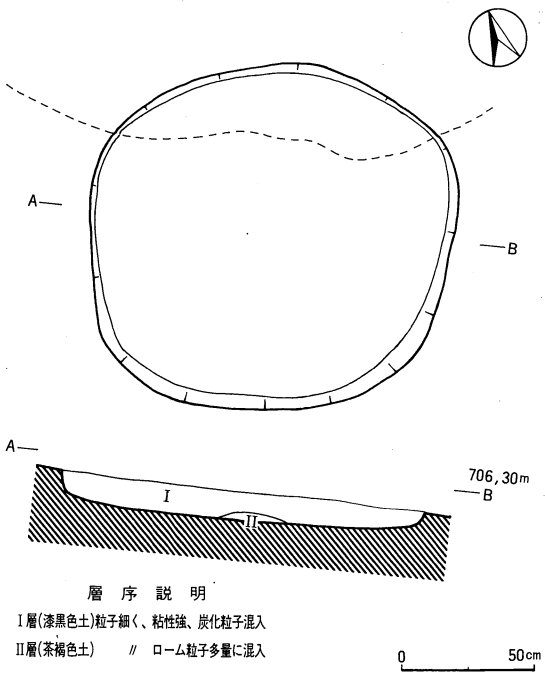
遺物は、第52図に図示した石錘が1点出土したの

みであった。礫の存在、形状等からやはりD10号からの土坑群に含まれるであろう。

（島田　恵子）

8）D14号土坑（第33図）

本土坑は、J16号住居址の上面C－5・6グリッド内にて検出された。本遺構は2日目の遺構検出作業の折に一早く確認されていた。漆黒色を呈し、J16号住居址と重複していたがその切り合い関係も一目瞭然であった。



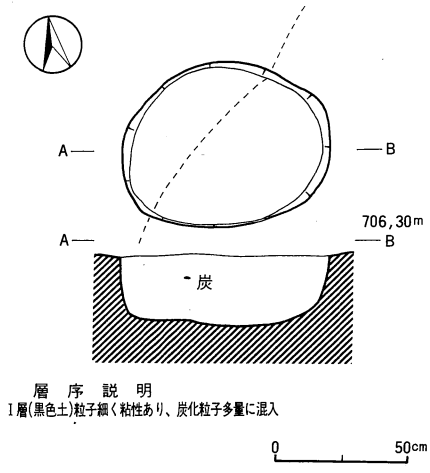
第33図　D14号土坑実測図(1：30)

平面プランは、南北に137cm、東西131cmの隅丸方形を呈する。主軸方位はN－17°－Eを示す。最深部は12cmと浅い。南東コーナーが攪乱気味であった。覆土は漆黒色を呈し炭化粒子を混入するI層と部分的なII層とによって形成される。

遺物の出土は皆無であり、時期、性格等については決定しがたいが、覆土、様相等の類似点は他の土坑にほぼ一致している。

9）D15号土坑（第34図）

本土坑は、J13号住居址の北西コーナー上面にて検出された。グリッドはI－5に位置する。確認面は黒色を呈していたため重複関係にあっても容易に検出できた。

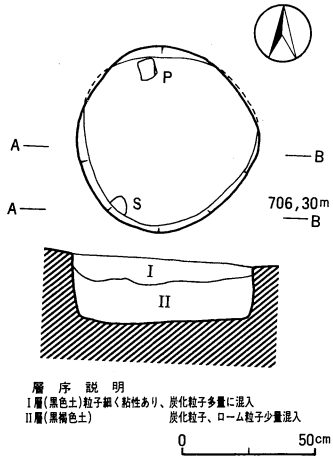


第34図　D15号土坑実測図(1：30)

平面プランは、東西78cm、南北63cmを測る楕円形を呈し、主軸方位はほぼNを示す。壁高は22～17cmを測り、壁は垂直に近い立上りを見せている。最深部は26cmを測る。覆土は1層から成り炭化粒子を多量に混入する。断面図にも3×1cmの木炭片が残存している。

遺物の出土は、J13号住居址に伴なう小片のみでD15号土坑に関する所見は得られなかった。

（島田　恵子）



第35図　D16号土坑実測図
(1：30)

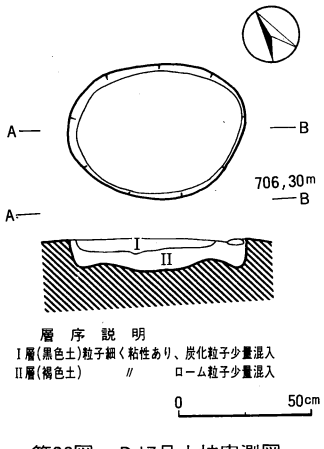
10）D16号土坑（第35図）

本土坑は、Y14号住居址内の上面、H－7グリッド内にて検出された。

平面プランは、南北に60cm、東西が58cmを測るほぼ円形を呈す。壁高は、29～20cmを測り垂直に立ち上っているが、北東と北西コーナーの壁がオーバーハングして立ち上っている。主軸方位はN－5°－Wを示す。覆土は、黒色を基調とした2層から成り、特にI層は炭化粒子を多量に混入する。

土坑内底面の北壁際に内面調整の荒い無文土器片が、西南コーナー壁際には6×7cmの礫がそれぞれ存在する。無文土器片はY12号住居址出土の壺形土器第2図1と同類であることから、Y14号住居址の土器の混入であろう。土坑底面とY14号住居址の床面とはほぼ同レベルとなる。

本土坑は、弥生住居址の上面に構築されていることと、炭化粒子を多量に混入している覆土等から、D10号土坑からの土坑群と同一時期に位置付けられる。



第36図　D17号土坑実測図
(1：30)

11）D17号土坑（第36図）

本土坑は、D15号土坑と同じくJ13号住居址の北東コーナー上面にて検出された。グリッドはG－7に位置する。

平面プランは、東西に62cm、南北に52cmを測り楕円形を呈す。主軸方位はN－31°－Eを示す。壁高は18cm～13cmを測り、壁の立上りは垂直である。

覆土は2層で形成され、I層は炭化粒子を混入する。遺物の出土は皆無で時期を決定する所見は得られなかった。

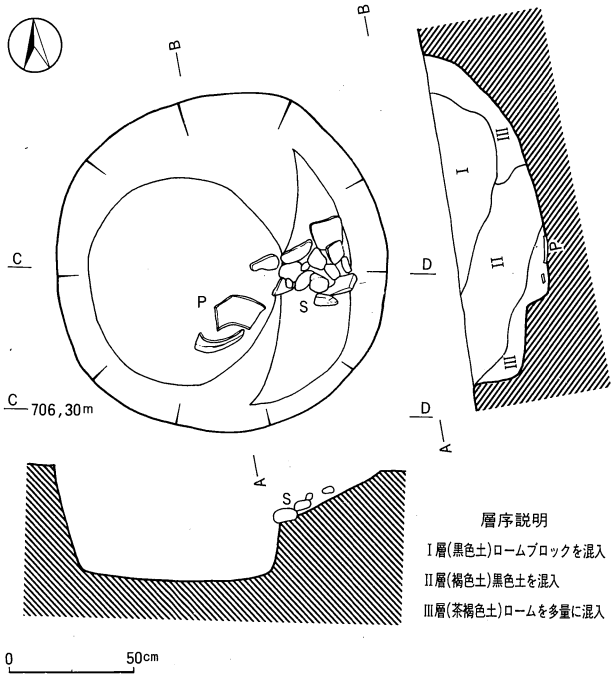
（島田　恵子）

12）D18号土坑（第37図）

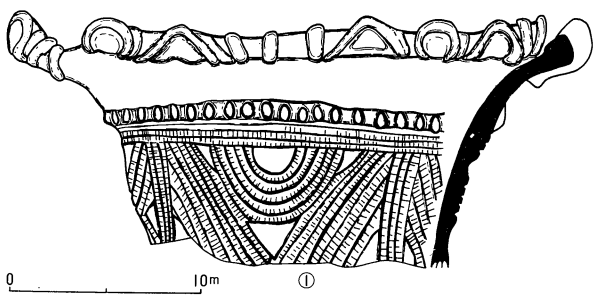
本土坑は、Y12号、J13号住居址の間に位置し、H・I－3・4グリッド内にて検出された。

平面プランは、南北に135cm、東西131cmを測る円形を呈する。主軸方位はほぼNを示す。覆土は3層によって形成される。最深部は47cmを測り、壁は垂直に近い立上りをみせている。

東壁に添ってテラスを有し、テラス上部にこぶし大の礫が四角形に、土坑内に傾斜して配石され、また、土坑内底面には胴部を欠損するキャリパー形の深鉢形土器が検出された。配石と土器を伴なった様相から墓坑であることに問題はなかろう。



第37図　D18号土坑実測図（1：30）



第38図　D18号土坑出土遺物実測図（1：4）

遺　物（第38．39図）

第38図1は、頸部から口縁にかけて大きく外反し、ラッパ状に開く。口唇部から口縁には、径1cm～0.8cmの粘土紐が耳状および山形状に貼付け装飾されている。これ等の装飾は茅野市の下島遺跡出土の貝殻状突起装飾の残影とローカル化といえよう。頸部には粘土紐が一周し、半割竹管工具により連続的に楕円形の刺突がおこなわれる。その下部は、円弧、平行、斜位に沈線を5mm間隔で描き、その上をヘラで粗雑な刻目を入れている。切り刻むという表現が最も適しているといえよう。またそれらの間には三角形の陰刻文が配されている。

赤褐色を呈するが、煤の付着と日常煮沸の頻繁な使用により内面の変色は著しく、おこげの残着も多い。このようなこわれた煮沸具を墓坑へ転用したものとおもわれる。

本土坑は、篦畑Ⅰ式期に比定されよう。

（島田　恵子）

3. 小　竪　穴

1）小竪穴1号址（第27図）

本遺構は、E・F－2・3グリッド内にて検出された。D7号土坑、D9号土坑と隣接し、D8号土坑が本遺構を切って構築している。

平面プランは、東西に155cm、南北に125cmを測る楕円形を呈する。主軸方位はN－23°－Eを示す。東西に2個の柱穴らしき凹みが存在するが、西側の凹みが貧弱である。壁高は8cm～15cmを測り非常に掘り込みが浅い。一応、小竪穴と命名したがあるいは古い時代の住居址が数

回にわたって建てかえされたものの残存部かも知れない。

遺物の出土は皆無であった。D８号土坑に先行するが、あいにくD８号土坑も土器の出土が皆無で、両遺構ともに時代を決定する所見が得られていない。

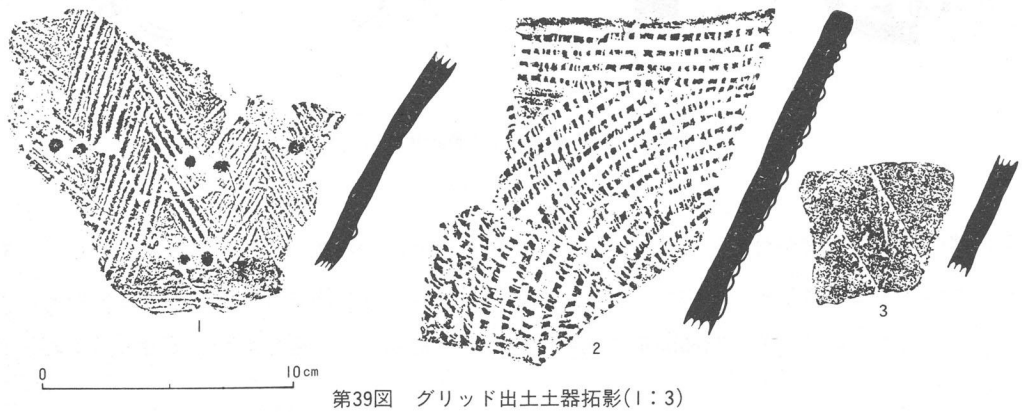
（島田　恵子）

4.　グリッド出土土器（第39図）

グリッド出土の土器片は、かなりの量であったが類列はそのほとんどを住居址出土の拓影で図示してあるので、ここには代表３点のみをとどめた。また、図示できる破片および半完成品の出土はなかった。

第39図１～３は、調査区の東端D－９、G－９グリッド内にて出土している。１は、綾杉状の沈線にボタン状貼付文が施される。色調は黒褐色を呈し焼成は良好であるが器膚はあらい。日向Ⅰ式期に属する。

２は、３㎜前後の粘土紐を同間隔に、平行、円弧状に貼付し、その上をヘラで刻目をつけている。また、地文にも平行のヘラ刻みが施されている。乱雑な切り刻みが諸磯Ｃ式期の半割竹管文や爪形文と異なる。竃畑Ⅰ式であるが、これがやがて本遺跡での竃畑Ⅱ式の格子刻目文へと移行する。３は、鋸歯状三角列点文が施された代表例である。



第39図　グリッド出土土器拓影（1：3）

5.　上の林遺跡出土の概出土器

上の林遺跡から出土した概出遺物を第40図に図示した。

１は、現存高15㎝を測る小形釣手土器で、文様構成は頂部に王冠状の突起が付き、突起部に２本の粘土紐を十文字に４箇所へ配し、粘土紐と粘土紐との間に刻目を入れ、釣手部分と口唇部に渦巻隆線文が配されている。釣手孔は口縁直上の釣手口にある。胴部は無文であるがタール状のカーボンが染となって付着している。釣手内面底部にはおこげ状にベッタリ付着し、釣

第40図　上の林遺跡出土概出遺物(1：4)

手頂部の天井面も煤が付着しており灯火用に使用した痕跡が判然としている。焼成は良好であるが使用の頻度が激しかったのか、胴部の剝落が目立つ。また釣手部は半分欠失している。曽利II式の釣手土器である。昭和52年に箕輪高校のゴミ捨場の穴を掘っていた時に4の土器と共に出土した。

2、3は藤内I式の顔面把手である。2は、つり上った目、円い口と鼻の穴、そして丸顔がなんともあどけなくて愛らしい。3は、表情がリアルでなにかを訴えている感を呈する。口元のゆがみ、直線的な目、ほほに刺青のお化粧が2条施され、鼻のまわりは焼成時の黒煤が斑点状にシミでていて、よけいに表情が奇異となる。

4は、沈線と磨消縄文を主体に構成された、キャリパー形の深鉢で、くびれ部からの胴部を欠失する。曽利II式に比定される。

5は、晩期の徳利形をした壺形土器である。文様は沈線、列点文、磨消縄文、三叉文で構成される。黒褐色を呈し器面はよく研かれ黒光りをしている。三叉文と三叉文の間にコブの貼付

けが存る。佐野Ⅰ式に併行する。

6は、弥生中期後半の北原式土器である。小形台付甕形土器で口縁を欠失する。文様構成は4単位に分け器面に縄文を施し、その上にヘラでコの字を5段に重ね合せ、5段目のコーナーにボタン状貼付文が付されている。赤褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。5と共に戦前の出土であるという。同文様で台を共なわない甕形土器が箕輪遺跡御室田から出土している。

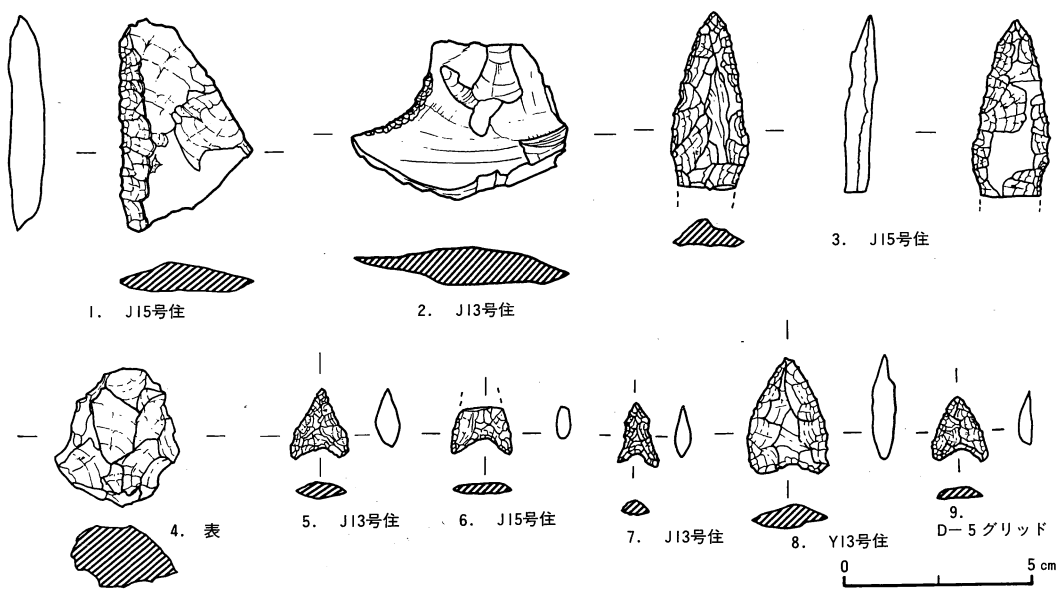
以上が概出遺物の代表例であるが、第1次・第2次調査にわたって検出した平安時代（国分期中葉）を含めて、縄文前期初頭から平安時代までの連続的な資料が見出されている。

（島田　恵子）

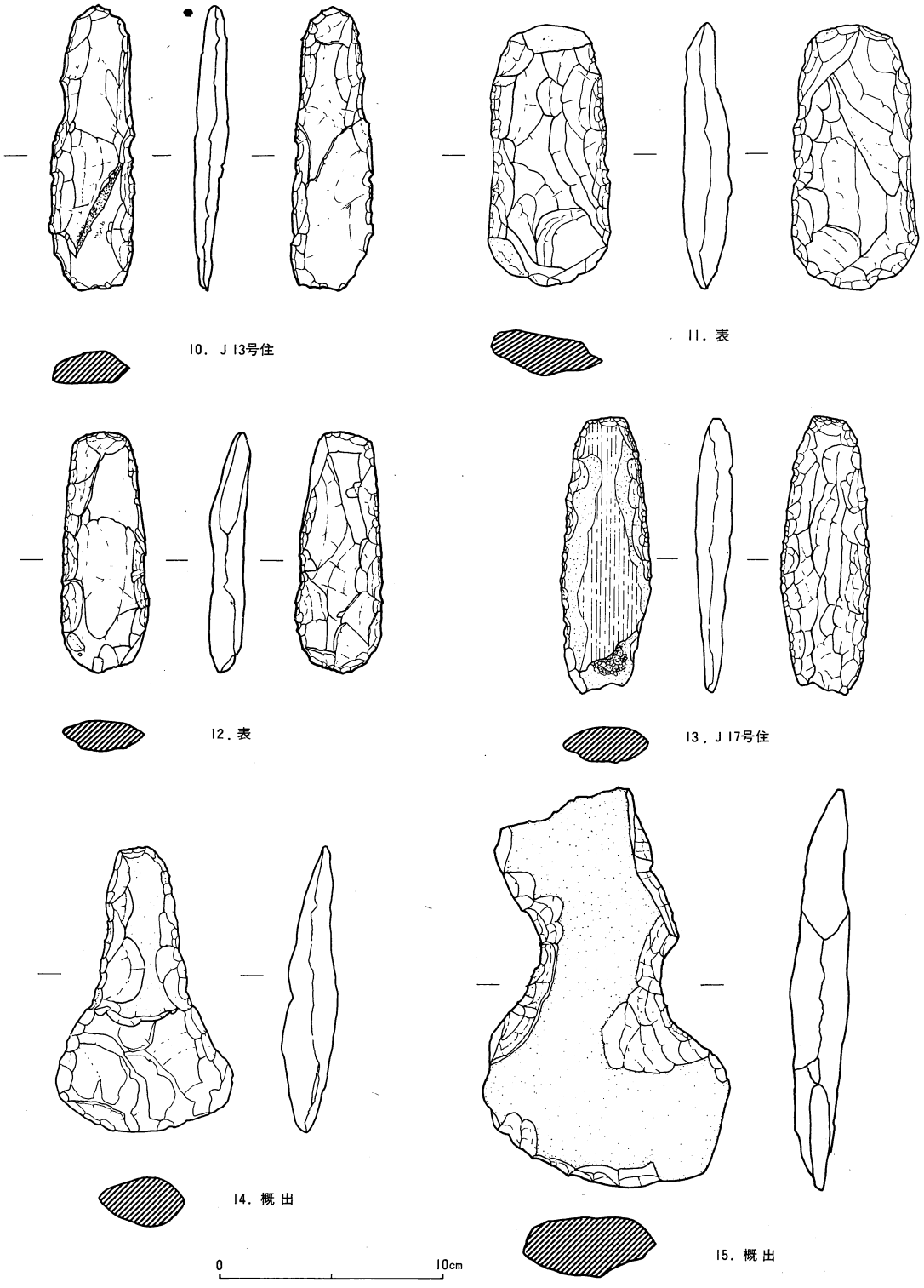
6. 石　　器

第2次調査で出土した石器を種別、形態別にまとめ、概出遺物と共に概観した。尚、別表で出土遺構別に区分し、属性等の詳細を示した。

第41図は剥片石器ならびに石鏃を図示した。1は、J15号住居址出土のチャート製の剥片石器である。サイドに刃を形成し、刃縁はかなり鋭い。2は、J13号住居址から出土した黒曜石製の剥片石器でノッチを付けわずかな調整がみられるが、刃縁は鋭利ではない。3はJ15号住居址床面出土の尖頭器形状の石器で下端部が打損しており、製作途上のものとおもわれる。4は、微小剥離痕のある黒曜石の剥片である。5はチャート製の石鏃、6もチャート製で先端部



第41図　上の林遺跡出土石鏃・その他実測図(1：2)



第42図　上の林遺跡出土打石斧実測図（1：3）

を打損する。7は同じくJ15号住居址出土の五角形鏃である。8は、J13号住出土のチャート製の大形石鏃、9は、D－5グリッド出土の黒曜石製で刃縁は細く剝離され鋭利である。

第42図は打製石斧を中心にまとめた。

10は、J13号住出土の短冊形で、刃は偏刃で基部の回りを細かく剝離している。左側面に快りをもち、両側面はツルツル摩耗していて着柄の痕跡が明らかに認められる。11は、表採で、基端の一部に自然面を残す。刃は円刃である。12は、同じく表採で基部の上端と刃面をわずかに研磨した短冊形の非常に整った形状をし、刃を円刃にし基部の回りを細く剝離している。左側面に着柄の摩耗がわずかに認められる。11は砂岩、12は輝緑岩を素材とする。

13は、乳棒状石斧破片を2次加工した短冊形石斧である。下部は敲打痕の集積が見られ両側面に細い剝離を施している。緑泥岩を使用。

14は、概出遺物で基部に自然面を残し、刃部を研摩した局部磨製である。整った形状をした撥形である。15は、右上端部の一部が欠けた分銅形である。基部に自然面が残る。

第43図は磨製石斧を中心にまとめた。

1は、基端部に敲打痕とみられる痕跡をもつ定角石斧である。裏面の刃部は研磨され鋭利である。J15号住居址東壁床直上から角柱状の砥石、磨石とセットで出土した。17は、きなこ石と通称される岡谷産の蛇紋岩を用いた定角石斧である。よく研摩され優品であるが欠壊や基端部の着柄痕が顕著である。J17号住居址西壁際の床面出土である。18は、高遠の三峰川産蛇紋岩で17のきなこ石とは異なり黒味がかった緑色を呈す。硬い石質であるが両側面を偏平に研磨した刃縁の鋭い定角石斧の最優品である。表採。19は、J13号住西壁際周溝内出土の乳棒状石斧で全面に敲打痕を残している。20、21は概出で両者とも敲打痕が認められるが刃部が研磨されている刃部磨製石斧である。チャートを素材とする。

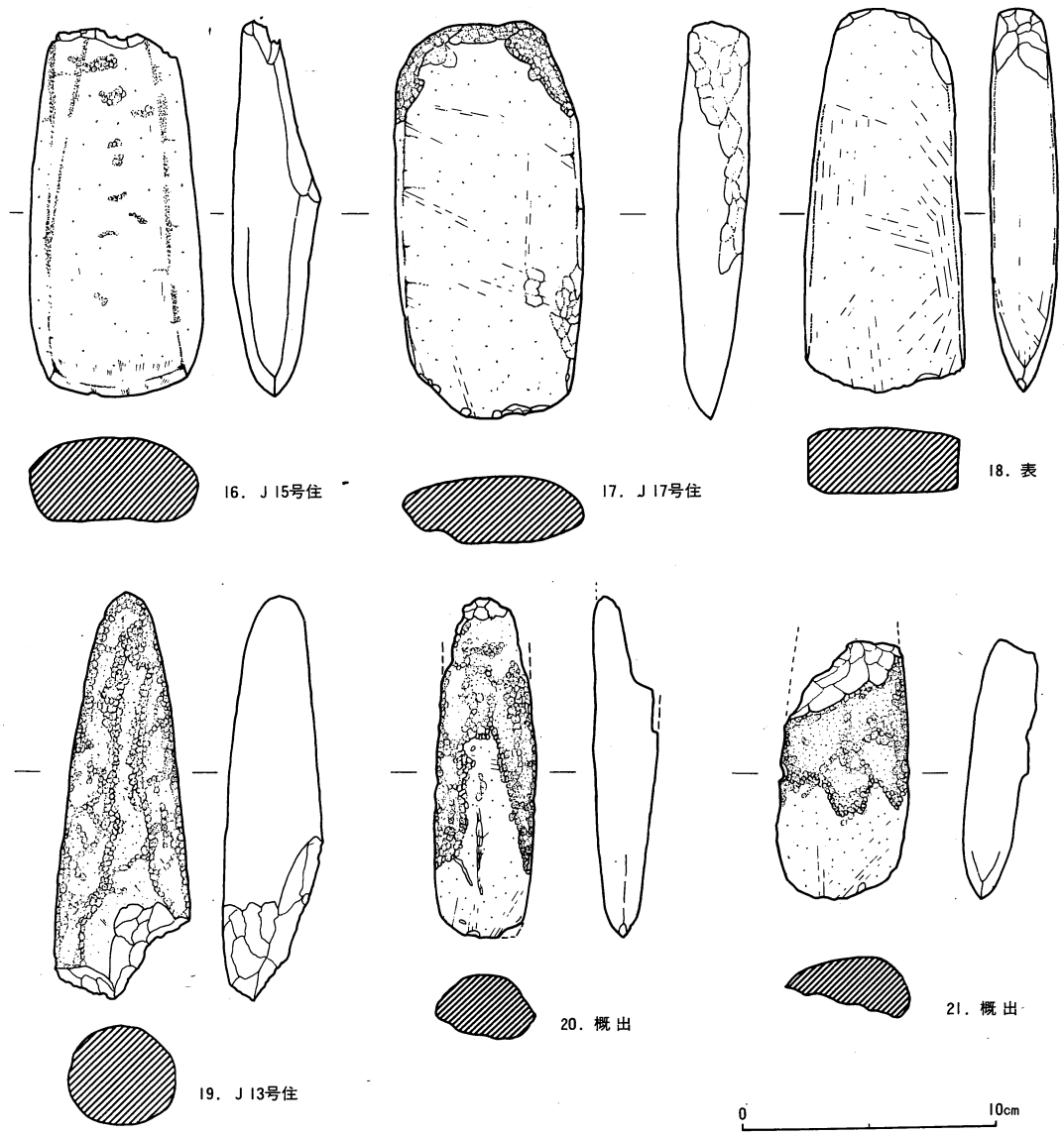
第44図は、凹石を中心にまとめた。

22は、J17号住居址の磨斧と並んで出土している。平面菱形、断面四角形を呈する。23は、概出である。円形を呈するが両側面が欠損する。両面共に1個の凹みをもつ。花崗岩製であるが風化して割れ目が目立つ。

24は、J13号住居址出土で円形を呈す。両面共に1個の凹みをもつ。表面の凹みの周囲は使用痕が顕著である。半花崗岩を素材としている。25は、表採で両面に凹みをもつ。先ず表面は2個重なり合った凹みで、裏面は3個の連なった擦りによる凹みをもつ。花崗岩を使用。

26は、J17号住居址出土で中央に径4cm、深さ0.4cmの楕円形の凹みを有する。硬砂岩である。27は、花崗岩質ペグマタイト石を使用している。金雲母が全面にキラキラ光ってきれいな色であるが、ゴツゴツしている。表面に2個の凹みをもつ。

28は、長砂岩を用いた片手に握りやすい楕円形の凹み石である。表面に2個、裏面に1個の凹みをもつ。裏面は擦りによって生じた大きな凹みである。凹みの回りは磨れていて磨石と兼



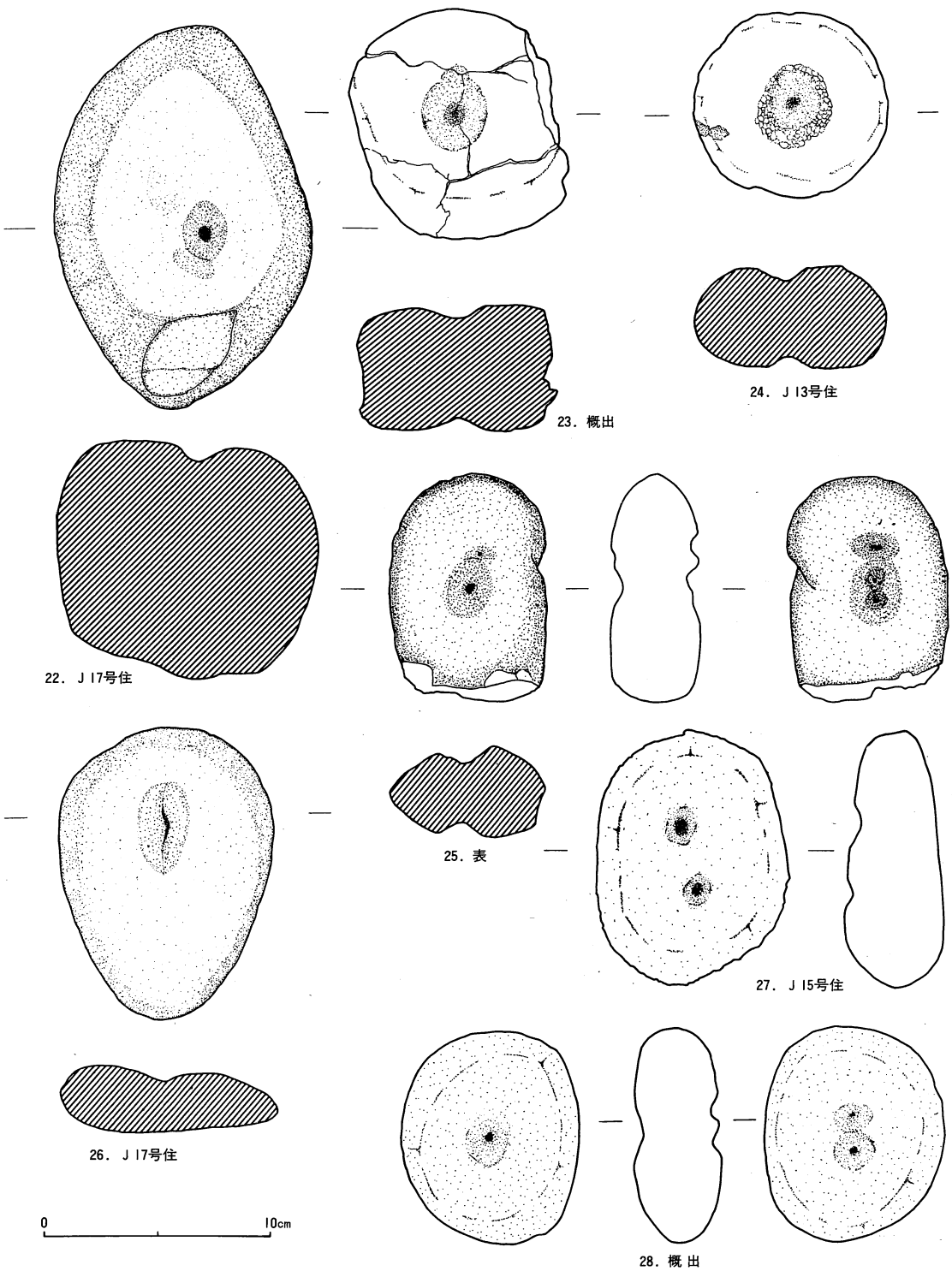
第43図　上の林遺跡出土磨石斧実測図（1：3）

用であろう。

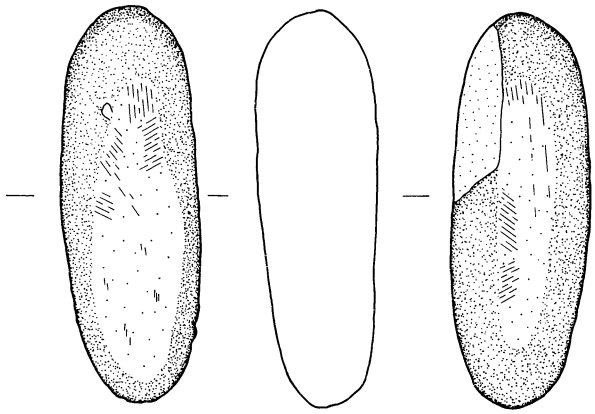
第45図は磨石を中心にまとめた。

29は、硬砂岩の礫を用いて両面が擦られて偏平となっている。上、下の先端はアバタ状痕があり、両端は植物を敲き、押し潰したすりこぎ状の石器である。30は、J 15号住居址東壁際床直出土で磨石斧、角柱状の砥石と並んで出土した。右上側面が擦られている。粘板岩である。

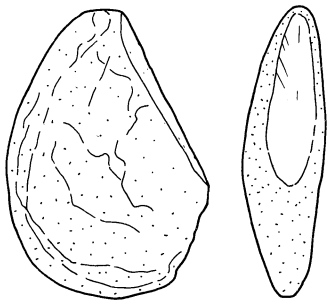
31は、円盤状の磨石で表裏ともに研磨されている。表採である。石質は鹿塩片麻岩(花崗岩)



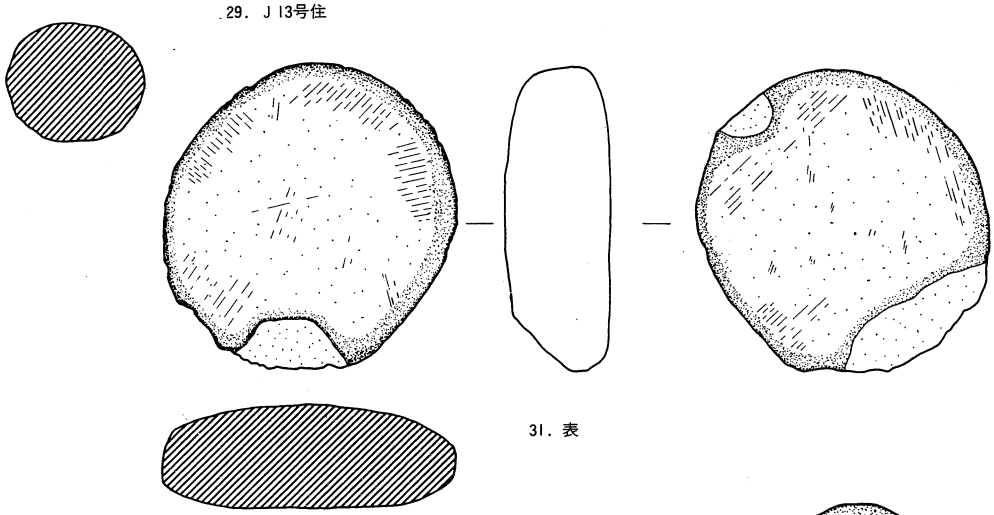
第44図　上の林遺跡出土凹石実測図（1：3）



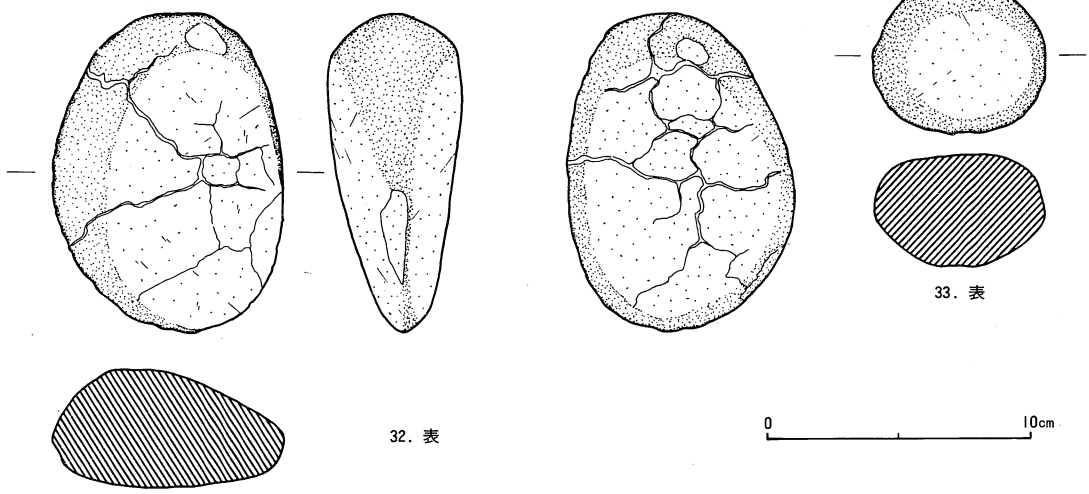
29. J 13号住



30. J 15号住



31. 表



32. 表

33. 表

0 10cm

第45図　上の林遺跡出土磨石実測図（1：3）

である。32は、高遠産の花崗岩を使用した見事な磨痕の認められる磨石である。ヒビが全面に入っている。表採であり石皿と共なわないのは残念である。33は、やはり表採で小形の磨石である。アバタ状痕がうっすら認められ、凹み石の転用とおもわれる。砂岩である。

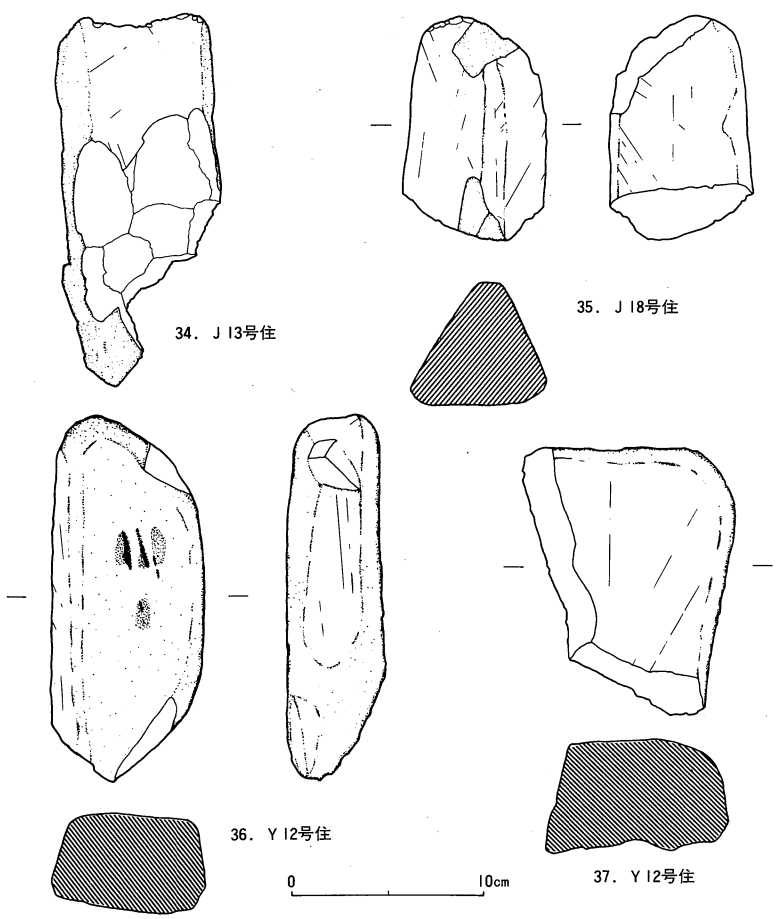
第46図は砥石状の石器を中心とした。

34は、J13号住居址出土で大部分が割れているが残った面はきれいに擦られている。35は、J18号住居址出土で三角柱状の砥石である。三面および面の角もよく擦りこまれている。

36、37は弥生時代の住居址Y12号からの出土石器である。弥生時代の住居址からの石器の出土はこの2点であった。36は両側面に擦り跡が顕著で煤の付着も認められる。37は、破損しているがやはり側面の擦痕が見事である。破損部の他は全面擦られている。

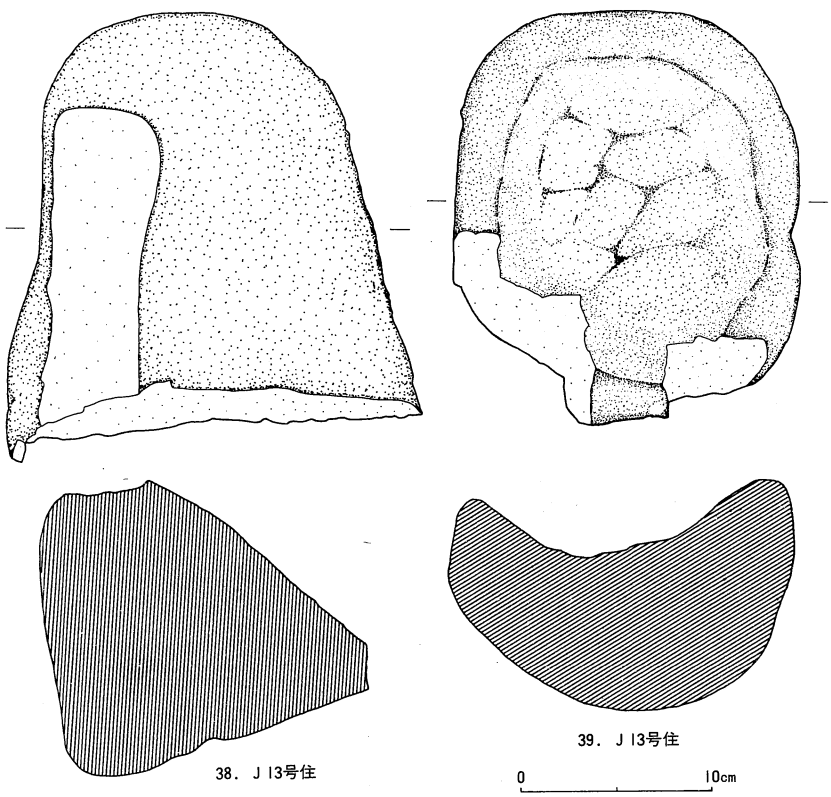
第47図は、J13号住居址出土の大形石器をまとめた。

38は、住居址の炉付近に敷石状に配石されていたもので、よく磨かれ立石状の形状を呈す。熱を受けた焼痕で赤味を帯び煤の付着も認められる。39も配石の先端部に並べられていたもので石皿的形状を呈す。凹部がえぐれていて石皿のようにすんなりした皿の様相がなく凸凹である。むしろ敲打された痕が強い。アバタ状の痕跡から木の実等の堅いものを粉砕するための用途を果した石皿であろう。また、おこげ痕が付着している。黒いこげつきは光っている。3分の1を欠失するが両者とも破損したものを、屋内祭祀の場に配石したものとおもわれる。

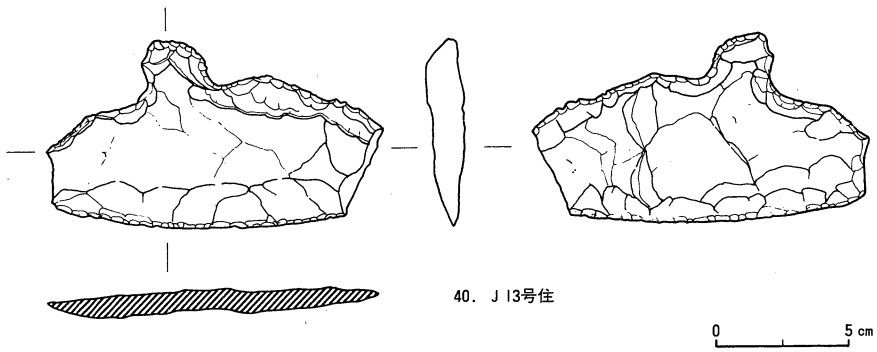


第46図　上の林遺跡出土磨石、砥石実測図（1：3）

第48図は、同じく13号住居址出土の石匙である。覆土上部から両耳壺と並

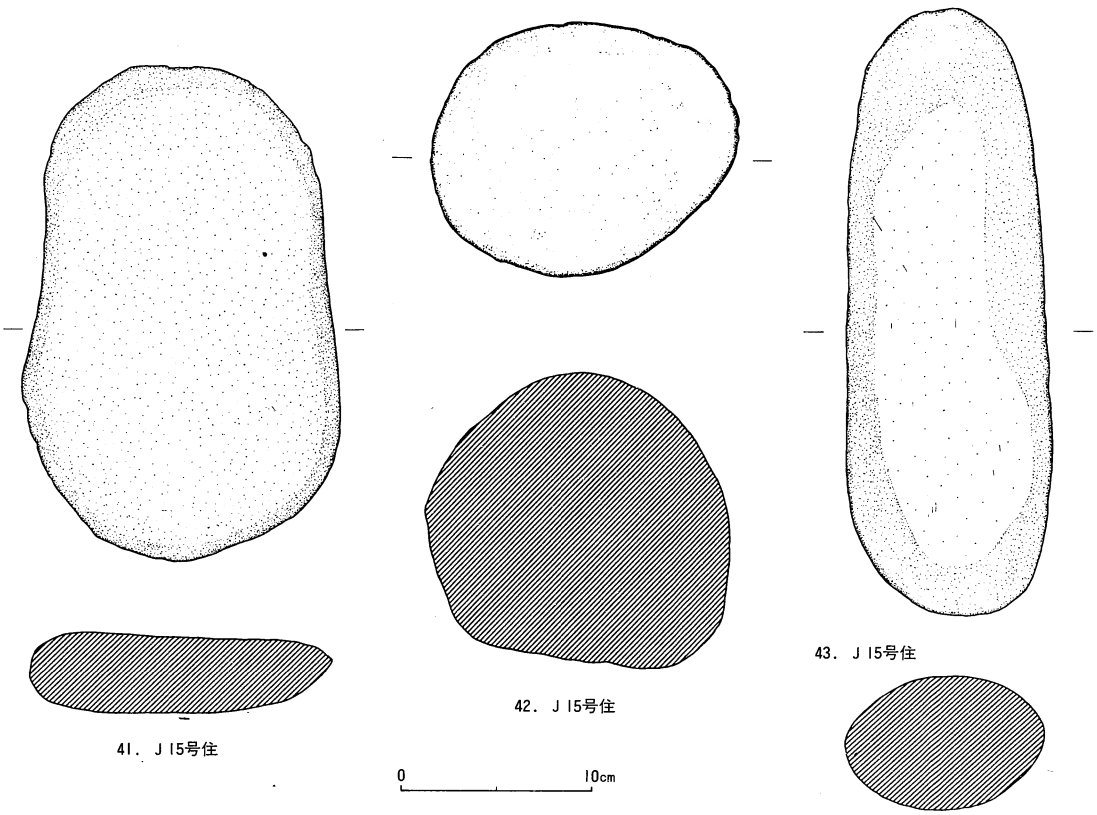


第47図　上の林遺跡J 13号住居址出土石器実測図（1：4）



第48図　J 13号住居址出土石匙実測図（1：3）

んで出土した。粘板岩性で横長の大形品である。両端が打損している。刃部は細かく剝離されている。



第49図　上の林遺跡J15号住居址出土石器実測図（1：4）

第49図、50図はJ15号住居址出土の石器を中心にまとめた。

41は、平板状の石皿的用途であったとおもわれる磨り石である。縁をもたない平石で表面に洗っても落ちない黒褐色の斑点状の滓が付着している。炉近辺の床面から出土した。材質は砂岩である。

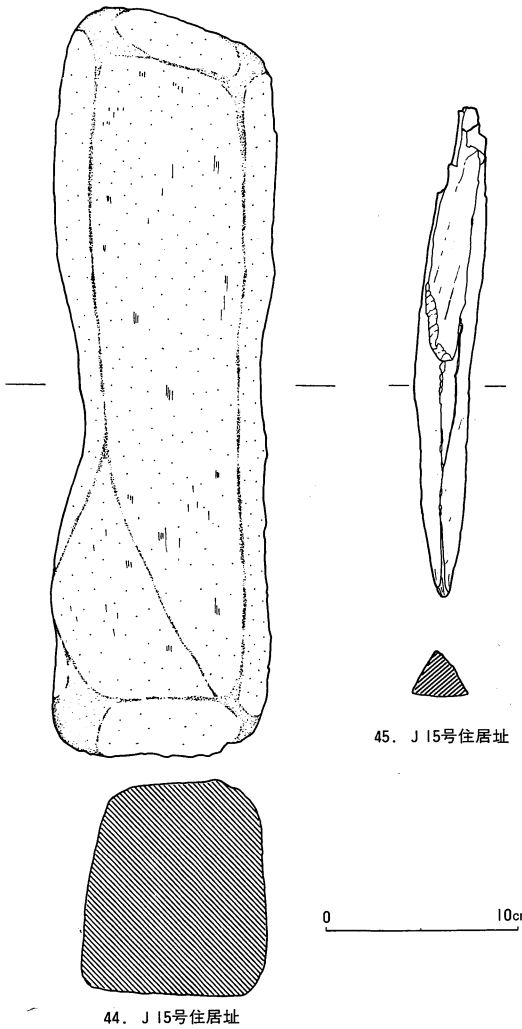
42、43は竪穴炉からセットで出土した。42の丸石は鹿塩片麻岩で43は砂岩である。両者とも研磨されており、丸石は女性を楕円状の砂岩は立石で男性を象徴しているものと想定される。

44は、巨晶花崗岩で角柱状を呈す。両面がよく擦られて平であるが、側面が快れたり、波状の凸凹を呈する。石全面がよく磨かれている。磨石斧、磨石と共に並んで出土した。45は粘板岩質で先の尖った三角柱状を呈し、掘棒的な様相であり、尖った部分は擦り痕が顕著である。

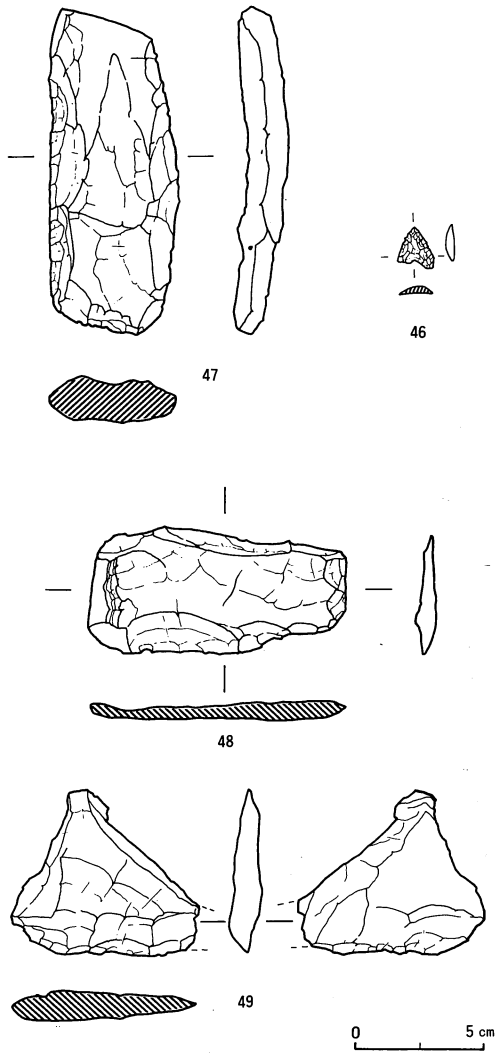
第51図は、D7号土坑から出土した石器を中心にまとめた。

D7号土坑からは、他の土坑に比べてかなりまとまって出土している。46は、黒曜石の石鏃である。

47は、輝緑岩の打石斧である。裏面に自然面を残し、やや弓なりにゆがんだ形状を呈す。表



第50図　J 15号住居址出土石器実測図（1：4）



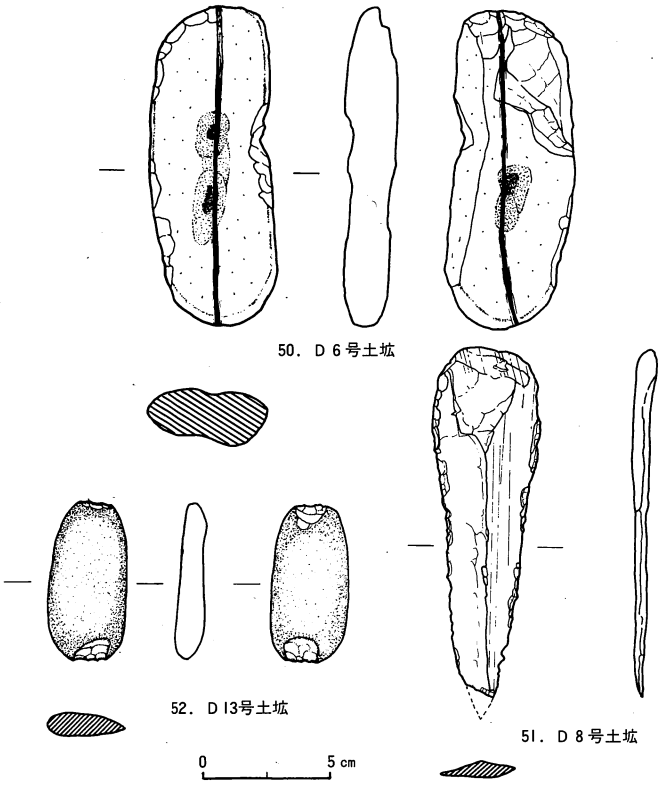
第51図　D 7号土坑出土石器実測図（1：3）

面はきれいに剝離されているが、あまり使用されていない。

48は、粘板岩の横刃形石器である。刃は鋭利である。49は、チャートの石匙で右辺を欠く横型で刃部はかなり鋭利である。

第52図も土坑内出土石器を一括した。

50の石砸は、輝緑岩質で表面に2個の凹みを有し、裏面に1個の擦られた凹みを有す。また右側面は擦られていて、快りを呈する。中央の帯状の黒線は浅い溝を持つが、石本来の黒線ではなく使用痕である。石質から硬い石でありかなり使用したとしても溝はできにくい。これほ



第52図　D 6、D 8、D 13号土坑出土石器実測図（1：3）

どの溝はかなり使用されたものである。一応有溝石砸と分類したが凹みを共なっており新しい要素が加わっている。D 6号より出土。

52もやはり石砸である。小形の切目石砸で、磨かれた硬砂岩質である。D13号土坑から出土した。

51は、D 8号土坑上面から地面に突きささった状態で出土した。青色の淡い色を呈す。中央に稜を有し両側面の鋭利な刃に刃こぼれが生じている。表面右側から着柄の先端は自然面を残し擦られている。右先端に着柄の快りが認められる。

第53図は、横刃形石器を中心にまとめた。

46、47は、J 17号住居址出土の横刃形石器である。鋭利な刃に刃こぼれが認められる。46は砂岩、47は硬砂岩である。

48は概出遺物である。輝緑岩を用いており、着柄の部分の快りが下の部分が少しズレていて縦に着柄したことがうかがえる。刃部は摩滅が著しく刃は鋭くない。それにしても着柄の痕跡がこれほど顕著な石器は稀である。鎌として使用したことが判然としている。

（古屋　公彦・島田　恵子）

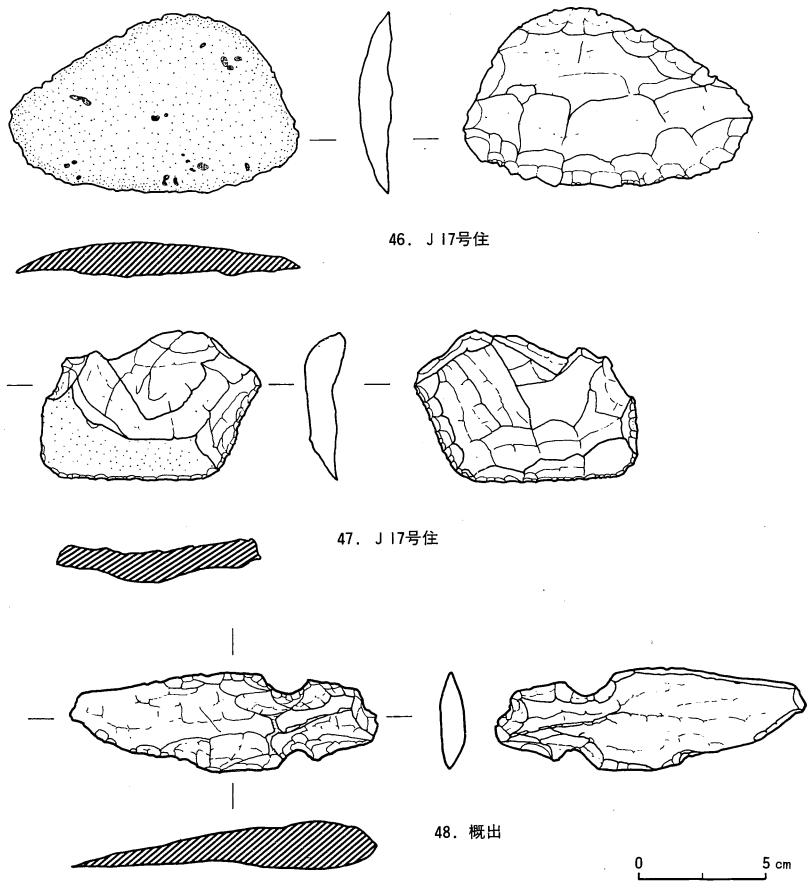
7　土　製　品

第54図は土製品を中心にまとめた。

1は、J 13号住居址出土の顔面把手状の顔面部破片である。目、口が残っていたことから判明した。器高20cm位の深鉢形土器につくものである。褐色を呈し胎土、焼成が荒い。

2は、J 15号住居址覆土上部から出土した土偶の足破片である。巾3cmの足で相当大きな胴部となろう。

3は、J 13号住居址覆土から出土した平板土偶の胴部である。粘土をぬり継いだ凸凹の胴部



第53図　上の林遺跡出土横刃形石器実測図（1：3）

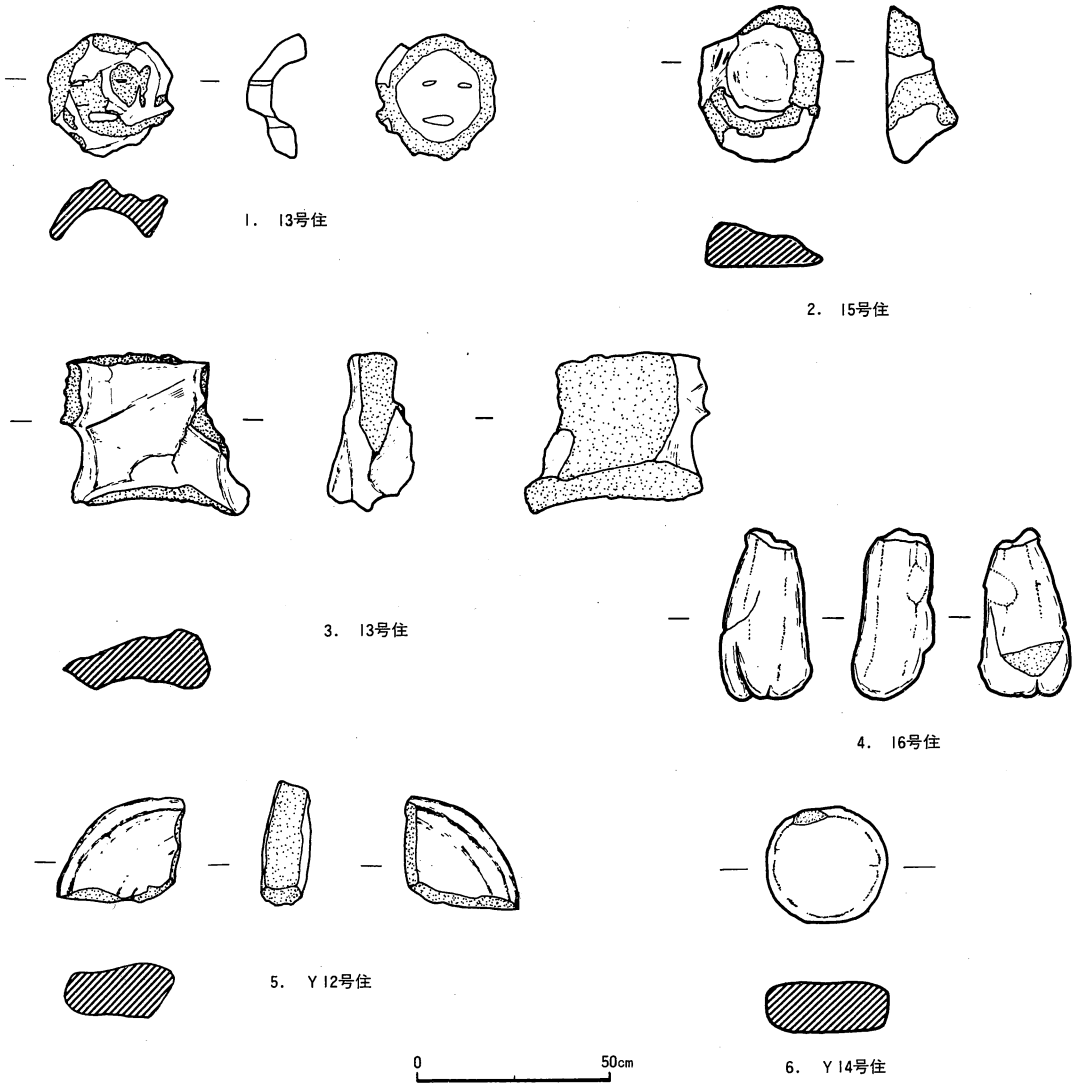
端に指頭痕が認められる。茶褐色を呈す。粗雑なつくりである。

4は、J16号住居址出土の土偶脚部である。粗雑な作りで脚の付根が簡単に取り付けられていたためか、きれいに毀たれている。褐色を呈す。

5は、弥生のY12号住居址出土の土製円盤である。3分の1を欠失する。直径4.5cmとなる。茶褐色を呈し雲母が多量に混入されキラキラ光っている。

6も同じく弥生のY14号住居址出土の、径3cmを測るやや小形の土製円盤である。指頭でナデをおこなっている。茶褐色を呈するが一部に黒斑あり。やはり金雲母がきれいである。胎土は緻密で焼成も良い。

（島田　恵子）



第54図　上の林遺跡出土土製品実測図（1：2）

第1表　出土石器一覧表

挿図番号	種別	石質	最大長(cm)	最巾	最厚	重量(g)	出土状態	備考
46－36	砥石	砂岩	19.0	8.0	5.0	19.1	Y12号住床直	弥生後期後半中島式期
46－37	〃	〃	(14.0)	(10.5)	(5.0)	(0.9)	〃	
41－2	剥片石器	黒曜石	4.3	5.7	1.0	0.3	J13号住	唐草文系Ⅱ
41－5	石鏃	チャート	1.6	1.4	0.5	3.6	J13号住Ⅱ層	
41－7	〃	黒曜石	(1.7)	(1.2)	(0.4)	(80.0)	〃	
41－8	〃	チャート	3.2	2.1	0.7	470.0	〃	
42－10	打石斧	輝緑岩	12.7	3.5	1.4	390.0	〃	
43－19	乳磨石斧	硬砂岩	(16.1)	(4.2)	(3.9)	(560.0)	J13号住Ⅱ層北周構内	
44－24	凹石	半花崗岩	8.3	8.5	4.4	390.0	J13号住配石内	
45－29	磨石	硬砂岩	15.1	5.3	3.9	560.0	〃	
46－34	砥石	砂岩	(19.0)	(8.0)	－	(350.0)	〃	
47－38	立石	〃	23.5	16.5	15.0	9,500.0	〃	
47－39	石皿	花崗岩	(21.4)	(18.0)	(8.8)	(5,500.0)	〃	
48－40	石匙	粘板岩	(7.2)	(12.6)	(0.9)	(110.0)	J13号住覆土上	
41－1	剥片石器	チャート	5.7	3.6	0.8	16.7	J15号住	唐草文系Ⅱ
41－3		黒曜石	(4.7)	(1.9)	(0.7)	(6.3)	〃	
41－6	石鏃	チャート	(1.2)	(1.6)	(0.3)	(0.5)	〃	
43－16	磨石斧	輝緑岩	(14.8)	(6.6)	(3.3)	(550.0)	J15号住床直	
44－27	凹石	花崗岩質ペグマタイト	11.4	8.6	4.3	600.0	J15号住	
45－30	磨石	粘板岩	11.0	7.7	3.0	360.0	〃	
49－41	石皿	砂岩	25.7	15.9	4.0	2,960.0	J15号住床直	
49－42	丸石	鹿塩片岩磨	13.1	15.9	15.3	4,500.0	J15号住炉内	
49－43	立石	砂岩	36.0	10.4	7.0	4,150.0	J15号住炉際	
50－44	磨石	巨晶花崗岩	39.0	11.0	9.5		J15号住床直	
50－45	－	粘板岩	25.5	3.0	3.0		J15号住覆土	
42－13	打石斧	緑泥岩	(12.2)	(3.7)	(1.6)	(120.0)	J17号住	3/4欠損　曽利Ⅳ
43－17	磨石斧	蛇紋岩	15.6	7.4	2.6	580.0	J17号住西壁側	
44－22	凹石	安山岩	17.0	11.6	10.5	3,100.0	J17号住	

挿図番号	種別	石質	最大長(cm)	最大巾	最大厚	重量(g)	出土状態	備考
44－26	凹石	硬砂岩	13.0	9.6	3.1	520.0	J 17号住	
53－46	横刃形石器	砂岩	7.1	11.2	1.4	80.0	〃	半月形
53－47	〃	硬砂岩	5.8	8.1	1.3	70.0	〃	
46－35	砥石	砂岩	(11.5)	(7.0)	(7.0)	(820.0)	J 18号住	曽利 Ⅲ
51－46	打石斧	輝緑岩	12.0	5.0	1.8		D 7号土坑	篭畑 Ⅱ
51－47	石鏃	黒曜石	1.4	1.4	0.3		〃	
51－48	横刃形石刃	粘板岩	10.0	4.9	0.7		〃	
51－49	石匙	チャート	(7.2)	(6.3)	(1.1)		〃	
52－50	石錘	輝緑岩	12.5	4.8	2.0		D 6号土坑	日向 Ⅱ
52－52	石錘	硬砂岩	6.3	3.1	0.9	30.4	D13号土坑	
52－51	(剣)	粘板岩	13.6	3.0	0.7	47.0	D 8号土坑	
41－ 9	石鏃	黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.5	D－5	グリッド
41－ 4		黒曜石	3.7	2.9	1.9	7.3	表採	
42－11	打石斧	砂岩	12.0	5.0	1.9	160.0	〃	
42－12	〃	輝緑岩	10.7	3.6	1.4	90.0	〃	
43－18	磨石斧	蛇紋岩	15.1	6.9	2.6	490.0	〃	
44－25	凹石	花崗岩	(10.1)	(6.9)	(4.0)	(410.0)	〃	
45－31	磨石	鹿塩片麻(花崗岩)岩	11.5	11.3	4.1	1,150.0	〃	
45－32	〃	高遠花崗岩	12.1	8.8	4.4	660.0	〃	
45－33	〃	砂岩	5.8	6.6	4.2	230.0	〃	
42－14	打石斧	硬砂岩	12.7	3.7	2.7	220.0	概出	
42－15	〃	〃	(17.7)	(5.9)	(2.8)	(560.0)	〃	
43－20	磨石斧	チャート	13.4	4.0	2.6	210.0	〃	
43－21	〃	〃	(10.2)	(4.9)	(2.4)	(160.0)	〃	1/3 欠損
44－23	凹石	花崗岩	(10.2)	(8.7)	(5.5)	(610.0)	〃	
44－28	〃	長砂岩	11.4	7.9	3.9	470.0	〃	
53－48	横刃形石器	輝緑岩	3.8	12.1	1.9	80.0	〃	

ま と め

石器は、剝片石器に始まって、石鏃、石錐、石皿、磨石、凹石、打石斧、磨石斧、乳棒状石斧、手斧、石匙、礫器、横刃形石器、石棒、石剣、石錘、砥石等の出土があった。

剝片石器の中で特に注目されたのは、第54図1の刃こぼれの使用痕、刃つぶしの調整は、実験によって明らかにされてはいるが、皮はぎとして最適な刃器である。石鏃は16点の出土があった。J15号住より小形の五角形鏃が出土している。石錐は4点の出土であった。石皿は概出で巨晶花崗岩製の優品がある。磨石はよく擦られているものが多く、特に円盤状の磨石は優品である。

凹石は花崗岩性が約半数を占める。打石斧は7点の出土で、分銅形1点、撥形1点、短冊形5点に区分される。磨石斧は見事な優品ぞろいである。伊那谷の磨石斧は乳棒状石斧と同様な敲打痕が顕著である。本遺跡でも6点中3点に敲打痕がみられる。J10号住よりチャート製のノミの出土があった。石匙は大形の横刃形と赤チャート製の小形及び土坑から中形チャート製が出土している。曽利Ⅳ式期のJ17号住より横刃形石器が2点、D7号土坑より1点出土した。

また、第53図48は快り状の着柄部により、鎌であることが判然としている石器であり、注目される。石棒は、J10号住より玉抱三叉文の彫刻が陰刻された有頭部片、概出の亀頭状小形石棒、表採の大形片の3点の出土があった。石剣は、概出で両先端を欠く小形が1点出土している。その他石錘が2点、砥石が2点出土した。弥生時代の石器は、Y12号住居址より砥石が出土したのみである。

（古屋公彦・島田恵子）

第3章　考　　察（第1次・第2次調査）

第1節　遺　　構

1．縄文時代の住居址

縄文時代の住居址は、中期初頭の狢沢式期（J16号住）、中期中葉の藤内II式期（J11号住）、井戸尻II式期（J2号住）、中期後葉の唐草文系II（J8号、J9号、J10号、J13号、J15号住）、曽利III式期（J18号住）、中期末葉の曽利IV式期（J17号住）の10軒が検出された。

第2表　上の林遺跡第1次調査検出住居址一覧表

（　）内推測値

遺構	平面プラン 形態	規模 長軸	規模 短軸	規模 壁高	主軸方位	炉	柱穴	時期	備考
Y1号	隅丸長方形	cm 415	cm 300	12cm ～ 20	N－12°－E	埋甕炉 南側	4	弥生後期後半（中島式期）	
J2号	——	—	—	—	——	—	—	縄文中期中葉（井戸尻II式期）	4分の1検出
Y3号	隅丸長方形	(515)	385	18 ～ 25	N－27°－E	—		弥生後期後半（中島式期）	一部攪乱
H4号	隅丸方形	500	450	15 ～ 30	N－82°－E	北東コーナーカマド	4	平安時代（国分期中葉）	第1次～第2次調査で完掘
Y5号	隅丸方形	(450)	(430)	10	(W)		(4)	弥生後期後葉（座光寺式期）	Y7号住と重複
Y6号	——	—	—	—	——				Y5号住に含まれるとおもわれる。
Y7号	隅丸長方形	(740)	—	23 ～ 45	(N－25°－E)	埋甕炉	(4)	弥生後期後葉（中島式期）	Y5号住と重複
J8号	楕円形	685	565	30 ～ 35	N－23°－E	堅穴式石囲炉	4	縄文中期後半（唐草文系II 曽利II式併行）	埋甕4個
J9号	（〃）	—	—	—	——	—	—	〃	石蓋付埋甕1 4分の1検出
J10号	楕円形	480	440	25	N－11°－E	堅穴炉	(4 ～ 6)	〃	埋甕4
J11号	楕円形	(615)	550	20 ～ 35	N－27°－E	埋甕炉	6	縄文中期中葉（藤内II式期）	一部攪乱

狢沢式期の住居址は、調査区域の関係から$\frac{1}{4}$の検出にとどまりその全貌が明らかにならなかったが、幸いにも埋甕の埋設地点にぶつかった。住居址は推測から隅丸方形を呈し、一辺340cmを測る小形住居址である。

藤内II式期（J11号住）になると大形化し550cm～615cmを測る楕円形を呈す。主柱穴は6個で東西に3個ずつ規則性をもって配列する。深さは30cm～55cmを測る。やや中央に口径53cmを測る大埋甕炉が設置されている。又、平安時代に属するとおもわれる楕円形の特殊竪穴遺構2基が住居址を切って構築している。

井戸尻II式期（J2号住）は、弥生のY1号住居址に切られ、さらに調査区の西端コーナーに位置していたため4分の1程度の検出で、わずかな遺物を採出したのみで住居址全貌を検出できなかったことは残念である。

本調査区での中心的な住居址群はなんといっても唐草文系II式期（曽利II式併行）の（J8号、J9号、J10号、J13号、J15号住）の5軒であろう。このうち、J9号とJ13号は一部分の検出にとどまってしまったが出土遺物は好資料揃いである。平面プランは楕円形を呈し、短軸440cm～600cm、長軸480cm～685cmを測る。狢沢式期から比べて規模が最高に達する。このことは土器においても同様である。ただJ10号住居址のみが440cm×480cmと小規模である。また、住居址の配列する方位も北からやや東寄りに主軸を取っていることも統一されている。さらに、埋甕の埋設位置を出入口部とした場合、J9号住は南側が出入口部となるが、J8号、J10号、J13

第3表　上の林遺跡第2次調査検出住居址一覧表

遺構	平面プラン					炉	柱穴	時期	備考
	形態	規模			主軸方位				
		長軸	短軸	壁高					
Y12号	方形	510cm	410cm	19cm～27	N－18°－W	埋甕炉2	4	弥生後期後半（中島式期）	
J13号	（楕円形）	（640）	（550）	26～36	（N－40°－E）	竪穴炉	（1）	縄文中期後半（唐草文系II／曽利II式併行）	完掘に至らない
Y14号	（隅丸長方形）	（700）	（500）	18～37	（W）	埋甕炉2	（3）	弥生後期後半（中島式期）	〃
J15号	（楕円形）	（600）	（600）	20	（N）	竪穴炉	（4）	縄文中期後半（唐草文系II／曽利II式併行）	〃
J16号	（隅丸方形）	（340）	（340）	20～25	（N）	——	（1）	縄文中期中葉（狢沢式期）	〃
J17号	（円形）	（350）	（350）	20～26	（N－10°－E）	竪穴式石囲炉	（4）	縄文中期後半（曽利III～IV式期）	一部破壊
J18号	（隅丸楕円形）	（490）	（420）	21～34	（N－21°－E）	〃	（4）	縄文中期後半（曽利III式期）	〃

号、J15号住ともに東側に出入口部をもうけている。主柱穴は4個～6個でその規模は大きい。J8号住は4個で120～95cm×70～80cmを測り楕円形を呈する。又、J15号住も同じように楕円形を呈するがJ8号住居址に比べて一まわり小さくなる。住居址の北壁際から調査区外にかかってしまったため4個の検出であったが、その配列から6個であると想定される。

この時期における炉は、床面をかなり大規模に掘り込んだ竪穴炉であるが、J8号住の炉のみが掘り込み中間に簡単な石囲いをした竪穴式石囲炉であった。また、J13号住は掘り込み際に段を有す竪穴炉であり、炉から西壁にかけての床面には敷いたという状態の配石がなされていた。屋内祭祀の場であると想定される。また、周溝はJ8号、J9号、J13号、J15号住に設置され住居内を一巡している。

曽利Ⅲ式期（J18号住）に入ると、住居址の規模は唐草文系Ⅱ式期に比べて一段と小さくなる曽利Ⅳ式期はさらに小形化する。それと並行するように土器の出土も減少する。住居の配列方位、炉、主柱穴等に大差は認められないが、ただ炉がJ8号住居址と同様、竪穴炉の中間に簡単な石囲いが築かれる竪穴式石囲炉であった。周溝はJ18号住居址に設置されている。

2　弥生時代の住居址

弥生時代の住居址は一応7軒の検出となっている。しかし、Y5号～Y7号まで重複していた3軒は、Y5号住が大規模な住居址であったため、その間仕切り的施設のために2軒と思いこんでしまった感があり、Y14号の大規模住居址からみて、1軒と見做してよいとおもわれる。

平面プランは、隅丸方形乃至長方形を呈し、規模は短径300cm、長径415cmを測るY1号住居址が一番小形である。Y3号、Y7号、Y12号住居址が短径385cm～430cm、長径450cm～515cmを測り一回り大形となる。Y5号、Y14号住居址は、長径700～740cm、短径500cmを測る大形住居址である。

主柱穴は4本長方形の規則的な配列を示しているY1号、Y12号があり、Y14号住居址は完掘したならば当然4個の検出となろう。また、5号～7号は完掘しない上に重複していて判然としない面もあるが、Y5号、Y7号ともに3個検出されていることから当然4個存在するものとおもわれる。

その他のピットとして注意しなければならないのは、Y3号、Y5号、Y12号ともに中央に5個～6個のピットが弧を描くように配列している。また、Y14号は東西に数十個並行している。深さは10cm～15cm程である。類例は、辰野町樋口内城館址遺跡6、13、22、23、32、51、53、59、65、75、83、91、101、106、110、111、116、129、139号住居址にみられる。調査者は間仕切的施設であろうと報告している。また、岡谷市志平遺跡、橋原遺跡でも同様な住居址がみられ、特に橋原遺跡では、会田進氏が第4節、弥生時代住居址と集落の章で明細な分析をお

こなっているので省略したい。

炉址は、埋甕炉でＹ１号、Ｙ７号、Ｙ12号、Ｙ14号住居址に埋設されている。Ｙ12号、Ｙ14号住居址は主柱穴内のほぼ中間部位に設置されている。

また、住居址の向きは北から12°～27°東に傾いた、Ｙ１号、Ｙ３号、Ｙ７号、Ｙ12号住居址とほぼ西を向いたＹ５号とＹ14号とがあり、大形、中形住居址との差異が認められる。

3. 土　坑

本遺跡から土坑は18基検出された。土坑の配列は群をなして同区域に集中している。縄文前期末の土坑群は南北に12m、東西10mの範囲に６基存在する。

平面プランは、円形・楕円形を呈し、長軸70～140cm、短軸65～138cmで深さは43～85cmを測る。主軸方位はほぼ北を示しているＤ６号、Ｄ９号、Ｄ18号があり、その他は10°～37°東寄りに傾き、その方位はほぼ同方向に配置しているとみてよいであろう。

土坑の性格であるが、Ｄ18号を除いた他は、規模、形態等から貯蔵穴であると考えられる。特にＤ７号土坑は、貯蔵穴の目印として西壁際に石が２ケ存在していた。Ｄ18号土坑は、主軸方位が真北を示し、テラス状の面には配石したとおもわれる状態で拳大の石が11個並べられ、土坑内底面からは、底部を欠損する深鉢が出土した。この様相から墓坑であると判断した。

また、Ｄ７号土坑は石器が多く出土した。打石斧、横刃形石器、石匙、石鏃各１点である。このような土坑からの石器出土例は以外に多く、石器の使用相手や貯蔵穴の役割り等から豊穣を祈った呪術的な意味が含まれていたものと考えられる。

第４表　上の林遺跡第１次調査検出土坑一覧表

遺構	平面プラン					備考
	形態	規模			主軸方位	
		短径	長径	深さ		
		cm	cm	cm		
Ｄ１号	円形	138	140	65	Ｎ－17°－Ｅ	前期末～中期初頭
Ｄ２号	〃	68	68	23	Ｎ－27°－Ｗ	国分期
Ｄ３号	楕円形	60	67	40	Ｎ－３°－Ｅ	〃
Ｄ４号	楕円形	92	105	40	Ｎ－８°－Ｗ	〃
Ｄ５号	不整形	113	124	43	Ｎ－13°－Ｅ	Ｈ４号住居址内検出 前期末～中期初頭
特殊堅穴１号	〃	197	215	36	Ｎ－33°－Ｗ	国分期
〃　２号	楕円形	150	210	28	Ｎ－12°－Ｅ	〃

第5表　上の林遺跡第2次調査検出土坑一覧表

遺構	平面プラン					備考
	形態	規模			主軸方位	
		短径	長径	深さ		
		cm	cm	cm		
D 6 号	楕円形	110	120	50	N	縄文前期末(日向II)
D 7 号	円形	100	100	85	N－10°－E	縄文前期末(篦畑II)
D 8 号	不整円形	65	70		N－37°－E	〃
D 9 号	(楕円形)	95	(105)	30	(N)	〃
D 10 号	円形	63	67	13	N－7°－W	国分期
D 11 号	楕円形	103	132	14	N	〃
D 12 号	〃	73	98	15	N－12°－E	〃
D 13 号	不整円形	93	95	30	N－19°－E	〃
D 14 号	隈丸方形	131	137	12	N－17°－E	〃
D 15 号	楕円形	63	78	26	N	〃
D 16 号	円形	58	60	30	N－5°－W	〃
D 17 号	楕円形	52	62	18	N－31°－E	〃
D 18 号	円形	131	135	45	N	縄文前期末(篦畑I)
小竪穴1号	楕円形	125	155		N－23°－E	時期不明

D 2 号～D 4 号、D10号～D17号土坑は、第1次調査でD 2 号～D 4 号の3基が配列ピット内に検出され、D10号～D17号は第2次調査で東西10m、南北12mの範囲内より集中して検出された。時期を決定する積極的な所見に欠けるが、D10号より「皇宋通宝」の宋銭が出土しこの年代により11世紀と判明した。ほとんどの土坑の覆土が炭化粒子混入の人為的埋土であり、規模、様相が酷似している。付近に同時期の住居址が存在していないことから、おそらく墓域であったと想定される。

今回の調査では、10世紀に比定されるH 4 号住居址1軒が検出されているが、グリッド出土遺物及び概出遺物からは国分期後葉の須恵器坏や土師器片、内面黒色坏などの出土があり、当然のことながら住居域が調査区外に存在しているであろう。　　(島田　恵子)

第2節　集　　落

1）縄文時代

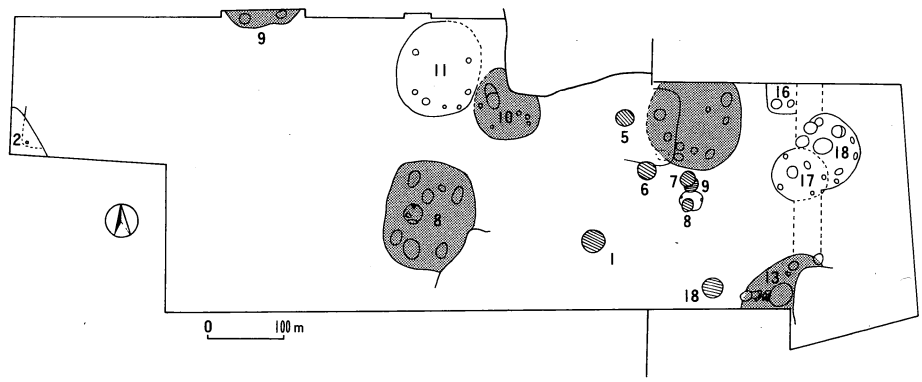
第55図は縄文時代の検出遺構全体図である。

上の林遺跡は、天竜川との比高差30mを測る段丘上に位置し、その範囲は南東側の段丘縁辺部から北西に向かって拡がる約30.000m²が遺跡であると想定され、箕輪工業高校の校舎と校庭がすっぽり遺跡内に立置しているといえる。

校舎と校舎の間の発掘区域は廃土の置場に悩まされながらも精一っぱいの面積を拡張したのであるが完掘に至らなかった住居址は、J2号、J9号、J13号、J15号、J16号とあり残念なことである。調査はまだ第1次、第2次の1.600m²を発掘したのみで数多くの遺構が校舎や校庭の下に眠っている。このような条件からして集落についての分析は不可能であるが、検出した遺構を中心に若干のまとめをしながら、今後、第3次、第4次へと調査の継続が予想されるので、全面発掘の完了する将来に向けてその予察としたい。

前期末の日向式・篭畑式期の土器片は、調査区全面の各グリッドから遺構検出作業時、あるいは遺構覆土上面より必ずといってよい程に出土している。今回は、南北に12m、東西10mの範囲内より7基の土坑が集中して検出されたのみで住居址の存在は認められなかった。しかし、多量の土器片の散布や土坑の存在から当然住居址区域が予想される。該期の住居址は土坑と住居址の区域が異なる場合があり、住居群は日当りのよい段丘中心部に存在したものと考えられる。校舎建設の基礎工事により、破壊され地ならしによって大量の土器片が下段へ運ばれたものとおもわれる。

中期初頭には、完形品の九兵衛尾根II式土器の単独出土及びJ18号住居址内でのピットの重複等から北に向かって住居群が存在したことを示唆しているといえる。また、狢沢式期の住居址が台地縁辺部に一軒、さらに中葉の藤内II式期、井戸尻II式期の住居址が各1軒検出された。



第55図　縄文時代前期末の土坑群と中期の住居群分布図（1：500）